

また、教員の年齢構成も講師を含めた若手教員や30代半ばから40代半ばの中堅教員、また、20年以上の教職経験を経た、いわゆるベテランと呼ばれる教員が比較的バランスよく配置されており、それぞれが自身の役割やキャリアを生かして児童生徒への指導に従事している。

今年度、6名の初任者が配置されており、当該校または他の特別支援学校で一定の講師経験を有する者が4名、大学院や大学を卒業してすぐに教員に採用されて赴任した者が各1名ずつであり、障害児童生徒に対する指導に関し、知識や実践にはある程度の差が生じている現状にある。

また、配属される学部についても、小学部知的障害部門の低学年に1名、中学部の知的障害部門の1年生、2年生に各1名ずつ、高等部知的障害部門の1年生、3年生に各1名ずつ、小学部肢体不自由部門に1名の配置となっている。

障害の状況も異なり、言語によるコミュニケーションが可能で教科指導の可能性を有する児童や自立活動が教育課程の中心となり日常生活指導が主な指導目標となる高等部生徒までの幅が広く、参観する授業の内容や指導方法、用いる教材も多岐にわたる。

管理職として、特別支援学校における実践が豊富で長年にわたる行政経験も経験した校長と、初めての障害児教育にあっても研修意欲が高く、また、事務処理能力に優れ、160名を越える教員集団をまとめる力量の高い教頭や、特別支援学校の教員から昇任し、現場感覚が豊富な教頭が複数配置されている。

また、経験や実践豊富なベテラン教員、中堅教員並びに意欲の高い若手教員がバランスよく配置されており、学校全体で初任者を育成しようとする雰囲気が高い。

大規模校であり、学校として校務分掌会議や教材研究等が錯綜し、多忙化ではあるものの定期的に校内研修日が設定されていて、学校独自で進めている研究や研修以外にも、自主研修として各教員が研修や研究を行う内容が進められている。

本稿では、6名の初任者がそれぞれ担当する学級の様子や児童生徒の障害状況、また、指導する単元も異なる中で、成長の様子やそれに伴う支援の内容を個々に述べる。

(1)初任者Aについて

他の特別支援学校で一定期間の講師経験を有したものの、小学部低学年を初めて担当する。

担当する領域や教科については、学級の朝の会や終わりの会の運営に始まり、個々の発達段階によって異なる課題別学習での指導、給食や歯磨き指導を含めた日常生活指導など、担当する指導分野も広いが、熱心かつ真面目に精励している。

担任するクラスの在籍児童の殆どが言語によるコミュニケーションがとれ意思表示については言葉のやりとりもできる。知的発達段階も教科学習の導入が可能な者が多く、比較的軽度な学習集団となっている。

クラスに在籍する5名は女子が2名、男子が3名だが、男子の3名が自閉性障害と目され、学習や行動に相応のこだわりや対人関係の構築に特有の困難さを有している。

ともに学級を運営する教員（以下、相担と表示する。）をはじめ指導力の高い担任集団に恵まれ、自身が主指導に入る授業をはじめサブに入る場面それぞれで多くの教唆を得ており、有形無形の学びを行っている。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

授業を行っている笑顔や各児童に語りかける優しい口調の端々に、この学級を担当して良かったという思いが反映されている。前述したように、当初は小学低学年は初めて担当する不安や困惑があったと史料するが、児童の反応を上手く引き出す周囲の教師集団の良い影響を受け、日々、どのような単元設定にすれば子どもの成長に寄与するか、また、より分かりやすい工夫を行うにはどのような教材を準備するかについて、模索する様子うかがえ、やり甲斐を持って担任や授業に臨んでいる様子が授業の成熟度を通じてうかがえる。

こちらが行った指導のポイントとして、「授業者は面白いと思う授業でなければわななければ、児童生徒はその授業を楽しまない」を提起、自身が楽しいと思えるような授業を構築するために、授業準備に努力する必要性を伝えた。

一方で、指導内容の立案段階では「2W1H」を大切にするように伝えている。

Wは「what…何を教えるか」、「why…何故それを教えるのか」、Hは「how…どのように教えるのか」を大切に授業を立案するように伝えたが、小学部段階で行う様々な指導内容において、日を追うごとに語りかけの口調や教材提示の適切さ、単元設定の適時性など「子どもがどのように学んでいるか」に配意し、授業の具体性が向上するなど、レベルが向上してきたと評価する。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように当該教員が担当する児童の障害特性に「自閉性障害」がある。

課題の理解についても視覚優位である点を踏まえ、さまざまな指示を行う場合も相担が行う工夫や同学年の学級の取り組みを参考に「構造化の手法」を活用している。

具体的には、朝の会の運営や歯磨き等の日常生活指導に写真や絵カードを多用するなど見て分かる工夫を活用するとともに、授業を進める際にも意識して取り組む様子が見られる。

一方、放課後のカンファレンスでも自閉症にかかる実態把握やアスペルガー症候群など発達障害の資料を基に説明を行い、さまざまな工夫や配慮の根拠を明確にする中で児童への対応として表情の変化や声の抑揚、用いる文言の具体性などに指導上の意識として定着している様子うかがえる。

個々の児童に関する個別の指導計画等については、直接、見る機会はないが、児童の実態や課題については的確に把握し、それぞれの実態や課題、指導目標を把握していると考える。背景には、ほぼ、毎放課後に実施するの相担との話し合いや教師集団との円滑なコミュニケーションがあると思われ、ティームティーチングを行う際の意味疎通も問題ないと捉えている。

指導のポイントとして、初任者自身が優秀なテニスプレイヤーであったことも踏まえ「良いプレイヤーは常に『謙虚』の二文字をポケットに入れている」と比喻を交えて伝えたが、文言の重さを常に意識し、児童に対するていねいな姿勢や反応を大切に受け止める態度に表出している。一方、保護者との関係構築についても良好で、連絡帳の書きぶりや参観日、保護者懇談会を通じて円滑な人間関係が構築できていると考えている。

カンファにおいて「保護者との関係構築」を題材に、日常的な良い関係構築が保護者

の信頼を得るとともに、成長を願う教師の思いを伝えることで児童との関係にも大きく寄与する旨を伝えた。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

授業に臨む際の基本的な教案作成について、各児童のねらいや活動の見通し、支援の的確さなどについて徐々に的を射た内容が記載されるようになってきた。5月の授業案では、具体的な活動内容が明確に記載されるとともに「評価の視点」が具体的に記載されている点を評価した。

一方、表記に「使役」の表現は使わないことや誤字・脱字に注意するよう指導するとともに、道具を用いた活動では、常に「安全・安心」を意識して、他の教員集団にもそのことが明確に伝わる表記の工夫を行うよう促した。

ただ、次第に授業スキルが向上してきた二学期後半の指導案では、自身が授業で行う配慮や手立て、目当てに関する具体的な記載がない点を指摘し、「自分自身が授業を進める上で大切にしたいポイントは自分が分かっていたとしても必ず明記し、ともに授業を行う他の教師にも明確に伝わるように」との指導を行った。

教材準備については、主指導を担当する際には学年全体の教材を準備するたいへんさはあるものの、児童の活動をイメージし、よりよい教材を考える意欲や笑顔で授業に臨むように留意する姿勢について、評価を行った。

一方、「教師自身が子どもにとって最も有益な教材」とのアドバイスをを行ったが、授業に寸劇が盛り込まれる際も楽しげに演出し、教師＝教材を体現する姿勢が見られる。

エ 実際の指導について

（ア）話し方や表情、指導の態度について

学年で当初は男性教諭が1名だったこともあり、「父性」の発揮も求められる存在だが、常に児童の目線に立って言葉がけを行う姿勢を維持している。

表情も柔和で小学低学年の担任として、適切な対応を心がけている。

こちらが行った指導のポイントとして、児童の立場に立った「当事者意識」を大切にし、課題が理解できない場合において「なぜわからないか」「どのように説明すれば分かるようになるか」を常に意識し、児童の様子をよく観察することを強調した。

授業を通じて、児童の立場になって学びやすい内容か、また、理解しやすい言葉がけを行えているかに留意する中で十分な成長が見られ、他の教員のアドバイスも相まって指導態度は他の優秀な教員と比しても遜色ない状況になっている。

（イ）支援や手立ての適切さについて

年度当初は、自閉性障害特有のこだわりや戸惑いを感じていた様子だが、相担の対応を間近に見る中で、児童が理解しやすい発問の仕方や教師自身が柔軟に対応する術、児童の行動等について担任として認める「許容範囲」、また逆に指導の適時性を考慮して現段階で指導すべき内容の是非について学んできた。

特別支援教育を行う上でことばがけ一つをとってもスキル等の向上は身につく

が、前述したように、児童の立場に立って考える「当事者意識」や「子どもの否定的な言動を肯定的に受け止める感性」が大切と伝えてきたが、朝の会や終わりの会における発表の声の大きさや話を聞く態度に始まり、給食指導や教科の指導等、さまざまな授業の場面においてこれを意識し、適切に対応している姿に成長が見られてきたと評価している。

(ウ) 学習環境の設定について

さまざまな指導内容を子どもたちに如何に分かりやすく提示するかについて、相担とともに工夫を行い、朝の会の手順や歯磨き、手洗いなどの日常生活指導に関する内容を絵カードやイラスト、また、ひらがなで表記するなどの工夫が教室内の随所に見られる。自身の授業の際も、教材の準備や提示の仕方に「見えないものを見えるように、分からないことを分かりやすく」といった構造化の手法が見て取れる。

指導のポイントとして、授業を進める上で大切にしたいこととして子どもたちが意欲を持てるように、導入段階では「驚き」を重視、展開では「共感」が得られるように、まとめでは「納得」を持って理解及び成就感を得られるような工夫を行うように指導したが、二学期に行った指導「芋掘り」の指導では具体物の提示や授業で行う活動を分かりやすく示した絵カードや写真を準備するなど、活動の見通しや期待感を増長させる工夫が見られた。

(エ) 評価の適切さについて

歯磨きや手洗い、授業に臨む姿勢や態度を重視する学級活動において、日常生活習慣を獲得させる声かけを常に意識する相担の影響を受け、自身も児童の授業中の姿勢や発言の内容態度等に留意し、指導の適時性や児童の成就感を重視した指導を行っている。

これらの指導のポイントとして、児童の活動や日常の態度を注視し、細かな成長も見逃さない教師側の意識が評価の大きな要素になること、一方では単に誉めたり、また、注意を行うだけではなく、児童にその内容が「伝わったかどうか」を大切にするように伝えている。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

赴任当時は、初めて小学部の低学年を担当することへの不安や担当児童の実態把握をどのように行うか、また、小学部低学年段階でどのような教育課題を優先すべきかといったも悩みがあったと考える。

日々、相担と一緒に指導を行う中で、「子ども一人ひとりに思いを寄せる大切さ」やチームで子どもの課題に迫る協議を行うこと、また、カンファを通じて「実態把握の視点やそのための工夫」を学んだとしている。

同僚や相担の指導そのものが自身にとって有意義な「研修」と捉えており、発問や説明そのものにも何らかの「教育的意図」が存在することを学ぶと共に、常に児童の側に立って「何故分からないのか」、「どのようにすればより分かるのか」を

模索する大切さについても学んだとしている。同時に模範とすべき周囲の教員をはじめ、カンファから教員として大切な資質として「子どもをまず好きになること、その子の成長や発達を第一に考え、将来の姿を鮮明にイメージする重要性や、そのために、今、何を指導すべきかを精選すること」を体感したとしている。

一方で、授業を進める上で「驚き」や「共感」、「納得」に至る過程を意識することやティームティーチングを行う上で指導者側の意図や思いを具体的に表記する指導案の作成についても多くの示唆を得たとまとめている。

(2) 初任者 B について

他の特別支援学校で一定期間の講師経験を有したものの、肢体不自由学級を初めて担当、担任児童の病理や医療的ケア、機能訓練など、学ぶべき内容が多く、当初は苦労したと思料する。

担任するクラスの在籍児童の障害や能力の違いが多岐にわたり、言語によるコミュニケーションがとれる児童や舌打ちで「イエス・ノー」を伝える児童、コミュニケーションの獲得自体が指導目標の対象になる児童など、教師として幅広い対応力が求められる。

一方、前述したように、まず体調の管理が大きな教育目標となる児童も在籍し、医療的ケアの内容や緊急時の対応など、特別支援教育特有の領域である「自立活動」を主とした指導を行う必要があることから、教科学習で取り組む内容をどのように分かりやすく工夫するかについても力量が期待される。

戸惑いもあるが、真摯に自身の立場を理解し、指導内容や方法等についてともに学級を運営する相担と相談を行い、その都度、有意な教唆を得て成長してきた。

参観した授業については、月初めにみんなで製作するカレンダーづくりや一日のはじめとなる朝の会が主たる内容だが、次第に担当する児童にも慣れて自身も笑顔や対応に余裕が見られるようになってきている。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

当初は硬さが目立った授業態度や表情が日を迫うごとに軟化し、担任自体が授業になれてきた様子が見えてくる。

こちらが行った指導のポイントとして、初任者全員にも伝えた内容だが、「授業者は面白いと思う授業でなければ、児童生徒はその授業を楽しまない」ことを伝え、対象児童の障害特性に配慮した授業内容を考え、主体性を発揮して活動できる教材づくりの重要性を伝えた。

一方、これも初任者すべてに伝えたが、指導内容の立案段階では「2W1H」を大切にするように伝えた。

朝の会でも、肢体不自由の児童にどのようにすれば自身が伝えたい内容を伝えられるかを工夫することの重要性や、教育「education」の語源は educe「引き出す」であることを伝え、問いかけに対する反応が乏しい、またはわかりにくい児童の思いをどのように引き出すかについて日々工夫を重ねる重要性を示唆してきた。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように当該教員が担当する児童の障害特性に「肢体不自由による機能麻痺」や「病理特性」がある。

放課後のカンファレンスでも「肢体不自由児に対する摂食指導」や「食物アレルギー」の内容を資料を交えて伝え、安全に関する日常の意識の重要性や児童それぞれに対する配慮の重要性を伝えた。

一方、特に医療的ケアが必要な児童については、保護者が付き添い、常に同じ教室で授業を見守っていることから、関係の構築は重要であり、初任者の段階では臆することなく、担当児童の病理や障害特性等について疑問に思ったことや分からない点を素直に尋ねる態度が必要である旨を伝えてきた。保護者が教師を見る観点として、当該児童の視点や保護者の視点の双方がある旨を伝え、保護者との良好な関係が児童の成長に大きく関わることも伝えたが、前述したように初任自身の笑顔が増えることで保護者との良好な関係が構築できていると考えている。

カンファにおいても「保護者との関係構築」を題材に、日常的な良い関係構築が保護者の信頼を得るとともに、成長を願う教師の思いを伝えることで緊急時の対応を必要とする見極めや個々の児童の特性に応じた対処の仕方など、幅広い対応を学ぶことができる旨を伝えている。

個々の児童に関する個別の指導計画等については、直接、見る機会はないが、毎日、相担との打合せ等で児童の実態や課題については的確に把握し、それぞれの実態や課題、指導目標を把握していると考ええる。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

授業に臨む際の基本的な教案作成について、徐々に的確な内容が記載されるようになってきた。当初は記載に「使役的」な表現や抽象的な内容があったが、日を追うごとに指導案に活動の具体性が記載されるとともに、学習上の支援や留意点も細かく表記されるようになってきている。特に10月の研究授業における教案では、児童観や教材感、指導観をはじめ、児童の実態把握の内容や授業の展開が具体的に記され、完成度の高い内容になっている。

この授業において、特別支援学校で日常的に行われる読み聞かせについて注意すべき内容として、絵本などの「附則9条本」の扱いについては、著作権の関係から拡大や動画に編集し直すような不用意な改良を加えないこと、また、読み聞かせや教材に用いる際の出版社に対する許諾申請の意義や重要性について、十分な配慮を行うように伝えた。

一方、教材準備にも成長が見られ、カレンダーづくりの授業を多く参観したが、毎回、用いる教材に児童主体の活動を保障する工夫が見られるようになってきている。

一例として、10月のカレンダーづくりには「芋」をモチーフとした内容だったが、色画用紙を用いなくて敢えて新聞紙を使用、絵の具で色染めを行うことによって素材の色の変化を体験する工夫を交えるなど、重篤な障害生徒にもインパクトを与えるとともに成就感を意識させる内容となった。

また、「教師自身が子どもにとって最も有益な教材」とのアドバイスを行っており、肢体不自由児童に代表されるように、反応が表出しにくい児童については、より多くの笑顔や反応を引き出すために、授業に工夫した寸劇が盛り込まれることが多いが、周囲

の教員集団にも恵まれ、それぞれの得意な分野を結集して授業を創りあげる大切さを体感したと考えている。

エ 実際の指導（姿勢保持等を含む。）について

（ア）話し方や表情、指導の態度について

当初は、初めて担任する障害でもあり、言葉がけや笑顔、また、対象児童の姿勢保持を行う際のポジショニング等のにぎこちなさが見られることもあった。

こちらが行う指導のポイントとして、障害が重篤な児童については、教師の問いかけに対する反応が見られない、または反応自体が乏しいと思われがちだが、内面での反応は大きく、その表出に至っていない場合が考えられる。

障害の軽重や反応の多少にとらわれることなく、教師自身が笑顔で楽しげに接することが重要で、それによって反応がさらに表出される場合もあることから、十分な意識が肝要と伝えた。

二学期に入り、授業に慣れるに従って初任者本来の笑顔が見られ、授業自身もよりスムーズに行えるようになってきたと評価している。

（イ）支援や手立ての適切さについて

年度当初は、肢体不自由児童への対応に苦慮している様子がうかがえたが、相担の指導の様子、また、医療的ケアに関する養護教諭や看護師の対応を間近に見る中で、介助のポジショニングをはじめ、児童の反応に対する「感性」が高まってきていると感じている。

肢体不自由教育を行う上で、対応に係るスキル等の向上は身につくが、前述したように、「物言わぬ、物言えぬ子どもへの共感性」をはじめ、児童の立場に立って考える「当事者意識」等の感性に向上が見られてきたと評価している。

（ウ）学習環境の設定について

医療的ケアが必要な児童にとっては、学校生活を送る上でも学習を行う上でも「環境」が大きく影響する。紀北支援学校にあっては、設立以来30年が経過し、当初は肢体不自由養護学校ではなかったこともあって、十分な環境設定には至っていないが、教員それぞれの知恵と工夫をだし、現況において、最も学びやすい工夫を凝らしている。

こちらの指導のポイントとして、工夫が凝らされたさまざまな環境について常に「何故このような設^{しつ}えをしているか」について考え、さらなる工夫を模索することでより良い環境構築ができる点を伝えてきた。

一方、教材においては、指導内容を重篤な障害児童に如何に分かりやすく提示するかについて、相担とともに工夫を行っている。研究授業をはじめ、さまざまな学習場面において教材選定を行い、主体性を大切にしたい工夫が見られる。

指導のポイントとして、授業を進める上で大切にしたいこととして子どもたちが意欲を持てるように、導入段階では「驚き」を重視、展開では「共感」が得られるように、まとめでは「納得」を持って理解や成就感を得られるような工夫を

行うように指導したが、二学期に入った研究授業の「三匹のやぎのがらがらどん」では、教室自体を舞台さながらに背景画や小道具を配するなど適切に装飾し、台車の揺れやがらがらどんの声を体験し、よりイメージが深まる工夫が凝らされ、活動の見通しや期待感を増す工夫が見られた。

(エ) 評価の適切さについて

対象児童の障害特性から、こちらの評価自身をどのように認識しているかについて判断が難しい場合もあるが、障害の重篤さを問わず、如何にして学習への意欲を喚起することができるかが評価の基本である旨を伝え、どのようにすればこちらの思いが伝わるかについて常に配慮する必要性についてアドバイスした。

初任者自身、ややもすれば、早口になり、また抑揚の少ない語り口になることがあるため、自身の喋り方にも気を配り、同時に笑顔の大切さや「元気」「やる気」「根気」の「三気」の重要性について示唆を与えた。

日を追うごとに笑顔が増し、授業自体にも落ち着いた雰囲気醸し出されるようになってきたこともあって、対象児童の反応や笑顔も数多く見受けられるようになってきている。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

当該初任者の自己評価として、授業への心構えについては、対象児童が肢体不自由の障害があるため、教師が常に体調に配慮し、元気な姿勢や態度で臨むことで授業に対する意欲が喚起できること、また、発語の少ない児童については教師自身が児童の反応をよく見て代弁することで授業への気持ちが盛り上がる点を学ぶとともに、自己の体調管理に係る意識が高まったとの評価を行っている。

一方、実際の授業では、ティームティーチングを行うことが多いため、研究授業等を通じてそれぞれの役割を明確に指導案に記載することや事前の打ち合わせで個々のねらい、教育目標を確認することで、課題に迫る授業ができるということを学んだとしている。

また、授業中の児童がどのように学んでいるかについても、VTRを用いたカンファの中で常に当事者意識や客観的な視点を持って臨むか、また、声のトーンや語りかけを工夫することでより児童の「学びたい」という思いに迫ることができると考えているとの評価があった。

さまざまな教材の工夫を行ったが、より子どもたちの興味関心に基づいて教師の努力を傾注することで「教材を生かすのは子どもたちの活動、そのための教材工夫の大切さ」も体験したと考えている。

(3) 初任者Cについて

他の特別支援学校で一定期間の講師経験を有し、本校に赴任して中学部一年生の知的障害学級を担任している。

担当学級の生徒は、今年度、小学校から特別支援学校に転入してきた生徒、いわゆる外進生や内進生が混在し、障害種別もダウン症や自閉傾向のある生徒や発達段階も、日

常生活習慣の確立が教育目標となる生徒や読み書き、計算などの初歩的な教科学習が可能な生徒まで多岐にわたっている。また、性格的にも積極性を発揮できる生徒や自己有能感の低い生徒がおり、指導や対応の多様性が求められる。

初任者自身、今までの講師経験から、授業を構成する教材の重要性については意識しており、当初から応分の力量を発揮し、授業の活動内容に関する映像の作成や関連するパワーポイントの作成に代表されるPCを活用した授業展開は、生徒にとってもわかりやすい授業として評価できる。

参観した授業内容は、朝の会の運営やその後の課題別学習の様子並びに自身が継続して主指導を担当する特別活動「地域の食材を用いた調理実習や防災活動」といった内容が主である。

相担も直接または間接的に授業をサポートしてくれ、授業を進める上で本人が気づかない部分を丁寧にフォローをしてくれる環境に恵まれ、日々、成長している様子がうかがえる。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

年度当初から授業を行っている表情や声質の端々に落ち着きが見られ、今までの講師経験で培った相応の自信がうかがえる。

「和歌山の郷土料理、特産品」や「防災活動」の授業を参観したが、どの授業においても綿密な授業案を作成している。また、調理実習では、包丁やガスへの配慮など、安全・安心に関する意識を徹底させる工夫が随所に盛り込まれた授業を展開している。

また、指導を行う前に、必ず自身が実際の調理を行い、生徒の活動をイメージして「どのように提示すればわかりやすいか」を常に意識している様子が見て取れる。

防災活動の指導では、災害や避難に対する生徒の意識を汲み取り、避難に際しての所持品も一般的な内容と生徒が考えるであろう品を盛り込み、主体的に活動させる意識を持って指導に臨んでいる。

「授業者が面白いと思う授業でなければ、児童生徒はその授業を楽しまない」を提起してきたが、事前に自信が実際に授業内容の活動を行ったうえで指導のイメージづくりを行っている点を評価した。

生徒の主体性を発揮させる取り組みを評価する一方で、実際の授業は自身が考えているよりも時間が必要な点や十分な活動時間を確保するためにもゆとりを持った展開を行うようにアドバイスをを行った。

一方、これも初任者すべてに伝えたが、指導内容の立案段階では「2W1H」を大切にするように伝えており、題材とする食材の選定や避難に係る物品の選定にも「何故、それを選んだのか」、「活動をとおして何を教えたいのか」、「それを教える際にとった手法がベストなのか」を常に自問しながら授業の立案や反省を行うように伝えてきた。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように多岐にわたる障害生徒を担当しているが、学年や思春期という年齢、また、個々の気質を踏まえた上で「適時性」を意識して指導を行うようにアドバイスを行ってきた。

一方、放課後のカンファレンスでもダウン症をはじめ、自閉症にかかる実態把握やアスペルガー症候群などの資料を基に説明を行い、さまざまな障害特性や指導に係る工夫、配慮の根拠等を伝える中で、指導上の意識として定着している様子が見えてくる。

個々の生徒に関する個別の指導計画等については、直接、見る機会はないが、生徒の実態や課題については的確に把握し、それぞれの課題、指導目標を把握していると考えられる。背景には、ほぼ毎日の相担との話し合いや他の担任との円滑なコミュニケーションがあると思われ、ティームティーチングを行う際もスムーズな授業を行っていると考えられる。

また、思春期に関連し、保護者との関係構築の重要性についても課題と考えられるが、カンファにおいて「保護者との関係構築」を題材に、日常的な良い関係構築が保護者の信頼を得るとともに、性教育をはじめ、思春期特有の指導が難しい内容への導入に関係するアドバイスを行ってきた。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

前述したように、授業の指導案作成について、当初からの確かな内容が記載され、二学期になってもこの点は維持できている。

教材準備も前述したように視覚的にわかりやすい工夫が凝らされたプレゼンテーションを作成し、言葉による指示だけでなく見て分かる工夫が随所に盛り込まれ、円滑な授業を行っている。プレゼンの作成において、自身が事前に単元全体にわたる作業を実際に行うことによって生徒の活動に係るイメージが明確になっている点を評価してきた。

また、学級だけでなく、学年全体の授業においても各クラスごとにそれぞれの作業内容が的確に示された工程表を作成するなど、配慮を行っている点についても評価したい。

日を迫うごとに新しい学校にも慣れ、また、次第に授業スキルも確立すると思料するが、授業の基本は指導案であり、自身が授業で行う配慮や手立て、目当てに関する具体的な記載を大切にするとともに、サブティーチャーのことも考え、授業を行う上で大切にしたい観点や個々の生徒に対する配慮、支援の手立てを明記するようにアドバイスを行ってきた。

エ 実際の指導（姿勢保持等を含む。）について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

年度当初から柔和な表情で、指導の態度は二学期後半になっても変わっていない。落ち着いた表情や自身の感情に左右されずいつも同じ態度で生徒に接することは、生徒の安心感や信頼感を醸成する基盤として評価できる。

相担が男性教諭ということもあり、学級内での父性の発揮を任せられるが、逆に思春期の女生徒に対して指導する際には、同性ということもあり、女性特有の視点から指導を行うなど、相応の配慮が必要な旨を伝えてきた。

一方、男生徒に対しても母性が期待される存在でもあり、教師としての役割や存在感を大切に、学級の生徒個々に対する課題を俯瞰的に捉えて接する大切さを伝えてきた。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

年度当初から、各生徒に対する指導のポイントは的確で、授業中の生徒の理解度や反応に対する当意即妙な対応、また、どのようにすればより理解しやすいかの工夫等の「ひらめき力」は評価できる。また、日常の指導において、対象とする生徒の課題把握も的確で、現段階では大きな問題は発出していないと考えている。

特別支援教育を行う上で指導力全般にわたるスキル等の向上は経験を積むことで身につけていくが、生徒の立場に立って考える「当事者意識」や生徒指導においても「生徒の否定的な言動を肯定的に受け止める感性」が大切と伝えており、課題が深遠で困難な対応になればなるほど、常に最善策とともに次善策や三善策を胸中に持って対応するようにアドバイスを行ってきた。

(ウ) 学習環境の設定について

前述したように、授業内容や活動に係る手順をわかりやすく提示する手法は十分に身につけており、評価できる。さまざまな写真やプレゼンテーション作成の際に、事前に自身が活動や作業を行うことによってわかりやすく提示しようとする意欲も高く、適切な学習環境の設定を意識している思いも高い。ただ、必要とする労力も大きく、自身が担当するすべての授業ごとに同様の手法を用いることは時間的にもかなりの困難さを伴うと考えられ、今後、現段階で作成したコンテンツをどのように整理して汎用性を高めていくかについて考えるようにアドバイスをを行った。

コンテンツの作成に関し、授業を進める上で大切にしたい要因として、導入段階では「驚き」を重視、展開では「共感」が得られるように、まとめでは「納得」を持って理解や成就感を得られるような見せ方や画像の工夫を行うように指導を行った。

(エ) 評価の適切さについて

当初から落ち着いた表情や態度で生徒に接しており、生徒も応分の信頼感を持って接していると考えている。ただ、活動を評価したり、場合によっては叱責する際に表出する喜怒哀楽を明確にするなど、改善の余地がある。

一方、評価とは、「○○ができない」といったようにマイナス面を取り上げるのではなく、子ども自身が、どうすれば今の自分を向上させるかについて意識させるためのものであり、できなかった面もどうすればできるようになるかについて言及するなど、生徒の課題を常に肯定的に捉える態度が必要と説明を行ってきた。また、「教師自身が子どもにとって最も有益な教材」とのアドバイスを基本に、温かい教師の言葉がけによって子どもが大きく変容すると伝え、表情をはじめことばがけにも配慮を行い、抑揚を持った対応を行うようにアドバイスを行ってきた。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

赴任当時は初めての学校であり、担当生徒の実態把握も十分でない中で、相応の不安があったとのことだが、生徒の興味や関心を把握する中で、徐々にではあるがよい授業になったとの自己評価がある。このことは、教師自身が指導内容を吟味、教材工夫に努力し、よりよい授業を行いたいという思いが生徒に伝わることで、教師が期待する以上の反応や満足感を生徒から還元してもらったという経験を積んだと評価をしている。

自身の授業を振り返る中で、生徒の考えをより深める発問の仕方や用いる教材への配意、工夫を凝らすことによって、生徒が主体性を持って授業をおこなう雰囲気醸成ができること、また、包丁等の危険な道具を扱う内容であっても、生徒個々の活動を事前に想定することで設定したねらいに到達できることを学んだとしている。特に重度の障害がある生徒の活動に対して教師の手立てを考えることで、主体性を発揮できることを実感したと評価している。

一方、特別支援学校にあっては教科・領域を合わせた指導を行うことから、別の教科指導を行う際にも他の教科に応用・発展できる内容が包含されており、それを意図することで各授業の活動が広がることを学んだとしている。

さまざまな視覚教材の作成を行うことで、「生徒のわかりやすさに配意する重要性」や授業への興味・関心が授業の成否に直結するといった経験も経て、今後も適切な教材研究に係る研鑽を積んでくれると評価している。

(4)初任者Dについて

大学を卒業し、講師経験がないままに本校に赴任、文字どおりの初任者として4月から教壇に立っている。

教員として、また、社会人として、日常生活そのものがすべて初めての体験であり、教師として障害生徒に接する経験も少なかったため、当初は大きな戸惑いとともにかんりの不安があったと史料する。

担当する学級は、中学部二年生の知的障害の学級で、情緒的に課題がある生徒も複数在籍し、又、障害特有のこだわりが多い生徒もいることから、コミュニケーションや生活指導をはじめ、さまざまな指導において対応力の幅が求められる。

幸い、存在感や指導実践ともにベテランの域に達する教員とともに、年齢は若いが授業に対するセンスが高く又意欲にあふれた教員が相担として配置されている。また、同じ学年には、指導力に優れ、いわゆる「メンター」といえる資質を備える教員も配置されており、日々の活動そのものがよい研修の材料であり、初めて教壇に立つ教員にとって恵まれた環境にあると考えている。

参観した授業内容は、朝の会の運営やその後の課題別学習並びに自身が継続して主指導を担当する作業学習や保健体育の一環として指導する性教育の授業が主である。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

年度当初は、授業そのものが初めての経験で、授業内容の策定や指導方法を例にしても発展途上の感は否めない状況であった。

担当する学年には、不遇な生育歴から大人に対して不信感を有する生徒や前述したよ

うに情緒的に課題の多い生徒が多く、中学部でも指導が困難な学年だと思料する。

担任する学級の生徒をはじめ学年の生徒の成長を願う意欲は高いが、当初はその意欲の発出の方向や方法がわからず、かなりの戸惑いがあったと考えている。

こちらが行った指導のポイントとして、編集者 嵐山光三郎の言葉を引用して「新入社員にはオリジナリティはない。『謙虚』の一言を叩き込み、『この人だ』と思う人のコピーをするのがいい。」を伝え、同じ学校にいる先輩の授業や生徒に対する接し方をまねて、そこから自身の目標や課題を見つける旨のアドバイスを行った。

前述したように同じ学年にメンターたる男性教諭が在することから、さまざまな指導において、生徒に対する伝え方や対応の仕方を真似ることで指導のあり方について学ぶことができる環境にある旨を伝えた。

一方、授業内容の立案に関して、「授業者が面白いと思う授業でなければ児童生徒はその授業を楽しまない」を提起し、授業に関する教材研究の大切さを伝え、「2W1H」を重視して単元設定に工夫を行うように伝えてきた。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように担任する学級の二人の相担が女性であり、情緒的な課題が多い男子生徒が在籍することから、排尿便指導から着替えや食事に至る日常生活の支援をはじめ、男性教諭の役割が多い学級であるが、初めて教壇に立つ教員としての実態把握はまだまだ伸長の余地がある。実態把握も経験による判断ができないことから引き継ぎ等の書類による内容に留まるとともに、保護者との関係構築の端緒となる連絡帳の記入の仕方も相担の書き方を参考にするなど、さまざまな場面で研修の機会を得ている。

一方、放課後のカンファレンスでもダウン症をはじめ、自閉症にかかる実態把握やアスペルガー症候群などの資料を基に説明を行い、さまざまな障害特性や指導に係る工夫、指導上の配慮の根拠等を伝えるとともに、思春期に関連し、保護者との関係構築の重要性についても課題と位置づけ、「保護者との関係構築」を題材に、日常的な良い関係構築が保護者の信頼を得るとともに、初任の段階だからこそ、保護者にさまざまな指導上のアドバイスを得ることができる点を伝えた。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

前述したように、授業の指導案作成についても初めての経験であり、「指導上のねらい」に関する記載も、単に活動させる内容を列挙するだけでなく、どのように生徒が活動するかについて十分なイメージを持って書くように指導を行った。

知的障害教育でよく言われる「障害児は教えてもらっていないことは知らないし、やったことがないことはできない。」「障害児は抽象的なことは理解しにくい、だから具体が大切」という言葉を題材に、実際に活動して体験する重要性やこちらの発問や説明の一つ一つにおいても言葉を厳選して具体的に伝える大切さを指導してきた。

一方、当初からパワーポイントの作成などは適切でわかりやすい内容を提示することができる点を評価し、提示する内容の重要性や何故その内容を提示するかについて考えることで生徒の理解が深まる点を指摘してきた。

二学期に入り、作業学習において「畑にチューリップを植えよう」の指導では、今ま

で以上の教材研究や準備、また、教案の精査や熟慮が功を奏し、今までで最も完成度の高い授業を行うことができた。球根の形や植える向きにも意味があり、花が咲いた際に見栄えがよくなるという説明では、他の教員からも「今まで意識したことが無かった内容」との感想があり、授業準備や教材研究に対する評価の声があがった。

日を迫うごとに学校にも慣れ、また、授業中の笑顔が増えるとともに指導の態度にも相応のゆとりが見られるようになり、生徒の初任者に対する信頼感も増してきた。

よい授業を行う経験が着実な成長に結びついた好例と評価している。

エ 実際の指導（姿勢保持等を含む。）について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

年度当初は、前述してきたように不慣れ感やぎこちなさは否めない状況であった。最初のアドバイスとして「教師自身が生徒を身近に感じることで生徒が教員を身近に感じるができる」と伝え、自分自身の長所を前面に出して、臆することなく接するようにアドバイスを行った。

年度途中にほぼマンツーマンで対応していた男子生徒が転校する中、担任として味わった寂しさとともに負担感が減少し、学級の生徒と過ごす時間が増えたことから、相応の余裕が生じたことが大きな要因と考えている。

一方、学級で唯一の男性教諭ということもあり、男子生徒が多いことから思春期の課題に向き合う必要が生じることも併せて伝えるとともに、同学年に模範とすべき男性教員がいることから、父性の重要性についても考察するようにアドバイスを行った。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

年度当初は、各生徒に対する支援や手立てに対して、経験不足もあって不十分な対応が目立った。特別支援学校にあっては、ティームティーチングを行う機会が多いが、初任という立場からの遠慮もあって、上手にサブティーチャーに動いてもらう設定が不十分だったことも一因となっている。

主指導を行う際に、自身の思いや指導のポイントに配慮するあまり、授業中の生徒の反応や疑問点に留意することができない場面が目立ったこともあり、サブの先生の支援を借りることで生徒もゆとりが生じること、ひいては主指導側にもさまざまな生徒の能力や特性に配慮できることを伝えた。

教壇に立ってデモンストレーションを行う際、例えばのこぎりを扱う活動においては、生徒の利き手にも留意した固定器具の工夫や「日本ののこぎりは引いて切る」等の説明で活動がよりスムーズに行える等のアドバイスを行った。

一方で、どのようにサブの先生に活動してもらうかを精選すること、そのための手段として指導案に自身の思いを反映することの大切さを伝えた。

特別支援教育を行う上で指導力全般にわたるスキル等の向上は経験を積むことで身につけていくが、同時に複数の教員で行うティームティーチングにおいては、サブの立場に立って一緒に授業を創りあげる重要性について改めて言及、自分一人で授業を行うのではなく、協同してよりよい授業を創りあげていく思いを全員

が共有している点についても説明を行った。

「当事者意識」として、学ぶ側の思いに共感することの重要性については折を見て説明を行ってきたが、同時にともに授業を行う側に立てばメインやサブのそれぞれに役割があること、自身がサブに入った際に、主指導がどのような思いを持っているかについて考察することでより良い授業ができることを考えるよう助言を行った。

二学期後半に実施した軽度な障害のある男子生徒を対象とした「性教育」では、自身がサブに入る中で、主指導を担当した先生との関係性もよく、思春期特有の課題についての的確に指導することができ、応分の自信が付いてきたと考えている。

(ウ) 学習環境の設定について

前述したように、授業内容や活動に係る手順をわかりやすく提示するパワーポイントの作成に係る技量や手法は身につけており、評価できる。

さまざまな写真やプレゼンテーション作成の際に、単元を精査し、さまざまな教材研究を行うことや事前に自身が活動や作業を行うことで、生徒がより内容を理解して活動に参加できることを説明したが、「一を教えるには十の知識が必要」と説明を加え、単元を説明する際に多様な観点からの説明を加えることで内容理解の一助になる点について言及した。

アドバイスの際に渡辺和子氏の言葉を引用し、「知識も雑に扱えば『雑学』にしかならないが、大切に扱えば立派な『教養』となる」と説明し、単元や教材を研究すればするほど授業に幅が広がり、子どもたちの学びも深まることを伝えた。前述したように、二学期の作業では丁寧な教材研究を行い、よい授業を展開したが、自身とともに学習を行う際には「環境設定」が重要であること、中でも最も影響力のある環境の一つに「教師自身の存在」があげられる点を体感したと考えている。

(エ) 評価の適切さについて

当初に比べ、日を迫うごとに表情や指導の姿勢に改善が見られ、生徒との関係性も高まってきた。

一例として、重篤な障害生徒が独力で朝の会を展開する場면을参観する機会を得たが、日々、接している担任が考えている以上に立派に朝の会を運営し、改めて障害生徒が持つ可能性や隠れている能力の深遠さを感じることができた。

背景には、当該の初任教員が日増しに落ち着いた表情や態度で生徒に接することができたこと、生徒からの信頼感も増してきたことで、潜在的な能力が顕在化したと考えている。

障害生徒に関する評価では、教師側の思いに反して課題に到達できない場合が多いが、評価とは、「○○ができない」といったようにマイナス面を取り上げるのではなく、子ども自身が、どうすれば今の自分を向上させるかについて意識させるためのものである点を伝えた。

知的障害教育において、できない点を伸ばすよりも、できている点に着目しそ

の部分を中心に伸ばさせることで全体の発達に大きく寄与する結果となる点を説明し、教師が行う評価の観点や視点も否定ではなく肯定感を優先すべきと伝えてきたが、日々の姿勢に成長の様子がうかがえる。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

初めての教壇ということで、当初は戸惑いや不安があったとのことだが、授業のねらいを適切に定めた上でどのように達成できるかに配意する重要性や大切さを学んだとしている。授業の主役は生徒自身だが、最初の頃は生徒の活動自体に重点を置いて指導内容を構築していたが、経験を重ねることで「何を学んで欲しいか」、「どのようなねらいを設定するか」といった教師側の意図を自覚し、より良い学びを追求したいとの思いを強く持ったとのこと。

よい授業を行う上で、まず、大切なことは教材準備の重要性。

学ぶ側の観点に立って、視覚教材の工夫やワークシートの作成などがよい授業を構築する上でのポイントであり、日ごとにその点に関する工夫を凝らすことができたとして自己評価を行っている。

一方、授業における説明や指示、発問の際にも、簡潔にして明瞭なことばを精選する重要性や常に生徒の反応を見る大切さを学んだとしている。

この「生徒を見る」という姿勢は、授業中の生徒の反応によって、臨機応変に対応を行う重要性にもつながると共に、授業のまとめの際の「評価」にも関連し、生徒の自己有能感や成就感の育成に直結することから、これからも常に留意していきたいとまとめている。

(5) 初任者 E について

本学を卒業後もそのまま本学大学院において学びを継続、講師経験がないままに本校に赴任、文字どおりの初任者として4月から教壇に立っている。

学生時代のサークル活動ではリーダーシップを発揮し、落ち着いた態度や冷静な判断で有意な経験を積んできたと考えるが、教員としても日々真摯に障害生徒と向き合い、早くから同僚の信頼を得てきた。一方、社会人として、また、教壇教員として日常の学校生活そのものがすべて初めての体験であり、教師として障害生徒に接する経験も少なかつたため、当初は大きな戸惑いとともになんかの不安があったと思料する。

担当する学級は、高等部一年生の知的障害の学級で、中学校から進学してきた外進生も多く、障害の程度も幅がある。

高等部にあっては、思春期特有のまた、就職等の社会参加を目指す上で克服すべき内容を含め多岐にわたる課題がある中で、指導者側にも相応の知識や見聞が求められる。

同じ学級を担当する相担は学校においても指導実践に優れたベテラン教員で、母性に溢れた対応をすることから生徒の信頼が厚い。また、ともに授業を担当する教員も若手だが教材研究に意欲があり、落ち着いた姿勢で適切な指導を展開し、ともに指導する日々の活動そのものがよい研修の材料として、初めて教壇に立つ教員にとって恵まれた環境にあると考えている。

カンファを受講する姿勢も真面目で熱心、さまざまな知識を吸収しようとする意欲が

高い。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

年度当初から落ち着いた授業を展開しており、教師としての素養は十分に感じるものの、授業そのものが初めての経験で、授業内容の策定や指導方法を例にしても理論から展開し、生徒の課題や実態に近接した内容に至るまでには応分の時間が必要との感想を持った。

ただ、教職に関する意欲は高く、授業中も自身の指導内容や生徒の反応を俯瞰的に見る感覚に優れ、向上心とともによりよい授業を行おうとの意欲が感じられる。

授業内容の立案に関しては他の初任者と同様に、「授業者が面白いと思う授業でなければ、児童生徒はその授業を楽しまない」を提起し、授業に関する教材研究の大切さを伝え、「2W1H」を重視して単元設定に工夫を行うように伝えてきた。

各先輩が行う授業に対しても真摯に向き合い、常に生徒の観点に立って授業を行うという気概が感じられる。

三学期に継続して取り組んできた「流木ランプづくり」の授業では、電動ドリルを用いた授業で安全に相応の配慮が必要だが、対象とする生徒の反応を予期する余裕も生じ、また、作業が終わったドリルから危険な刃をいち早く撤去するなど、安全な授業展開に配慮している様子を見ることができた

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように担任する学級の相手が女性であり、高等部という生活年齢や発達段階を考慮して男子生徒に対する指導が任せられる場面が多い旨を伝えてきた。

一方、多岐にわたる障害生徒が在籍する中で実態把握の一助となるよう、放課後のカンファレンスにおいて、知的障害の概念や指導の基本、ダウン症をはじめ、自閉症やアスペルガー症候群などの理解に関する説明を行い、さまざまな障害に固有な特性、指導に係る工夫、生活や学習上の配慮の根拠等を伝えた。

当該初任者が授業を行っている際に、授業中の生徒が教室外に出てしまうというハプニングが発生したが、授業の様子を放課後のカンファにおいて全員でVTRで視聴した際、授業者から、以下のような反省が述べられた。

曰く「生徒の様子をよく見るという鉄則は理解していたものの、実際には視線を全員に配っていたが、個々の反応や態度を注視していたわけではなかった。」と。

いわゆる失敗例だったが、貴重な事例として初任者全員がそれぞれに、改めて授業中の生徒の様子を観察する難しさを共有した。

また、実態把握の方法として、指導要録等による引き継ぎが多いが、記載者が異なる中で、客観的な事実や内容をどのように記載するかについても難しさが伴い、記述の観点が必ずしも統一できていないことも含め、文書と並行して口頭での聞き取りや伝達の重要性を意識するようにアドバイスをを行った。

保護者との関係構築の重要性についても課題と位置づけ、「保護者との関係構築」を題材にカンファを行うとともに、日常的な良い関係構築が保護者の信頼を得る一因になると説明、そのためには、学校で発生又は発症した事故や病気をはじめ、些細な事案で

あっても自身の判断で済ませるのではなく、「報・連・相」を例に管理職や学部主事に報告や連絡、相談をした上で速やかに保護者に連絡することの重要性について示唆を行った。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

授業の指導案作成についても初めての経験であるが、当初からの射た内容を記載し、自身が授業に対するイメージを明確に持って臨んでいる様子が見えてくる。

ともに授業を行う先輩教員の指導案も参考に、単元設定において大切にする内容や教材の特性やどのように授業に活用するかについて考察するよう、指導を行ってきた。

こちらの参観の日程の関係で、美術の授業を見る機会が多いが、完成品やそこに至る経緯を丁寧にパワーポイントで表示し、各生徒に見通しを持って作業に参加する基盤を意識することができている。当該初任者に対しても、知的障害教育でよく言われる「障害児は教えてもらっていないことは知らないし、やったことがないことはできない。」「障害児は抽象的なことは理解しにくい、だから具体が大切」という言葉を題材に、実際に活動して体験する重要性やこちらの発問や説明における具体性の大切さを指導してきた。

日を追うごとに生徒への対応や指導に慣れてきた様子が見られるとともに、授業構築の適切さや真摯な授業態度等、当該初任者に対する生徒や同僚の信頼感も増してきていると感じている。

エ 実際の指導（姿勢保持等を含む。）について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

4月当初から、性格そのものに温厚で落ち着いた雰囲気を持って生徒に接している。指導の態度や生徒を大切にしている観点は当初から見られている長所であり、今後の教員生活を支える基軸だと評価を行った。

二学期前半の授業の様子をカンファレンス時にVTRで確認した際、生徒の様子を授業中に観察しているつもりが、実際は生徒の様子、特に授業中の不安や不満について教師に伝えたい内容が十分に読み取れていない状況があった。

初任者全員にいえることだが、生徒を見ているようでも得てして見落としていくことが多く、一方で子どもたちが教員自身をよく見ていることが如実に現れた一例と考えている。教師のさまざまな言動や所作が指導に大きく影響する内容を確認したカンファということもあり、今後も大切にしたい内容を全員が共有する機会となった。

こうした反省や自身の研鑽もあり、3学期の授業では授業中に生徒の反応を予測し、常に生徒中心の授業を指揮する中で生徒同士のトラブルに発展しそうな雰囲気を事前に察知し、双方に適切な注意を行うなど、授業中の配慮の幅も広がっている。また、生徒が主体的に行う「手伝い」等にも留意し、適切な評価を行うことで生徒の自己有能感の醸成にも寄与した対応が印象的であった。

一方、高等部という思春期特有の悩みを抱えがちな生徒を指導する立場として、男性教諭として、どのような指導ができるのかについても常に意識し、学部内や

校内に模範とすべき男性教員を見つけて、父性の重要性についても考察するようにアドバイスをを行った。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

大学や大学院でさまざまな理論や指導法について学んで来たこともあって各生徒に対する支援や手立てに対して、当初から満足すべき状況にあった。

実際の教育現場においては、個別の指導計画に代表されるように総括的な指導内容を確立した上で、個々の課題に最も適した指導目標の策定や指導方法を用いることの重要性を経験したと考えている。

カンファレンスでも一般的な障害特性の解説を行う中で、特に担任する生徒の状況にも触れ、さまざまな機会を捉えて考察する視点を持つようにアドバイスをを行った。

一方、指導の大原則として、学ぶ側の生徒の視点に立って、自身の指導を省みる大切さを説明し、「教える」観点とともに生徒の側に立つ「当事者意識」として、「学ぶ」観点も持って自身の授業を客観的に捉える意識の重要性を説明した。

(ウ) 学習環境の設定について

4月当初から授業内容や活動に係る手順をわかりやすく提示するパワーポイントの作成に係る技量や手法は身につけており、評価できる。

初任者全員に伝えたことだが、生徒が学ぶ中で環境は影響は大きい重要なファクターだが、物理的、空間的な環境設定以上に教師そのものが効果的な環境になりうる意識を持つことが学習環境整備の基軸になる。

前述したが、初任者自身が持つ笑顔や穏やかな雰囲気、生徒の学ぶ意欲や教師に対する信頼感の礎になる点を評価したが、授業時間の流れの中では抑揚を持って説明や生徒に対応する必要があること、指導の重要性や、是非、教えたポイントについては、表情や声質、声の大きさも工夫して生徒に肉薄するようアドバイスをを行った。

(エ) 評価の適切さについて

当初から生徒に寄り添って「よい部分を見つけよう」とする姿勢は一貫している点を評価し、そもそも障害生徒に関する「評価」では、課題に到達できない点を取りざたするのではなく、生徒自身が、現状の自分の能力を自覚し、どのようにすればより良い自分になれるかを気づかせることが重要なポイントである点を改めてアドバイスした。

他の初任者にも指摘したが、知的障害教育において、できない点を伸ばすよりも、できている点に着目しその部分をさらに伸ばさせることで全体の発達に大きく寄与する結果となる点を説明し、教師が行う評価の観点や視点も否定ではなく肯定感を優先すべきと伝えてきたが、周囲の教員集団の温かい視点並びに本人の温厚で一人ひとりの生徒を大切に、公平に評価しようとする姿勢を評価した。

三学期の授業を見た際、授業の自己評価シートにも生徒が自分で頑張った点を

記入できるようにイラスト等の分かりやすい工夫を行い、自身の頑張りを適切に伝える工夫を行うなど、日々の授業に精励している様子が見える。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

高等部生を担当する上で、年度当初から生徒との関係構築の重要性について意識してきたという。

生徒の生活年齢を重視し、生徒の緊張や不安を和らげるためにも受容的共感的な姿勢で接する態度を、まず、授業に臨む心構えとして設定することからはじめたとのこと。このことは個々の生徒の実態把握を行う上でも有効で、関連資料で個々の家庭での様子や同僚との協議、個別の指導計画等を参照するだけでなく、生徒との関係性が増すことでさらに個々の課題に迫ることができたとする。

言わば実態把握の多面的な要素を意識することで実際の指導が生徒の「力」の醸成に寄与していることを体験したと考えている。

また、各生徒の「最近接領域」に対する意識や「主体的に学ぶための工夫」に配意することで指導目標の設定や使用する教材の選び方にも進歩が見られ、「授業とは子どもの発達を保障し、課題に迫るためのもの」という意識をより強く持ったと考えている。

一方、「教師も重要な教材、教育環境の一つである」ことをカンファ等で意識することで、自身の日常の言動にも配意する重要性を学んだとしている。

教師個々の指導以上に集団でねらいや指導目標を考えることでより教育効果が高まることを体験し、同僚以外にもさまざまな専門家や保護者、また、本人と課題意識を共有することで、個々の「生徒の困難さや課題」に迫る重要性や可能性を学んだとしている。

(6) 初任者 F について

本学を卒業後、現在の勤務校で1年間の講師経験を経て新規採用教員に採用された。

講師を経ているだけに、授業そのものには経験からくる慣れが感じられるが、この「慣れ」を題材に、「慣れには大きく分けて三種類の意味がある」ことを説明、「慣れ」には文字どおり、心に一貫した思いを持つことが重要で、経験で得たスキルや実態把握のコツを大切にすること。

一方、「狎れや馴れ」は、経験に甘んじて現状維持に満足感を得て向上心が見られないこと、「彘」偏に手の甲といった漢字に現れるように、対生徒に対しても行き過ぎた親近感が表出することを自戒する大切さを説明、また、「熟れ」は、指導経験やさまざまな知識が熟成し、他の教員の模範となる姿であることを文字の意味とともに助言した。

担当する学級は、高等部三年生の知的障害の学級で、学年においても重篤な障害生徒が在籍し、言語によるコミュニケーションが行いにくい生徒や自閉傾向からくるこだわりが強い生徒がいることで、日々の指導や間近に迫った卒業後の社会参加に関する指導内容も任せられ、日々、奮闘している。

相担は行政経験もある中堅教員で、さまざまな観点から生徒の可能性や課題を掌握し、日常的に有意なアドバイスをくれることから、日々の学校での活動そのものがよい 研

修になっている様子がかがえる。

性格的にも物怖じをせず、授業中も主指導の教師に対して自分の考えや思いを率直に伝えることができる点を評価してきた。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

年度当初から落ち着いた授業を展開しており、特に自分が興味を持った単元や指導すべき内容が確定している授業では、自身のキャラクターも相まって面白い授業を行うことができる。

その意味で、「授業者が面白いと思う授業でなければ、児童生徒はその授業を楽しまない」というこちらの提起を十分に理解していると考えている。

一方、重篤な高等部生徒に指導する内容を十分に吟味することの重要性も示唆、授業に関する教材研究の大切さを伝え、「2W1H」を重視して単元設定に工夫を行うように伝えてきた。

前述したが、他の先輩教員と指導を行う際、サブの立場から積極的に発言を行い、指導内容に対して生徒の視点から「わかりやすいかどうか、意欲を持つことができるかどうか」を意識している様子がかがえる。この点に対しても評価する一方で、自身が主指導を行う場合も今以上に対象とする生徒の能力や興味・関心に寄り添って授業構成を意識するよう、アドバイスを行ってきた。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように重篤な生徒を指導しているが、それぞれの特性を理解している。

障害児を指導する場合、生徒が持つ能力とともに病理が起因するさまざまな制約や学びにくさ、行動要因を把握することで今まで以上に実態把握が的確になること、また、卒業生を送り出す側として福祉部局や企業との連携を行うことが重要であり、パスポートたる「個別の教育支援計画」に係る記述にも応分の記載が必要なことをアドバイスした。

個別の指導計画そのものを見る機会はなかったが、卒業に際しては、保護者との意思疎通や情報交換が重要であり、就職に関しても生徒自身の「できること」と保護者の「就かせたい職種や仕事の内容」には差が生じること、卒業後の社会参加の際にも今まで学校が行ってきたさまざまな対応や渉外、連絡が保護者に委ねられることを説明し、現在においても行える連携を進めるよう、アドバイスをを行った。

障害生徒に対する実態把握の一助となるよう、放課後のカンファレンスにおいて、知的障害の概念や指導の基本、ダウン症をはじめ、自閉症やアスペルガー症候群などの理解に関する説明を行い、さまざまな障害に固有な特性、指導に係る工夫、生活や学習上の配慮の根拠等を伝えた。

当該初任者と重篤な障害生徒に感に信頼関係が構築されている点に関し、常に生徒の立場に立って考えようとする姿勢を評価した。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

前述したように、自身が十分に消化した内容を指導案作成に反映することは適切で、例えば、年度当初に行った「修学旅行」に係る指導では、生徒にわかりやすいようにパ

ワーポイントを工夫し、各場所での活動やマナーやルール等の留意事項がわかりやすく示されている。その上で、学校生活そのものが生徒にとっては社会参加の端緒となり、時刻を示す教材でも単にデジタル表記だけでは無く、文字盤を用いたアナログ表示を併用することで日常生活に汎化できる旨のアドバイスをを行った。

一方で、重篤な生徒に職場実習を行う際の見通しを持たせる授業においても各生徒それぞれの活動や日程を写真やカレンダー等を用いて効率的に提示し、わかりやすい内容に仕上がっている点を評価した。

他方、特に美術での制作単元「ちぎり絵での表現」においては、当該初任者が見本として提示した完成品が逆に災いして、各学級ともに同じ表現・内容の壁面になってしまったことから、共同制作の観点で教師の見本を模写するだけでは画一的な作品になってしまうこと、それぞれのクラスの実態に応じた内容を作成するように事前の説明を行うことをはじめ、作成過程で各生徒の感性やオリジナリティを重視する工夫を加味する教師の「意図」を明確にするようアドバイスをを行った。

その過程において、当該初任者に対しても、知的障害教育でよく言われる「障害児は教えてもらっていないことは知らないし、やったことがないことはできない。」「障害児は抽象的なことは理解しにくい、だから具体が大切」という言葉を題材に、実際に活動して体験する重要性やこちらの発問や説明の際の具体性の大切さを指導してきた。

エ 実際の指導（姿勢保持等を含む。）について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

年度当初から、親しみやすい表情や雰囲気を持って生徒に接している。

対象生徒が重篤な知的障害並びに情緒的な課題も有していることから、教師に対する好き嫌いや相性の良し悪しも指導には大きく影響するが、良好な関係が構築できており、一人ひとりの生徒を大切に表情や行動を理解しようとする姿勢が功を奏している点を評価した。

背景には、一緒に指導を行う相担の生徒に対する姿勢や対応が大きく影響していると考えられるが、教師の発問や説明がどのように生徒に伝わっているかについて常に自問している成果だと考えている。

一方、初任者全員にいえることだが、生徒を見ているようでも得てして見落としていることが多く、一方で子どもたちが教員自身をよく見ていることを説明し、教師のさまざまな言動や所作が指導に大きく影響するという内容をカンファにおいて確認した。高等部という思春期特有の悩みを抱えがちな生徒を指導する立場として、男性教諭として、どのような指導ができるのかについても常に意識し、学部内や校内に模範とすべき男性教員を見つけて、父性の重要性についても考察するようにアドバイスをを行った。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

特別支援学校で行うティームティーチングにおいて、サブの果たす役割は大きいと説明してきたが、先輩教員が主指導を行う場面においても、サブとしての役割や生徒の反応をよく見ており、説明の追加が必要な場合は躊躇せずに修正しよ

うとする意欲を評価した。

大学において「教育や指導方法」についてさまざまな理論や指導法を学んできたと思料するが、改めて初任者という立場にあっては、それらを検証しながら授業に臨むことが重要であり、そこから自分なりの指導の観点や生徒の実態に即した工夫を学ぶことができる点についてアドバイスをを行った。

前述したように、重篤な障害生徒の思いに即して授業を構成しようとする意欲は高く、教師としての「教える」観点とともに、生徒の立場で「学ぶ」観点も持って自身の授業を客観的に捉える意識を持つ点を評価している。

(ウ) 学習環境の設定について

前述したように、授業内容や活動に係る手順をわかりやすく提示するパワーポイントの作成に係る技量や手法は身につけており、評価できる。

初任者全員に伝えたことだが、生徒が学ぶ中で環境は影響は大きい重要なファクターだが、物理的、空間的な環境設定以上に教師そのものが効果的な環境になりうる意識を持つことが学習環境整備の基軸になる。

前述したが、初任者自身が生徒を大切にしている意識と雰囲気、重篤な生徒に対しても好影響を与える旨を説明したが、指導の際に表情にあまり変化が見られないことから、最も生徒にインパクトを与える環境が教師自身という点も説明、声の抑揚や表情の変化を工夫して指導に当たるよう、アドバイスをを行った。

(エ) 評価の適切さについて

年度当初から生徒に寄り添って「よい部分を見つけよう」とする姿勢は一貫している点を評価するとともに、高等部三年生という生活年齢を考慮し、学校での評価そのものが社会参加を行った際、進路先が行う重要な判断材料となる点を伝えた。その中で「評価」とは、課題に到達できない点ばかりを記述するのではなく、そこに至る指導の経過や現状、また、効果的な対応に係る考察も交えて記載することで、卒業後も継続して行われる指導や支援の連続性につながることを説明し、常に肯定的な観点を大切に作成する意義を伝えた。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

高等部三年生の重篤な障害生徒と向き合う中で、個々の生徒の実情に留意した教材工夫の重要性を、まず、学んだとしている。

常により良い教材を模索する中で、実際の授業で活用する中で試行錯誤し、改良や工夫を重ねることの意義や大切さを意識し、そのことで授業を行う側にも「自信」が生まれ、より分かりやすくまた学ぶ側にとっても楽しい授業になることを経験できたという。

指導案についても研鑽を深める中で、以前は「授業の流れを明記するフローチャート」的な内容と考えていたことが改善され、「自信が授業で大切にしたいポイントや指導の重点を明記する」ことでサブの教師とも連携が図れ、指導者側にとっても授業の全体像が具体的にイメージできたと評価している。

授業を行う際に、教師の問いかけや説明、声のトーンや動き一つとっても必ず何らかの「意図」があり、生徒個々の学びに立って授業内容の立案や教材研究に関して「何故それを指導するのか」といった教師の思いが重要であり、これからの授業活動にもこの「教育的な意義」を大切にしていきたいとまとめている。

3 和歌山さくら支援学校について

当該校は、46学級、児童生徒数が190名近く在籍し、教壇教員数も80名を越える規模で、本県でも大きな規模の特別支援学校となる。

紀北支援学校とは正反対で、本県で最も新しく設置された知的障害特別支援学校として県内で初めて高等学校の敷地に併置され、共生教育の具体としてさまざまな取り組みを実施する中で開校以来5年目を迎えた状況にある。

最も新しく設置された学校であり、指導実践等、教育資源の蓄積では、紀北支援学校には及ばないものの、地域を支援者として巻き込んだ進路指導の充実や教材・教具の開発、肢体不自由児童生徒に対する自立活動の分野において研究の進取性に富んだ実践を行っている。

また、教員の年齢構成も紀北支援学校と同様に、講師を含めた若手教員や30代半ばから40代半ばの中堅教員、また、相応の教職経験を経た、いわゆるベテラン教員がバランスよく配置されており、それぞれが自身の長所やキャリア、実践を生かして指導に当たっている。

当該校には、今年度、4名の初任者が配置されており、当該校または他の特別支援学校や小学校で一定の講師経験を有する者が3名、大学を卒業してすぐに教員に採用されて赴任した者が1名であり、障害児童生徒に対する指導に関し、経験や学びについて差がある状況にある。

また、配属される学部についても、小学部知的障害部門の低学年に1名、中学年に1名、中学部の知的障害部門の1年生、3年生に各1名ずつの配置となっている。

児童生徒の障害の状況も異なり、言語によるコミュニケーションが可能で教科指導の可能性を有する者や自立活動が教育課程の中心となり日常生活指導が主な指導目標となる生徒までの幅が広く、参観する授業の内容や指導方法、用いる教材も多岐にわたる。訪問する曜日を学校の行事や都合により当該校に一任したため、訪問する曜日に初任者が主指導を行う場面が少ない状況や同一の教科の指導になったり、小学部低学年にあっては、早帰りの関係もあって午前中の授業を参観するだけの状況があり、次年度以降の改善点として当該学校長に訪問日の授業について斟酌を依頼した背景がある。

紀北と同様に特別支援学校における実践が豊富で長年にわたる行政経験も経験した校長と、他校の経験も含め経験の長い教頭や学部主事から昇進し、部内の掌握に富んだ教頭の複数配置のもと、経験や実践豊富なベテラン教員、中堅教員並びに意欲の高い若手教員がバランスよく配置されている。

本稿では、4名の初任者がそれぞれ担当する学級の様子や児童生徒の障害状況、また、指導する単元も異なる中で、成長の様子やそれに伴う支援の内容を個々に述べる。

(1)初任者Aについて

本学の特別支援教育教員養成課程を経て、卒業後、すぐに本校に配置された文字どおりの初任教員である。

大学時代に、障害児教育に関する多くの知識や研鑽を積み、実際の勤務でも放課後に、日々、先輩教諭とともに教材研究や授業の総括を行うなど、熱心かつ真面目に精励している。

担当学部は小学部の新入生を担当しており、初めて特別支援学校に我が子を就学させた保護者も多いことから、指導内容の策定や指導方法の研鑽以外にも児童の実態把握や保護者との関係構築が大きなファクターを占める。

相担として指導力豊かな中堅教員と講師経験は二年目だが、生徒に寄り添う感性が高い講師とともに学級を担当している。

担当児童は、内言語は豊かなものの、障害特性からくるこだわりが強い児童をはじめ自閉傾向を有する児童、言語によるコミュニケーションが可能な児童や、比較的、障害が軽度で教科指導の前段階に位置する児童まで多岐にわたる。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

本格的に授業に臨むのは初めてであり、日々、さまざまな戸惑いや悩みがあると想定されるが、日々、児童に向ける柔らかい表情や児童一人ひとりを大切にしようとする態度に特別支援学校の教員になった喜びが感じられる。

前述したように、初めての教壇教員として不安があったと思料するが、児童を温かく見守るとともに反応を上手く引き出す周囲の教師集団からの良い影響を受け、日々、やり甲斐を持って授業に臨んでいる様子がうかがえる。

参観した授業は、小学部低学年ということで午前中の朝の会の運営や自身がサブとして入る音楽の授業、その他、特設される学校行事の事前学習や当該授業に限定されるが、先輩教員の指導を間近に見る中で日々研鑽に努めている様子がうかがえる。

こちらが行った指導のポイントとして、「授業者は面白いと思う授業でなければ、児童生徒はその授業を楽しまない」を提起、授業中にともに授業を行う教員がいかにも楽しそうに授業を行い、児童を「学ぶ雰囲気」に引き込む様子や自身が率先して活動を楽しむ様子を参考にする旨を伝えた。音楽の授業ではサブとして、又ピアノも担当するが、指導内容を策定する際や授業の実際において、初めての楽曲であっても躊躇することなく意欲を持って指導しようとする意欲を評価している。

一方で、指導内容の立案段階では他の初任者と同様に「2W1H」を大切にするように伝えてきた。

当初は児童に対する視線や発問の様子、自身の笑顔も少なく、授業に対する不慣れな状況が見られたが、二学期以降、自然な笑顔や語りかけの口調など、指導の経験を積むごとに改善されており、同調して授業レベルが向上すると期待している。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように当該教員が担当する児童は、今春に特別支援学校に入学した状況にあり、当初は、まず、学校生活に慣れるという課題があった。年度早々は児童なりの緊張

もあり、引き継ぎ資料に記載されている内容とは異なる状況もあったと史料するが、持ち前の明るさと積極さが功を奏し、また、相担との連携もよく、的確に実態把握が行われると考えている。

個々の児童の教育目標策定の際も独りよがりになることなく協調性を持って対応し、先輩教員のアドバイスも素直に聞くなど、学校という組織において資質や適性が高いと考えている。

一方、放課後のカンファレンスでも自閉症にかかる実態把握やアスペルガー症候群など発達障害の資料を基に説明を行い、学生時代に得た知識について復習を兼ねて、定着を図る様子が見える。

個々の児童に関する個別の指導計画等については、直接、見る機会はないが、児童の実態や課題については的確に把握し、それぞれの実態や課題、指導目標を把握していると考えられる。背景には、ほぼ毎日の相担との話し合いや教師集団との円滑なコミュニケーションがあると思われ、実際に音楽の授業を見ながらティームティーチングを行う際、意思疎通も問題ないと考えている。

保護者との関係性については、教員になって初めての経験でもあり、カンファにおいて「保護者との関係構築」を題材に、日常的な良い関係構築が保護者の信頼を得るとともに、成長を願う教師の思いを伝えることで児童との関係にも大きく寄与する旨を伝えた。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

授業に臨む際の基本的な教案作成について、自身が作成した指導案自体は多くなく、これに係る具体的な指導は十分に行えていない。

また、参観した授業の殆どが音楽の授業で、自身がピアノ伴奏やサブ指導に入る関係で、このことに対する具体的な指導は行えていないが、朝の会等による指導については、朝の会において日中の活動に見通しを持たせる工夫をはじめ、歯磨きや手洗い、給食の諸準備等、日常生活指導に係る内容等においては、担当児童の障害特性をかんがみるとともに視覚優位である点を踏まえ、さまざまな指示を行う場合も写真や絵カードを多用するなど見て分かる工夫を行うなど「構造化の手法」を活用している。

一般論として、指導案には授業で行う配慮や手立て、目当てに関する具体的な記載の重要性を伝え、「自分自身が授業を進める上で大切にしたいポイントは自分が分かっていたとしても必ず明記し、確認を行う一方でともに授業を行う他の教師にも明確に伝わるように」との指導を行った。

一方、放課後のカンファレンスでも自閉症にかかる実態把握やアスペルガー症候群など発達障害の資料を基に説明を行い、さまざまな工夫や配慮の根拠を明確にする中で指導上の意識として定着している様子が見える。

エ 実際の指導（姿勢保持等を含む。）について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

当初から表情も柔和で児童に対する視線や笑顔など小学低学年の担任として、適切な対応を心がけている。

こちらが行う指導のポイントとして、児童の立場に立った「当事者意識」を大切に、課題が理解できない場合において「なぜわからないか」「どのように説明すれば分かるようになるか」を常に意識し、児童の様子をよく観察することを伝えた。

一方で、保護者の立場に立って児童と対応する重要性も伝えたが、まだ母性の実感が伴わないこともあり、注意の口調についても過剰に伝わる懸念も含め、障害特性に配慮した伝え方の必要性をアドバイスした。

経験を踏む中で、日常の授業を通じ、児童の立場になって学びやすい内容か、また、理解しやすい言葉がけを行えているかについて常に児童の反応を大切にす姿勢の中で十分な成長が見られる。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

年度当初から、大学で学んだ理論を具体化しようとする意欲が見られていた。

実際の学級運営の中で、相担の指導を間近に見る中で、児童が理解しやすい発問の仕方や児童の問題行動に教師自身が柔軟に対応しうる「範囲」の見極め、また、指導の適時性を考慮して現段階で最優先で指導すべき内容の是非について日々研修を重ねてきたと考えている。

特別支援教育を行う上で、言葉がけ一つにとってもスキル等の向上は身につくが、前述したように、児童の立場に立って考える「当事者意識」や「子どもの否定的な言動を肯定的に受け止める感性」が大切と伝えており、さまざまな授業の場面においてこれを意識し、対応している姿に成長が見られると評価している。

(ウ) 学習環境の設定について

さまざまな指導内容を子どもたちに如何に分かりやすく提示するかについて、相担とともに工夫を行い、前述したように朝の会の手順や歯磨き、手洗いなどの日常生活指導に関する内容を絵カードやイラスト、また、ひらがなで表記するなどの工夫が教室内の随所に見られる。自身の授業の際も、教材の準備や提示の仕方に構造化の手法が見て取れる。

指導のポイントとして、授業を進める上で大切にしたいこととして子どもたちが意欲を持てるように、導入段階では「驚き」を重視、展開では「共感」が得られるように、まとめでは「納得」を持って理解と成就感を得られるような工夫を行うようにアドバイスを行った、現段階でいきいきと楽しそうに学校生活を送る児童の姿から指導の的確さを類推することができる。

(エ) 評価の適切さについて

歯磨きや手洗い、授業に臨む姿勢や態度を重視する学級活動において、個々の指導目標を意識して対応する相担の様子を参考に、日常的に指導の適時性や児童の成就感を重視した指導を行っている。

指導のポイントとして、児童の活動や日常の態度を注視し、細かな成長も見逃さない教師側の意識が評価を行う上で大きな要素になること、一方では単に誉め

たり、また、教師側の視点として「注意を行った」だけに留まらず、その内容がどのように児童に「伝わったかどうか」を大切にするように伝えている。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

当該初任者の自己評価として上記ア～エの4領域の殆どで自身が成長していると感じている。小項目の内、3分の2以上に○が付記され、特に「待つ」ことの重要性や支援の見極め、学習環境の設定や指導計画の策定などを意識してきた様子がうかがえる。

一方、課題として、さらに授業を構造化することや実態に応じた教材設定、授業中の立ち位置やまとめにおいて評価の内容を児童に上手く伝えることを意識すると記されているが、いずれも水準以上の対応を行っており、本人の謙虚な姿勢とともに向上を期す意欲と受け止めている。

当職の評価や自己評価が高評価となった背景には、自身の努力や頑張り、児童を大切に思う気持ちの他、担任間の良好な情報交換や先輩の授業から真摯に学ぶ姿勢があると考えており、次年度以降もさらに資質や授業力の向上が期待される。

(2) 初任者Bについて

本学の特別支援教育教員養成課程を経て、卒業後、すぐに大阪の小学校で講師として採用され、今年度、改めて本校に配置された教員。

大学時代に、障害児教育に関する多くの知識や研鑽を積んだが、実際の勤務経験は小学校であったため、赴任当時は、対象児童の実態の違いや指導内容や方法、支援や手立ての違い、また、特別支援学校特有の指導システムなど、今までの勤務校との差が大きく、戸惑いが大きかったと史料する。

また、担当学年は小学部の4年生だが、3名の児童すべてが言葉によるコミュニケーションがとれず、また、排便や食事、移動の介助といった日常生活指導が教育目標となる児童からノンバーバルによる意思疎通の円滑さや障害特有のこだわりに係る指導を教育目標とする児童まで、幅広い対応が必要となる。実態把握をはじめ、指導に際して相担との共通認識の形成など、本校で活動するすべての部分が研修の対象になりうるとの感想を持った。

相担として、年齢的には若いですが、感性の優れた教員とともに学級を担任している。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

小学校での講師経験はあるが、特別支援学校での勤務は初めてであり、教育内容の策定から効果的な指導法の考察、対象児童の実態把握など、日々、さまざまな戸惑いや悩みがあったと想定される。

教師は、日々の実践が糧となり、それが基盤となってより実効的な指導目標や指導方法の精選、授業構築に対する意欲が向上していくと考えるが、前述したように特別支援教育を担当すること自体が初めてであり、何を教育目標に据えるか、どのような授業の進め方が効果的かについて悩むと思われた。

前述したように、言葉のやりとりによる授業が成立しにくい学級にあって、対象児童

が何を考え、どのような学び方を行っているかを類推する中で行う授業そのものを積み重ねることで、実態把握がより深まり、結果としてより課題に即した教材選定や授業構築につながると思うが、年度当初は「障害のある児童への対応そのものに、まず、慣れる」が大きな目標だったと考えている。幸い、当職も前年度まで校長として奉職していたことから、担当児童との間に相応の人間関係が構築できていたことも背景に、こちらと初任者を交えた活動や触れ合いを行う中で、また、相担が行う児童とのやりとりの中で徐々に児童の実態を把握し、自分なりに授業内容の立案が行えるよう、成長してきたと考えている。

こちらが行った指導のポイントとして、「授業者は面白いと思う授業でなければわななければ、児童生徒はその授業を楽しまない」を提起、授業中にともに授業を行う教員がいかにも楽しげに授業を行い、児童を「学ぶ雰囲気」に引き込むか、また、自分が主指導として行う授業に関して十分な教材研究を行い、自身が楽しみながら指導する姿勢が重要とのアドバイスをやってきた。

一方で、指導内容の立案段階では他の初任者と同様に「2W1H」を大切にするように伝えてきた。

当初は児童に対する自身の笑顔も少なく、授業に対する不慣れな状況が見られたが、二学期以降、自然な笑顔や語りかけの口調などが向上しており、同調して授業レベルが向上することと期待している。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように当該教員は、今まで小学校に勤務しており、障害に係る特性理解や実態把握の重要性をそれほど重視してこなかったかも知れない。指導を行う前段階として対象児童の状況や生育歴、家庭環境をはじめ、個々の実態把握の前に当該児童周囲の環境も十分に考慮し、児童だけでなくその家庭にまで考察が及ぶべき点をアドバイスした。

障害児童を持つ母親は、他の我が子と障害児童を比較する傾向にあり、教師が思う以上に悩んでいる状況がある。学校での些細な事象においても保護者の心境をおもんばかった上で迅速かつ正しい情報を伝えることで保護者との信頼関係が強まる点についてアドバイスをやってきた。

反面、円滑な関係構築の際に留意すべき点として、自分が保護者を苦手だと感じていると、相手の保護者も又自分自身を苦手だと思っていることが多く、よい関係が構築しにくいこと、初任の間は、先入観を持たずに保護者の懐に飛び込んで教を請う姿勢を持つ意識の大切さを伝えた。

個々の児童の教育目標策定の際も独りよがりになることなく協調性を持って対応し、先輩教員のアドバイスも素直に聞く重要性なども合わせて伝え、考え方の柔軟性やさまざまな観点から考察する重要性にも言及を行った。

一方、放課後のカンファレンスでも対象児童の障害や実態を踏まえ、自閉症にかかる実態把握やアスペルガー症候群など発達障害の説明をはじめ、実際に担任する児童の課題として指導に悩んでいる「こだわりへの対応」や「排尿便指導」について、情報を提供した。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

授業に臨む際の基本的な教案作成について、先に述べたようにティームティーチングが多く、自身が主指導に入る授業がさほど多くないために作成した指導案自体も多くなく、これに係る具体的な指導は十分に行えていない。

ただ、指導案は家を建てる際の設計図のようなもので、設計図がなくては授業のねらいや児童への手立て、評価の観点が曖昧になりがちなことから、略案でよいから作成する重要性や意義について助言を行った。

一般論として、指導案には授業で行う配慮や手立て、目当てに関する具体的な記載の重要性を伝え、「自分自身が授業を進める上で大切にしたいポイントは自分が分かっていたとしても必ず明記し、確認を行う一方でともに授業を行う他の教師にも明確に伝わるように」との指導を行った。

実際の指導では、昨年から継続している単元について、児童は見通しをもって活動することから授業自体は活発だが、指導者が替わることによって学ぶねらいや課題が異なること、この授業を今回も引き続いて行うことによって、児童のどの部分に成長が見られると考えているかについて説明できなければならないこと等を説明した。

クレヨンを用いた画用紙への色塗りの授業においても、枠の中に丁寧に色塗りをするといった課題を設定し、それに応じた指導をしなければ単なる「クレヨンを持って動かす活動」に終わってしまうことを例に、単元に教師の「意図」を加えることではじめて「ねらい」を含んだ授業になることを助言し、2W1Hの重要性並びに教師の意図の重要性をアドバイスした。

エ 実際の指導（姿勢保持等を含む。）について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

当初から優しげな表情、柔和な声質で、小学部を担当する担任として、適切な対応を心がけている様子が見える。

こちらが行う指導のポイントとして、日常の態度は障害のある児童にとって適切な対応を取っているが、教師が最も児童にとって有効な教材であり、伝えたい内容や指導の単元、また注意を行う場合などは、表情や声、態度もそれに応じた対応を行う必要があることを筆頭に伝えた。

次に、授業中、児童の反応や表情を見ることの重要性を伝えたが、自分では児童を見て発言しているつもりでも、時には背中を児童に向けたまま説明する場面があり、それでは特にコミュニケーションに課題がある児童には教師の思いが伝わらない点などを説明した、また、児童の立場に立った「当事者意識」を大切に、課題が理解できない場合において「なぜわからないか」、「どのように説明すれば分かるようになるか」を常に模索することで、児童の実態把握にもつながることなどをアドバイスした。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

年度当初から、特に重篤な障害児童の対応に苦労している様子が見える。

大学において、障害特性に係るさまざまな知識は学んでいるが、現実との差や

コミュニケーションが難しい児童、また、身辺処理が大きな課題の児童にとってはどの内容を教育目標に設定するかについて悩むことが多いと推察される。

相担が感性豊かな、また、当意即妙で対応できる教員であり、初任者自身が常に相担の対応に関して疑問や自分の考えを持って教えを請うことで自身の指導力の向上にもつながることをアドバイスし、独断で支援を考えることが児童の課題に即した内容でない場合もあることを伝え、担任同士の意思疎通や共通理解のもとでより効果的な支援や手立てを考える大切さを伝えた。

一方、子どもによっては教師側の説明や見本を理解しないで自分勝手に活動する場面もあるが、そうした場合も「何故か」の疑問を持ちつつ肯定的に受け止めることで児童の思いに迫ること、また、こうした肯定的な対応を続けることで児童の教員に対する信頼が増すことも助言した。

(ウ) 学習環境の設定について

さまざまな指導内容を子どもたちに如何に分かりやすく提示するかについて、工夫を行っているが、前述したようにその工夫を加える教師の意図やねらいを明確にしなければ児童の課題に迫りにくいことを伝えた。朝の会の手順や歯磨き、手洗いなどの日常生活指導に関する内容を絵カードやイラスト、また、児童が理解しやすいようにひらがなで表記するなどの工夫が教室内の随所に見られるが、学部全体で行っている工夫であり、それをよい見本に自身の授業の際も、教材の準備や提示の仕方に構造化の手法を学ぶよう、アドバイスを行った。

指導のポイントとして、授業を進める上で大切にしたいこととして子どもたちが意欲を持てるように、導入段階では「驚き」を重視、展開では「共感」が得られるように、まとめでは「納得」を持って成就感を得られるような工夫を行うように指導するとともに、教師自身が最も効果的な環境の一つであり、教師の態度や言葉がけも学習環境の大きな要因であることを伝えた。

具体的には、自身が主指導で行う授業において、児童が主体的にさまざまな役割を行う意欲が高く、スムーズな授業展開のファクターとなっていることから、授業のまとめではその点も評価のポイントであり適切に誉めることでさらに意欲や成長につながることを指摘した。

(エ) 評価の適切さについて

歯磨きや手洗い、授業に臨む姿勢や態度を育成する学級活動において、個々の指導目標を意識して対応する相担の様子を参考に、日常的に指導の適時性や児童の成就感を重視した指導を行っているが、時折、声が低く、また、児童の方を見て発言していないために「独り言」のように感じられる点を指摘、児童に担任が行う評価が適切に伝わっていない可能性があることを注意するように伝えた。

また、授業において児童が自分でやりたい題材を「選ぶ」ということも授業の大きなポイントになり、すべて教師側が題材を選んで与えるのではなく、何故それを選んだかといった児童の思いも評価のポイントになる点を説明した。

指導のポイントとして、児童の活動や日常の態度を注視し、細かな成長も見逃

さない教師側の意識が評価の大きな要素になること、また、順番を待つという単純な内容であっても自分なりにその内容を理解していること自体が大きな成長であり、個々の教育目標や指導目標を明確に持つことで評価がより適切になる点をアドバイスした。

「授業は教師の都合で行うのではなく、子どもの都合で行う」という内容も伝え、評価自身も「どのように教えたか」という教師側の視点だけでなく「子どもがどのように学んだか」について考察することが評価の大きな要素になる点を指導した。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

四月当初、小学校から赴任した頃を振り返り、授業の視覚化や構造化について、今まで経験がないために思いが至らなかった点に触れ、今ではこのことが当たり前に見えるという点に大きな成長を感じていると自己評価を行っている。一方、自身が担当する指導では、児童に分かりやすい提示や活動しやすいように分類する工夫、また、細かな準備に関して成長したと感じている評価があり、一年間の自身の努力や工夫が功を奏したと評価している。

課題としては、担当児童の実態把握をさらに精査し、授業以外にも情報を収集して指導の場面に生かすことが必要との思いや、できるのにやらないという背景には何があるのか、また、円滑な授業を構成する上での話し方の向上に関して努力を行いたいとの記述がある。常に柔和で温厚な語り口を意識してきたが、その上で、褒めるタイミングや評価する内容の具体化、又、自分の頑張りを振り返り、自己有能感や成就感に結びつける手法を学ぶことの重要性に気づいたという自己評価の内容がある。

これからも児童にとって、教師として果たす存在感の大切さや児童が分かった際の指導者側の喜びを追求して行って欲しいと期待している。

(3) 初任者Cについて

採用試験に合格するまで、複数の特別支援学校で数年の講師経験を経てきた。

今までの経験で授業についての基礎的なスキルや教材作成の能力は有している。

担当学年は中学部の知的教育障害部門の1年生で、外進生も多く、自己有能感の乏しい生徒もいることから、その点に対する指導も必要な学級である。

主指導として、発達段階が中～重度の教科学習「数学」と「国語」を担当しているが、学年を縦割りで編成するとともにダウン症児が多く、また、情緒的に課題の多い生徒が在籍することから、授業への導入や教材にもさまざまな工夫を凝らす必要がある。

相担として指導力のあるまた父性に溢れる男性教員とともに学級を担当するが、朝の会や終わりの会といった日常の学校生活一つをとっても生徒への対応や指導に見習う点が多く、日々、よい研修を積んでいると考えている。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

他の特別支援学校での講師経験はあり、対象生徒の課題に応じた授業を構成する力量

は有している。

後述するが、授業に対しては、毎回、丁寧な教材を作成し、単元の展開にも工夫を凝らすなど授業に対する意識も高い。

指導内容を立案する段階でのアドバイスとして、他の初任者と同様に「2W1H」を大切にするように伝えてきた。

ポイントとして、授業を行う際、生徒の実態に即して「何がわかっているか」、「何がわからないか」について考えることで指導する「what」が設定できること、また「わからないのは何故か」という「why」を考察することでより実効的な方法「how」につながり、興味深い授業が展開できると伝えてきたが、さらに生徒の課題に肉薄し、丁寧な課題設定を行うことでより一層、完成度の高い授業が行えると期待している。

一方、「授業者は面白いと思う授業でなければ、児童生徒はその授業を楽しまない」についても伝え、授業中にともに授業を行う教員がいかにも楽しそうに授業を行い、生徒を「学ぶ雰囲気」に引き込むかにも留意するように伝えた。

また、自戒も込め、授業に慣れることで「教えること」に対する新鮮味が薄くなりがちな点を指摘、講師時代の経験が反作用にならないように常に新鮮な気持ちで授業に臨むよう、アドバイスを行っている。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように今までも特別支援学校に勤務しており、相応の障害理解はあると考えるが、大学等において専門的な観点から障害に係る特性理解や実態把握について研鑽を積んだ経験は少ないと考えている。例えば、小学校時代に「課題を覚えるにくい」との評価を受けた生徒について、記憶には「覚える力」「覚えておく力」「思い出す力」といった三要素があり、当該生徒の実態として、どの要素の力を高める必要があるかを考えることで効果的な指導方法が判明する点について説明し、個々の学びや課題の設定についてもアドバイスをを行った。

一方、外進生が多いことにも触れ、引き継ぎ簿だけでは把握できない実態も多く、課題や指導目標、教育目標を相担と共有する重要性や、自己有能感や成就感の醸成のために、教師としての思いを明確にして伝えることで生徒理解がより深まる旨を説明した。

放課後のカンファレンスでも対象児童の障害や実態を踏まえ、自閉症に関する実態把握やアスペルガー症候群など発達障害の説明をはじめ、指導対象の多い「ダウン症」の障害特性について、担当生徒の姿が思い浮かべて理解できるよう、授業中の様子を交えて解説を行った。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

授業については、訪問曜日の関係から数学に関する内容が多い。

常に生徒の実態に即した興味深い教材を作成、準備するなどの努力を重ねており、できあがった教材の質も満足できるレベルにあると評価する。数学の教材であっても国語や他の教科に転用できるものが多く、効率よく教材を使用することで授業自体の質が向上すると期待している。

一方の教案作成については、目と手の供応を高めるための魚釣りゲームや二桁の数唱、

繰り上がりの足し算やお金の種類の学習などが主な内容だが、前述したように今までの講師経験から相応の教案を作成する。ただ、この「教案を書くことができる」ということで却って内容の深化に至らない場合もあり、個々の実態や課題に応じた内容を策定する意識を常に持つことで生徒や教師自身の成長につながることをアドバイスした。

他の初任者にも伝えたように、指導案は家を建てる際の設計図のようなもので、設計図がなくては授業のねらいや児童への手立て、評価の観点が曖昧になりがちなことから、略案でよいから作成する重要性や意義について助言を行った。

一般論として、指導案には授業で行う配慮や手立て、目当てに関する具体的な記載の重要性を伝え、「自分自身が授業を進める上で大切にしたいポイントは自分が分かっていたとしても必ず明記し、確認を行う一方でともに授業を行う他の教師にも明確に伝わるように」との指導を行った。

エ 実際の指導について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

当初から落ち着いた表情や声質で、生徒に対して安心感を与える対応を対応を心がけている。

朝の会の終了後に行う個別学習も、生徒の実態や理解に応じて適切な内容を示し、日を追うごとに生徒の学習意欲や態度も向上している。

相手が適切な父性を発揮する姿勢で学習に臨んでいるため、よい影響を受け、評価できると考えている。

また、授業中、生徒の反応や表情もよく観察し、的確に課題を捉えて指導しようとする態度も良好。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

年度当初から学習における支援や手立ては十分に意識し、よい授業を心がける意識はうかがえる。指導のポイントとして、生徒の立場に立って授業を行う思いは尊重するものの、単元の内容をどの程度まで指導するかの見通しがあやふやになってしまう点について助言を行うとともに、「ピーマン言葉」を例えとして、具体性のない内容を生徒に伝えても意味が伝わりにくい点を指摘した。

具体的には指導目標に「簡単な数の増減ができる」といった記載が見られたが、その「簡単な数」とはどのような内容か、教師にとっては簡単でも生徒にとっては決してそうではないこと、記載が具体的にあるほど、支援や手立ても具体的になる点等について助言を行った。

一方、知的障害生徒への支援と発達障害生徒への支援は異なること、具体的には知的障害の場合、「説明はわかりやすく、具体的な動作を交えて行う」ことが効果的であり、発達障害の場合は「説明は理屈を丁寧に伝え、根拠も交えることでより理解が深まる」との解説も交えて助言を行った。

(ウ) 学習環境の設定について

さまざまな指導内容について、教材を丁寧に準備することは学習環境を整える

意味で、まず重視すべき内容である旨を説明した。

一方、小学部の段階では教室表示等にイラストや写真を多用するが、中学部では単に発達段階だけではなく生活年齢も加味し、生徒に中学生という意識や社会参加を見据え、漢字を用いた一般的な表示もひらがなと併用するなどの工夫を行うことで、生徒自身がより社会への意識が向くことを伝えた。また、作品づくりを例にしても、糊付けの作業では、中学部においては熱で糊を溶かす機具を用いることもあり、活動については常に「危険や安全」に留意する必要性も助言した。

また、指導する対象が多いダウン症の場合、手指が太く短いため、不器用になりがちで、私たちが軍手を二枚はめて活動するような感覚と伝え、個々の障害や特性に応じて最も活動しやすい環境を設定する重要性についても言及した。

(エ) 評価の適切さについて

終始、落ち着いた表情や声質で生徒に接し、評価の姿勢は評価できる。

ただ、マンツーマン対応が生徒に向き合う場合、熱心な指導を行うあまり、他の生徒に対する配慮が薄れがちな点について気をつけるように伝えた。

一方、中学部1年生という担当生徒の年齢やそれぞれの理解度、発達段階をかんがみ、卒業後の自分のイメージを思い浮かべることで自己評価が明確になることを伝えた。

具体的には、終わりの会にそれぞれの自己評価を発表させる内容においても、単に頑張った内容をいうのではなく、どんな気持ちでどのような内容を頑張ったかをはっきり伝えることが重要と指導した。

もし卒業後に就職した会社で会議が開かれた場合、どんな内容を喋るかといったことをイメージしてみようと生徒に伝え、実際に終わりの会を行った際、生徒が主体的に明確な内容を伝えることができたこともあって、話を聞く態度についても向上することを体験したと考えている。

また、思春期特有の課題として、同級生の反応を茶化したり否定的な反応を行う生徒もいるが、肯定的フィードバックの重要性を伝え、否定的な対応を行わないことを伝えた。教師の望ましい姿勢に触れ、「生徒の否定をにっこり笑って受け止め、肯定的に戻すこと」の重要性を解説した。

指導のポイントとして、児童の活動や日常の態度を注視し、細かな成長も見逃さない教師側の意識が評価の大きな要素になること、また、順番を待つという単純な内容であっても自分なりにその内容を理解していることも大きな成長であり、個々の教育目標や指導目標を明確に持つことで評価がより適切になる点をアドバイスした。

「授業は教師の都合で行うのではなく、子どもの都合で行う」という内容も伝え、評価自身も「どのように教えたか」という教師側の視点だけでなく「子どもがどのように学んだか」について考察することが評価の大きな要素になる点を指導した。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

初任者自身の評価として、まず、「授業への心構え」に自身の成長を感じている様子が見える。授業内容の的確さに成長がみられるとともに、何よりも、対象の生徒にとってより良い授業をしたいという意欲に高い自己評価があり、教師の大切な素養として一年間の成長が感じられる。

毎回、適切な教材の準備を行ってきたが、自分自身では生徒の実態に沿った教材設定をさらに模索したいとの思いも記され、今後の成長に期待をしていきたい。

一方、課題としては「教員は、生徒にとって最も適切で身近な教材」という内容については、声の抑揚やトーン、また、教師としての考えや思いを生徒の興味に沿って伝える「スキル」の習得に課題として捉えている様子がうかがえる。

常に温厚で安定した語りかけを行い、言葉がけの内容も吟味している点について成長を感じるという自己評価を行っているが、一方で、指導内容の重要性に即して、表情や声質の変化も必要と感じており、今後も適切な「教材」になるべく努力を行っていくと評価している。

(4) 初任者Dについて

採用試験に合格するまで、他の特別支援学校で実習助手等の経験を経てきており、他の初任者とは異なる観点で授業や学級運営等を俯瞰してきた。知的障害教育についての経験は多くないと考えているが、年度当初から落ち着いた雰囲気の中で生徒に接し、担任としての素養は高いと評価している。

担当学年は中学部の知的教育障害部門の3年生で、比較的軽度な障害生徒が多く、殆どの生徒が言葉によるコミュニケーションが可能である。中には就労等の可能性を有した生徒も在籍する。

一方では、情緒的に課題があり不適応行動等の問題行動が懸念される生徒もいることから、当該生徒並びに学級運営の対応に苦慮している様子もうかがえる。

中学部三年生という思春期に入り、さまざまな悩みを有する生徒に対し、熱心に対応する傍ら、福祉施設に措置されている生徒も在籍することから、連携や関係構築をはじめ、学校以外の指導においても担任としての力量を求められる場合がある。

当職が参観する授業は、訪問曜日の関係で数学のサブ指導並びに社会の主指導が多く、ともに指導を行う教諭が前述した初任者Cの相担で、さまざまな知見や経験を有し、力量的にメンターに該当する教員であることから、授業以外にも学ぶべき点が多い。

相担としてベテランの域に達した女性教諭とともに学級を担当するが、学級運営において父性と母性の担当を明確に分けるなどの対応を行っている。

ア 授業への心構え（授業内容の的確さ、指導内容の具体化、意欲等）について

知的障害特別支援学校で教壇に立つことは初めての経験かも知れないが、前述したように担任としての素養は高く、年度当初から常に生徒の側に立つ姿勢は評価できる。

また、柔和で優しくそんな雰囲気が漂い、笑顔を絶やさずに生徒対応する姿勢は好感が持てる。

一方、朝の会等では、当初、自身の説明や生徒の反応に注意がいきすぎ、生徒に行う

べき指導に配慮できない場面がみられたこともあった。

当初、特に問題行動を呈する生徒に対し、他のクラスの仲間が発する言動によって学級内に序列が生まれる可能性も考えられ、非難される生徒の側に立って擁護する姿勢を大切にすること、また、一方では注意する生徒の考えや思いも考慮して、なぜそのような発言をおこなったかを考えること、生徒の発言の中にも評価する点はないかと模索する姿勢も重要で、それらを生徒に気づかせ、一緒に考えることで学級内でのいじめ防止につながることや生徒の担任への信頼が増すことにつながる旨を説明した。

性格的にも素直で真面目、研修に積極的ですのでカンファに参加し、メモを取り、また、自身の疑問や意見を率直に当職に伝えるなど意欲も十分にあると考えている。

授業に対しては、経験が乏しいだけにすべてが生徒の実態に即した授業内容の策定には至らず、授業構築に悩む場面もみられた。

特別支援学校の教科指導は、文科省著作教科書（☆本）以外には教科書というべき書籍も多くないことから、生徒に応じた「教科書」選定からはじまり、自身で教材を作成する必要性が高いことを説明し、「何を教えるか」から「何故その内容を教えるのか」、「どのように教えるか」を考えることによって授業の質が向上する旨を伝えた。

イ 実態把握の適切さ（個別の指導計画等の立案や保護者との連携等）について

前述したように今まで特別支援学校の教壇経験が乏しく、生徒の障害理解や実態把握に関する専門的な知識はそれほど多くないと考えるが、生徒の立場に立って考える意欲や思いは強く、特に情緒面から実態を理解しようとする観点は評価できる。

カンファでも前述した情緒面で課題のある女生徒の特性や行動等を例として問題行動の意味するところやパニックの原因・対処法等を解説したが、熱心に研修に励んでおり、すぐに朝の会の運営等、学級活動に反映することができた。また、知識だけでは対応できない場合もあるが、大切なことは「授業は教師の都合ではなく当事者である生徒の都合で行うこと、また、常日頃から生徒の行動や表情を注意深く観察することで、辞書には載っていない実態が理解できるケースが多い」との説明も受け入れ、日頃からより生徒の実情を理解しようとする気概がある。

放課後のカンファレンスでも対象児童の障害や実態を踏まえ、自閉症にかかる実態把握やアスペルガー症候群など発達障害の説明をはじめ、学級に在籍する「ダウン症」の障害特性について解説したが、担当生徒の姿が思い浮かべて理解しようとしている。

ウ 指導準備（指導案の作成、教材準備や工夫を含む。）の的確さについて

授業については、訪問曜日の関係からサブに入る数学に関する内容が多い。

小学校や中学校で用いる教材と特別支援学校のそれでは異なる性格がある点に関して説明を行った。

通常教育の場合、代表的な教材としてプリントがあげられる。

たとえば、因数分解の単元を学んでいる際に定着の手段としてプリント学習を行う場合があるが、プリントの問題をマスターすることで指導の目標に到達することができる。いわば、クラスの全員が同じ指導目標を達成する授業を行い、評価を行う観点からも、教材が同じ内容になることが多い。

特別支援教育の場合、教材のマスターが指導の目標への到達とは限らず、「指導目標」という離れ島に到達するための「架け橋」的な性格もあり、単に橋を渡っただけでは目標に到達できたわけではないこと、絵の具や筆を教材として用いた活動でも、各児童生徒がそれぞれの認知度や手指の操作性が異なり、また、各児童生徒の到達すべきねらいが異なるため、個々の教育目標を明確に持つことが大切で、同じ教材を使用したとしてもそこにはねらいが異なることを意識して教材設定や活用を行うように助言を行った。

また、パソコンを例に、有効な教材だが操作を学ぶことやそれを利用して情報を検索する以外にも「画面の文字を読む」「操作を通じて人とのコミュニケーションを図る」「操作で人にわからない点を聞くことができる」といった様々な指導内容を考えることが可能であり、生徒の活動に教師の「意図」を組み込むことでより適切な授業が実施できることを説明した。

他の初任者にも伝えたように、指導案は家を建てる際の設計図のようなもので、設計図がなくては授業のねらいや児童への手立て、評価の観点が曖昧になりがちなことから、略案でよいから作成する重要性や意義について助言を行った。

一般論として、指導案には授業で行う配慮や手立て、目当てに関する具体的な記載の重要性を伝え、「自分自身が授業を進める上で大切にしたいポイントは自分が分かっていたとしても必ず明記し、確認を行う一方でともに授業を行う他の教師にも明確に伝わるように」との指導を行った。

エ 実際の指導について

(ア) 話し方や表情、指導の態度について

当初から柔和で優しい雰囲気があり、落ち着いた表情や声質で生徒に対して安心感を与える対応を心がけている。

朝の会の終了後に行う自立活動の指導でさまざまな基本的な身体操作を学習する単元でも、生徒個々に意欲や成就感を与える課題設定や励ましの言葉と言った工夫があり、また、サブで入る数学の授業でも生徒の理解度を把握し、学習に向かう意欲を喚起する対応を取っている。こうしたよい面は、本人の素養もさることながら、同じ学部の教員集団に模範たる「手本」の存在が大きい。折に触れ、よい面を吸収しようとする意欲や態度を評価する一方で、こうした姿勢を継続することで自分自身のオリジナリティが確立されると説明を行った。

日を追うごとに生徒の学習態度も落ち着き、初任者に対して教を請うなどよい関係づくりが構築されつつあり、今後のさらなる成長に期待を寄せている。

(イ) 支援や手立ての適切さについて

年度当初から学習における支援や手立ては十分に意識し、よい授業を心がける意識はうかがえる。まだ、知的障害生徒の特性を十分に把握して指導することには至っていないことから、支援や手立てに不慣れな点もあるが、日々努力を重ねていると考えている。

担当する数学の授業において「くり下がりの計算」をどのように指導するか、主指導の教員と協議を行ったが、外進生の中には、小学校時代に理解できないこ

とから数学そのものの学びに意欲を喪失しているケースがあった。

わからない生徒の「わからなさ」にどう向き合うか、どうすればわかりやすい指導ができるかを考える中で、常に肯定的に反応を捉え、わからなくても叱る等の否定的な対応をしないとといった支援の方向性を主指導者と共有し、できそうな課題設定の工夫、励まして意欲を喚起するなど、生徒の立場に立って支援できるようになっている。

指導のポイントとして、指導者は説明する内容を明確にし、「ピーマン言葉」を例えとして、抽象的な内容を廃して具体性のある「頭の中に絵がイメージできる」ような対応を心がけることの重要性を伝えた。

一方、知的障害生徒への支援と発達障害生徒への支援は異なること、具体的には知的障害の場合、「説明はわかりやすく、具体的な動作を交えて行う」ことが効果的であり、発達障害の場合は「説明は理屈を丁寧に伝え、根拠も交えることでより理解が深まる」との解説も交えて助言を行った。

(ウ) 学習環境の設定について

さまざまな指導内容について、教材を丁寧に準備することは学習環境を整える意味でまず最も重視すべきポイントとの説明を行った。

中学三年生の活動となると、職業・家庭等の教科では一般的に用いる工具を多用するが、安全や危険にも配慮し、指導者には危機管理の意識を持つことが基軸である旨を説明し、「さ」「し」「す」「せ」「そ」の文言で伝えた。

「さ」…最悪の場合を想定する

「し」…慎重に対応する

「す」…速やかに対応する

「せ」…誠意を持って対応する

「そ」…組織で対応する

こうした内容を、学習以外の学校活動で常に意識する必要を解説した。

また、指導する対象がダウン症の場合、主指導を行う機会のある体育などでは「頸椎」が生まれつき弱いことや心臓に疾病を有している場合が多く、負担を掛ける内容を避けるなど、授業を進める上で必要な配慮を中心にアドバイスを行った。また、のこぎりや金槌を用いる作業学習においても、手指が太く短いため、不器用になりがちで、私たちが軍手を二枚はめて活動するような感覚と伝え、生徒個々の障害や特性に応じて最も活動しやすい環境を設定する重要性についてもアドバイスをを行った。

(エ) 評価の適切さについて

終始、落ち着いた表情や声質で生徒に接し、評価の姿勢は評価できる。

また、学年全体の生徒に対しても常に公平な姿勢で接するため、生徒からの信頼も高い。

こうした素養を大切にするように伝え、そもそも論として「評価」の意味を解説、「〇〇ができない」といった観点で評価を行うのではなく「こうすれば、こ

んな努力をすれば〇〇ができるようになる」といった、生徒に前向きな意欲を引き出すことが評価の本質であり、大切にするように伝えた。

また一方で、語弊はあるが、学級担任の場合、その「組」の「組長」となってみんなの信頼を得ること、さまざまなルールを設定または指導する際にも、担任自身が規範となって行動することでクラスの中に規律が生まれるといった事例も交え、評価の適正さの基盤に生徒との信頼関係がある点を説明した。

また、中学三年生という生活年齢や就職が期待できる生徒の実態にも触れ、社会参加や卒業後の自分をイメージできる評価を加味することで、より就労や社会参加に係る意欲が強くなる旨にも触れた。

思春期特有の課題として、教師の姿勢に反抗する場面が考えられるが、生徒の言動に対して否定的な反応を行わず、肯定的フィードバックを行っている点を評価、教師の姿勢で大切にすることを観点として、「生徒の否定をにっこり笑って受け止め、肯定的に戻すこと」の重要性を解説した。

(オ) 当該初任者の自己評価等について

当該初任者の自己評価として上記ア～エの4領域の殆どで自身が成長していると感じている。特に「授業への心構え」については、カンファを通じて生徒の実態や障害特性について学んだことが実践に結びついたとの自己評価があり、生徒の視点に立って授業内容の具体化や構造化の工夫についての思いが深まり、授業を行うことへの意欲が向上した点について成長したとの思いがある。

一方、ともに授業を行う教員の子どもへの寄り添い方や誉め方など、メンターたる教員の指導ぶりも自身の成長にとってよい「手本」になり、さらに自分自身の実践に役立てていきたいとの記述があった。より良い教師になるために、常に学び続ける重要性を十分に意識し、カンファを通じて教員として学び続ける楽しさや重要性に気づくことができたとの評価がある。

課題としては、生徒の実態把握について、的確さを向上させるとともに授業に生かす上で、さらに学び続けていきたいとの感想もあり、今後のさらなる成長が期待できると考えている。

4 まとめとして

ほぼ一年を通じて二項、計10名に上る初任者は相応の成長を遂げたと考えている。

その成長に一助として、当職が行ってきた授業に対する考察やカンファレンスがあると思うが、特別支援教育においては個々の障害や学び方が異なり、学習指導要領に準拠するものの自立活動といった特有の領域もあることから、指導内容の策定や指導方法の考察、教材の選定に対しても一人ひとりの児童生徒に応じた工夫が必要となる。

指導のスキルの向上は当然ながら重要だが、それにも増して生徒の側に立って考える当事者意識の大切さや生徒を思う感性の重要性についてについてアドバイスを行ってきた経緯がある。感受性の鋭い障害児童生徒は、一瞬で「教師」を見極める。こうした子どもたちに受け入れられる教員になることが特別支援教育の「教師」としてのスタートであることを折をみて説明してきた。

10名の初任者はそれぞれ、担任する子どもたちと触れあい、互いに切磋琢磨して感性を磨き、成長したと考えているが、各初任者それぞれの成長を支える基盤に、相担やティームティーチングを通じてともに授業を行う先輩教員の支援が大きく、また、よい授業を心がける意欲や子どものことをより良く知ろうといった初任者一人ひとりの思いがあると考えている。

当職が担当したカンファレンスの内容がどれほど効果的だったかについては定かではないが、初任者それぞれが真摯に授業やカンファに向き合い、熱心に自己研鑽を続ける意欲を継続してくれたこと、また、それができた背景には、両校ともに、学校全体の「初任者を大切に育てていきたい」という学校風土があり、それを推進する校長を初め教頭や学部主事の存在、教員集団の理解もきわめて大きい。

メンターとなるべき中堅教員が、こうした学校風土をもとに校内で研修意欲がさらに醸成できる力量を発揮すること、また、そうした環境設定を整えば、初任者をはじめ、他の教員の力量向上にも期することができると考えているが、本制度のように、当職のような役割の人員が何らかの支援を行うことによって、さらに有効に機能する可能性を認識することができたと考えている。

一年を通じて真摯に研修を行った各学校の初任者、また、快く環境設定をしてくださった関係の先生方、ましてや温かく迎えてくれた両校の児童生徒にあらためて感謝を伝えたいと考えている。

各校における授業指導の概要並びにカンファレンスの概要等について

【紀北支援学校】

	主な参観授業等の概要	主な指導内容並びにカンファレンスの概要等
4月	<p>※高等部修学旅行の事前学習 ※重篤な障害生徒に係る作業学習</p> <p>等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 授業に対する総括として視覚教材の工夫や評価の観点を明確に位置づける重要性並びに障害特性に対し構造化の有効性等について指導を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 「初任者に期待する」「若い先生方へ得意なところ、苦手なところ」や「情報メディアの怖さ」と題して、携帯電話やメール等に潜む危険性について説明を行うと共に、今後の成長を期して若い先生方の得意な部分や苦手な内容並びに直面する教育課題について説明を行った。</p>
5月	<p>※小学部低学年の図工「母の日のプレゼントづくり」 ※小学部日常生活指導「性教育（菌磨き指導）」 ※中学部作業学習「農作物の看板づくり」 ※中学部調理実習「本県の特産品」</p> <p>等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 各授業に対する総括として、障害児童生徒に対する視覚教材の重要性や評価の観点を明記するとともに、チームティーチングを行う上で指導の意図を明確にする指導案作成のポイント等について指導を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 資料を基に「服務規律の遵守」と題して資料を基に教職の責任やサービスの重要性、並びに特別支援教育の教育課程の中心になる「自立活動」に関する内容や「教育課程」等の教育用語について説明を行った。</p>
6月	<p>※小学部低学年の遠足に同行 ※小学部低学年の課題別学習「はらべこあおむし」 ※高等部の職業「学校の中のいろいろな仕事」 ※中学部の総合的な学習「梅ジュースを作ろう」 ※中学部職業家庭「ミシンを用いた活動」 ※小学部肢体不自由学級の日常生活指導「カレンダーづくり」</p> <p>等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 各授業に関して、授業記録をもとに障害に即した教材選定の重要性や研究授業を行う上で重要とされるポイントを含めた総括を行うとともに、高等部卒業後の社会参加に関して授業で大切にすべき観点を説明した。一方、遠足をはじめ、校外で活動する機会が多いが、危機管理のポイントとして具体例を提示、安全管理について、特に夏季に実施する水泳指導での留意点等について説明した。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 指導を行う際に当該児童生徒から表出される問題行動についての考察や障害が起因する「学びにくさとは？」等について資料を基に説明を行い、問題行動の捉え方について説明を行った。 また、教育の喫緊の課題でもある「いじめ」について、専門家の講話を交え、発生の原因やいじめの定義等について解説を行い、特別支援学校が置かれている現実について解説を行った。</p>
7月	<p>※小学部低学年の図工 ※小学部低学年の課題別学習 ※中学部の特別活動「仲間作り」 ※中学部の特別活動「大掃除」</p> <p>等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 授業からの質問に対して、指導上の目当ての設定に関する説明や読み聞かせの実践で配慮すべき事項、授業中の児童生徒を観察する重要性、障害が起因する不器用さに関連して鉛筆の持ち方に関する教材作成等の説明を行った。一方、12年間の指導を継続する上で、学部を越え同一単元で授業を行う事例もあるが、各単元における指導の適時性や生活年齢に即した指導内容の設定の重要性に関する説明を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 初任者の希望に基づいて「自閉性障害の特性」や「アスペルガーの指導事例」等の説明を行うとともに、「ダウン症」に係る解説等を行い、特有の学びにくさや当該児童生徒の立場に立った授業の進め方に関する説明を行った。</p>
9月	<p>※中学部の職業家庭「冬野菜を植えよう」 ※高等部の職業「現場実習に対する心構え」 ※小学部低学年のせいかつ「買い物学習」 ※中学部の総合的な学習「災害に備えて」 ※小学部肢体不自由学級「10月のカレンダーづくり」</p> <p>等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 各授業に関連して、一学期に比して評価できるポイントを個々に説明する一方、恵まれない生育歴やネグレクトの影響で、大人に対する不信任を有する生徒の存在を状況も合わせて説明し、当事者意識の重要性を説明した。また、VTR等の記録媒体を活用し、各初任者の授業の様子を全員で確認したが、授業中の生徒の様子を意識してみることの大切さや教師が発する声の強弱や抑揚の指導効果等についても解説を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 「学校を巡る裁判事例」の資料を基に、社会の学校を見る観点が変化していること、また、サイレントマジョリティの存在を説明する中で、社会における学校の見方を考える機会を設定した。 また、自閉症児への日常生活指導として排便や給食指導に際して留意するポイント並びに肢体不自由児童生徒への対応として「まず生きる力」の獲得に関連し摂食指導の重要性やポジショニング等について資料を基に説明を行った。 また、給食の献立に関連して「食物アレルギー」について資料を基に迅速な対応</p>

		等の重要性を説明したが、校内においてエビペンの実際を研修したこともあって、理解が深まったと史料する。
10月	※高等部の美術「陶芸作品づくり」 ※中学部の課題別学習 ※中学部の体育「運動会の練習」 ※小学部低学年「朝の会の運営」、「芋掘り」 ※中学部の総合的な学習「本県の郷土食材」 ※高等部職業「調理実習を見据えて」 ※小学部低学年「ハロウィン」 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 可塑性のある粘土を用いた授業について、学部を越えて単元設定ができることから内容の工夫や生活年齢に即した教材設定の工夫について、また、プリント学習におけるねらいの設定や実際の指導における留意点、調理実習を行う上で大切にしたい観点や配慮すべき事項について説明を行った。また、災害に備える指導では有意な教材提示や生徒に分かりやすい発問の仕方を評価する一方、一学期の指導案と現在のそれを比較検討し、評価できる部分とさらに工夫を要する内容について比較対象を行った上で具体的な説明を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 研究授業を通じて特別支援学校でよく行われる指導手法としての絵本の読み聞かせに関し、留意すべき「著作権法」について解説を行った。 また、実際の執務について「起案」を題材に重要性や記入の方法、その根拠等を資料を基に説明を行った。また、高等部卒業後の進路指導が特別支援学校ではとりわけ大きな教育目標となることから、進路指導を行う上で大切にしたいことや道徳教育の教科化に関連してその背景や「道徳」そのものの意味を含めて解説を行った。</p>
11月	※中学部作業学習「チューリップの球根植え」 ※高等部美術「秋の壁面づくり」 ※小学部肢体不自由学級「11月のカレンダーづくり」 ※小学部低学年調理実習「焼きそばづくり」 ※小学部低学年「お誕生会」 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 授業を実施する上で指導者が意図する指導内容が的確に反映されるためには教材の選定や実際の授業構成を明確にイメージすることが重要であり、授業を行うにつれ、各初任者が行う授業の質が向上している感想を持っている。各授業記録等で振り返る中で、丁寧な教材選定や諸準備に対する工夫は「嘘をつかない」点を評価した。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 先人たちが構築してくれた本県特別支援教育の歴史について解説を行うとともに高校等で通級制度の導入が検討されている現況を背景に「発達障害児の特性や集団行動の難しさ」等について資料を基に考察を行った。</p>
12月	※小学部体育「マラソン大会」 ※中学部朝の会及び個別学習 ※小学部特別活動「クリスマス会」 ※中学部保健体育「性教育」 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 マラソン大会など、安全・安心に留意すべき行事を開催する上での注意や体調への配慮について具体的な説明を行うとともに、一見、重篤に見える障害生徒が独力で朝の会の運営を行う様子を見て、担任を交え日常の指導の継続性やポイントを改めて評価を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 授業の経過において考察した内容として知的障害生徒に対するくり下がり計算の指導方法やICTを活用した効果的なアプリ、また、年度末個人懇談を控え、保護者対応において留意すべきポイントや中学部で実践された「性教育」について、各府県で実施している事例や課題等を交えて説明した。</p>
1月	※小学部せいかつ「校外歩行」 ※高等部美術「流木ランプ制作」 ※高等部特別活動「卒業に向けて」 ※中学部作業「牛乳パックを用いた紙漉き」 ※高等部研究授業の指導 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 校外歩行では活動に入る前の事前説明における「具体化」に係る工夫や教師の準備物の精査、また、歩行や目的地での児童の活動を予測する重要性等についてさまざまなイメージを持って対応する必要性を説明した。一方、高等部の活動では電動ドリルといった生活年齢を重視した器具を設定することで、活動に対する満足感や成就感を得ること、また、授業中の生徒への細かな目配りや意欲を持続させる言葉かけへの評価を行った。紙漉きの単元では、単に作業を行うだけでなくエコや環境教育に関する内容に展開できる可能性とともに、授業を行う上での帰納的な方法等について解説を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 ユニバーサルデザインとバリアフリーの違いについて解説するとともに、バリアフリーの重要性が認識されていることから、授業におけるユニバーサルデザインについて解説、障害の軽重を問わず、わかりやすい授業を構築する上でのポイントを解説した。また、障害生徒に対する情報メディアの活用や教師として重要な内容である「書くことや喋ること」についても解説を行った。</p>
2月	※小学部せいかつ「校外歩行、節分」 ※小学部自立活動「課題別学習」 ※高等部特別活動「卒業に向けて」 ※中学部作業「牛乳パックを用いた紙漉き」 ※高等部研究授業の指導 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 「啜啄同時」ということばがあるが、給食指導の際に苦手な食材を頑張る食べる児童への支援について、このことばを活用して適切な教師側の対応や自主的に頑張る児童の心情等の変化について指導を行った。また、校外歩行では前回の指摘を受け、目的地での活動を想定して準備をしたさまざまな道具を児童が工夫を凝らす中で主体的な活動を行ったが、「授業の主役は児童生徒」のことばを目の当たりにしたと考えている。一方、節分では季節の行事を分かりやすく説明し、伝承されている行事について、視覚教材や実際に身体を動かして楽しむゲーム、</p>

	<p>絵本の読み聞かせを通じて学内容を定着させる工夫について評価を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 高等部 貴志教諭並びに中村教諭及び小学部平畑教諭の校内研究授業について、授業参観の記録を基に評価や改善点を言及した。 各教科指導の内容策定については、重篤な障害生徒を対象とする際に、小学校低学年の採択教科書の内容が参考になることや、各指導内容に至る下位項目を明確に意識し、指導ヒエラルキーを構成することで授業の展開がスムーズに行くことを指摘した。一方、個々の課題に即した教材が適切に準備されていることを評価し、教材準備如何によって授業の質が劇的に変化することを改めて指摘した。 各児童が興味を継続して授業を楽しむ中で、着実に指導内容が定着している様子を全員で確認した。 最終のカンファでは、この一年間を通じて感じた個々の成長を、各人宛の文書にまとめて激励を行うとともに、先達が残したいいわゆる「名言」について集約したものを手渡し、今後のキャリアの中で省察を行う際の参考になるようにとの思いを伝えた。</p>
--	--

【和歌山さくら支援学校】

	主な参観授業等の概要	主な指導内容並びにカンファレンスの概要等
4月	<p>※小学部1年生 朝の会の運営、音楽 ※小学部4年生 特別活動「ヨーヨーで遊ぼう」 ※中学部数学及び特別活動並びに終わりの会の運営等 等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 各初任者の授業を順に参観するとともに日常生活指導の一環として給食指導を参観。初めて知的障害特別支援学校で勤務する教諭もいることから、障害特性について説明を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 「初任者に期待する」「若い先生方へー得意なところ、苦手なところー」や「情報メディアの怖さ」と題して、携帯電話やメール等に潜む危険性について説明を行うと共に、今後の成長を期して若い先生方の得意な部分や苦手な内容並びに直面する教育課題について説明を行った。</p>
5月	<p>※中学部 数学「1から15までの数」 ※中学部 特別活動「遠足でのレク」に関する話し合い ※小学部生活「遠足の事前学習」 ※小学部給食後の自由あそび ※中学部自立活動「からだ作り」 ※小学部自立活動「色の弁別、1～3の数字」 等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 各授業に対する総括として、対象児童生徒の理解度の把握や授業への意欲を考察することの重要性、また、授業は教師の意図が重要なため、本時の授業に係る教師自らの思いや意図を効果的に指導案に反映することの大切さを伝えた。また、指導案に手立てや評価点を記入することで、チームティーチングが効果的に見えること、授業後の生徒に対する評価が容易になる点を説明した。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 資料を基に「服務規律の遵守」と題して資料を基に教職の責任や服務の重要性、並びに特別支援教育の教育課程の中心になる「自立活動」に関する内容や「教育課程」等の教育用語について説明を行った。 一方、小学部に進学する障害幼児に関連し、県内の幼稚園の状況を説明すると中で、関連して「学びにくさ」や「問題行動への対応」について、資料をもとにカンファレンスを行った。</p>
6月	<p>※各初任者の授業を順に参観 ※中学部の教科「数学」や特別活動 ※中学部の終わりの会の運営、清掃 ※小学部の課題別学習 ※中学部社会「近畿地方について」 ※中学部特別活動「お茶を作ろう」</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 各授業に関して、授業記録をもとに障害に即した教材選定の重要性や来たるべき研究授業を行う上で重要とされるポイントを含めた総括を行うとともに、ベテランの先生が行う授業の様子について授業記録をもとに対照を行い、児童の否定的な反応を肯定的に受け止め、意欲を喚起する大切さやチームティーチングにおける役割分担、児童生徒の授業中の反応をよく観察することの重要性について説明を行った。 一方、知的障害児に対する数学指導で、教材選定の大切さや教室環境が理解力の向上に作用する点を説明した。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 指導を行う際に当該児童生徒から表出される問題行動についての考察や障害が起因する「学びにくさとは？」等について資料を基に説明を行い、問題行動の捉え方について説明を行った。 また、教育の喫緊の課題でもある「いじめ」について、専門家の講話を交え、発生の原因やいじめの定義等について解説を行い、特別支援学校が置かれている現実について解説を行った。</p>
7月	<p>※小学部低学年プール指導 ※小学部低学年の日常生活指導 ※中学部の課題別学習 ※中学部数学</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 新学期以来、約三箇月が経過する中で、各初任者から授業や学校において苦慮している点や分からない点について話を聞くとともに、準備した評価表をもとにそれぞれの頑張りを評価するとともに改善点や今後の方向性について協議を行っ</p>

	<p>※中学部漢字検定への取り組み 等々</p>	<p>た。 学級運営では相担との関係性の重要さに係る内容が提起されるとともに、中学部では思春期特有の問題行動や感覚の鋭敏さに対する対応についての疑問が呈され、それぞれの思いや考えを自由にディスカッションを行った。 一方、夏季休業中には「教材づくり」と題して、障害が起因する不器用さに関連し、牛乳パックを使用した鉛筆の持ち方に関する保持具の制作を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 初任者の希望に基づいて「自閉性障害の特性」や「アスペルガーの指導事例」等の説明を行うとともに、「ダウン症」に係る解説等を行い、特有の学びにくさや当該児童生徒の立場に立った授業の進め方に関する説明を行った。 特に各初任者が担当する児童生徒にダウン症児が多いこともあり、当該児童生徒に係る身体的また病理的な特性や指導に当たって留意すべき内容や適した教材等に関して説明を行った。 また、同月末に県教委が主催する初任者研修授業研究が同校で実施され、初任者4名がそれぞれ主指導の授業を担当したことから、文言を含めた授業細案の見直しや当日に行った授業を参観し、また、放課後の協議会において各自が発表した授業内容や単元設定の理由、反省や成果を聞いた。協議会の最後に総括として、本授業研究に参加した他校の初任者も含め、各4名の授業の評価等について講話を行った。</p>
<p>9月</p>	<p>※小学部各学年の朝の会の運営並びに音楽 ※中学部音楽 ※中学部全体体育の指導 ※県教委による初任者研修授業研究 等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 二学期に入り、夏季休業中にそれぞれが行った自主研修の内容について報告を受けるとともに、今学期の授業に関し、指導のねらいに係る設定の意義や指導上で特に留意する点について情報交換を行った。 一方で、各授業に関連して、発問の仕方や授業の進め方、授業中の児童生徒の反応を観察し、当意即妙の対応ができていた点について個別に評価を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 「学校を巡る裁判事例」の資料を基に、社会の学校を見る観点が変化していること、また、サイレントマジョリティの存在を説明する中で、社会における学校の見方を考える機会を設定した。 また、自閉症児への日常生活指導として排便や給食指導に際して留意するポイント並びに肢体不自由児童生徒への対応として「まず生きる力」の獲得に関連し摂食指導の重要性やポジショニング等について資料を基に説明を行った。 また、給食の献立に関連して「食物アレルギー」について資料を基に迅速な対応等の重要性について説明を行った。 上記以外にも初任者以外の教員から「重篤な中学部生徒への教科指導」に関して、上級学部に進級したものの発達段階でさほどの成長が見られない中、小学部段階での指導内容に係る相談を受け、生活年齢を踏まえた単元設定の的確性に関する考慮を行った上で類似する単元においてもねらいや評価の観点を変化させること並びに各発達段階で指導の対象となる「ことば」や「文字」並びに「数」に関する教材アプリ等の教示を行った。</p>
<p>10月</p>	<p>※各初任者が実施する朝の会の参観 ※中学部の課題別学習 ※小学部が実施する近隣小学校との交流の授業を参観 ※中学部3年生特別活動「修学旅行の事前学習」 ※小学部の学習発表会に向けた指導 等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 初任者が参画する各授業について、対象児童生徒の発達段階から見た指導内容の妥当性が指導案に反映されているか、活動の様子が効率よく評価できるかについて説明を行う上で、「当事者意識」を大切に、また、ともに授業を進めるサプティチャーの観点に立って指導案を作成することの重要性を伝えた。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 資料を用いたカンファでは、小学部が行った交流教育に関連し、小・中学校に多くの発達障害児童生徒が在籍している現況にもふれ、参考になる指示の仕方や題材設定について考察を加えた。他方、特別支援学校を卒業した後に障害生徒が社会参加をする状況について説明を行い、保護者や生徒の思いと企業や社会のニーズ、要望に相応の開きがある点について考察を加え、小・中学部に在籍している段階から「現状でできること」や「指導の成果が見込まれる内容」に関して見通しを持って指導を行う必要について説明を行った。</p>
<p>11月</p>	<p>※小学部特別活動「相撲大会」 ※高等部作業学習「ロハスフェア」の参観 ※中学部修学旅行の事前学習 ※小学部音楽 ※中学部数学 等々</p>	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 高等部生徒による「ロハスフェア」を見学したことを契機に本校独自の取り組みである「さくらフェローの会」の活動の内容を紹介し、先月に行った進路指導に係る内容を具体的な事例をもとに説明を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 「絵本の読み聞かせ」において、教員が恣意的に絵本を加えたりすることは著作権法に抵触する可能性について触れ、発行元に対する許諾申請の重要性について解説を加えた。 他方、校内で行われている自主研修に初任者とともに参加し、聴覚障害児に対する指導や聴覚障害児の特性についても説明を加えるなど、他障害に関する知見を</p>

		深める説明を行った。
12月	※小学部音楽 ※中学部特別活動 ※中学部終わりの会の運営 ※中学部数学「お金の学習」 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 小学部新入生が約8箇月の学校生活を経て、成長に変容が見られる背景について日常の丁寧な指導や個別の教育目標に準拠して学年全体が協同して取り組む点を評価、集団指導の重要性について改めて説明を行った。また、終わりの会等において生徒自身の思いを言語化する重要性についてもふれ、生徒が主体となって運営する中で、教師の思いをいかに伝えるかについて具体的なアドバイスをを行った。数学では、繰り下がりの引き算を例に、障害によって得意な学び方が異なる点を説明し、通常学級で行っている指導方法以外にも効果的な学びがある点について実践の内容を考察した。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 資料を用いたカンファでは、学期末を控え、ベテランの教師といえども保護者との対応に苦慮している現状について説明を行い、資料の読み合わせを経て適切な保護者との関係構築が未然のクレーム防止につながることを説明した。</p>
1月	※小学部日常生活指導 ※小学部「ひらがな指導」 ※中学部「旬の野菜」 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 小学部における課題別学習において、教材設定を行う場合、「授業＝子どもの活動＋教師の意図」を改めて説明し、学習内容に教師の意図をどのように付加するかによって授業の質が変化することを解説。一方でひらがなの学習を始めた児童に対し、適切で汎用性が効く教材が準備されていることを評価した。中学部においては、活発な授業を行う上で教師の果たす役割やいかに反応や発言を引き出すかについて、授業への導入の工夫とうについて考察を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 ユニバーサルデザインとバリアフリーの違いについて解説するとともに、バリアフリーの重要性が認識されていることから、授業におけるユニバーサルデザインについて解説、障害の軽重を問わず、わかりやすい授業を構築する上でのポイントを解説した。また、障害生徒に対する情報メディアの活用や教師として重要な内容である「書くことや喋ること」についても解説を行った。</p>
2月	※小学部低学年「朝の会、音楽」 ※小学部「自立活動、日常生活指導」 ※小学部「ひらがな指導」 ※中学部「卒業に向けて」 等々	<p>【参観した授業を通じて指導した内容】 小学部1年生の朝の会において、児童が往き来と活動する様子を評価するとともに、各初任者が果たしてきた役割について改めて評価した。一方、年度途中に転入した施設入所児童への対応について、あらためて「当事者意識」の重要性を示唆、自傷行為の背景や不安感の減少にどのような取り組みが有効化について協議を行い、今後の対応についてアドバイスをを行った。 一方、ひらがなへの導入に関して、前回に比して教材の工夫が見られた点について評価を行うとともに、授業に対する興味関心を維持できる工夫について、こちらも授業に入る中で考察を行った。</p> <p>【カンファレンスを通じて指導した内容】 最終のカンファでは、この一年間を通じて感じた個々の成長をや課題について話し合い、個々の成長を評価するとともに各課題解決に向けてのアドバイスをを行った。また、各人宛の文書にまとめて今後の成長を期待するとともに、先達が残したいいわゆる「名言」について集約したものを手渡し、今後のキャリアの中で省察を行う際の参考になるようにとの思いを伝えた。</p>

Ⅲ 校内研修支援

「学び、学び合う」学校風土の醸成に向けての一支援 ～ 大学との連携による校内研修支援の概要と省察 ～

和歌山大学客員教授 南 知孝

1 はじめに

校内研修の魅力の一つは、「授業づくりや児童生徒理解に基づく対応の仕方」等、日々の教育実践に役立ったり反映できたりすることであると考えます。当職として校内研修を支援することについて、学校や教員の要望や期待にどこまで沿うことができたのか甚だ心もとない気もするが、支援になったのではと思われる事柄を列記し省察する。

2 若手教員の授業参観及びカンファレンスについて

[要旨]



メンター制による校内研修支援プログラムについての学校長の理解により、初任者支援に加えて多くの若手教員の授業を参観した。カンファレンスは個別に行うことを基本としつつも、場合によっては数人単位で実施することもあった。授業参観とカンファレンスを重ねるにつれ、「先生、また授業を見てください」という声も聞か

れるようになった。指導方法や指導技術等、授業改善に向けた若手教員の意識の向上という点では、ある程度寄与することができたのではないかと考えている。

[概要]

(1) C教諭について(採用から3年目)

主に国語や算数の授業を参観し、カンファレンスを行った。

右の写真は、7月5日(火)国語「スイミーの音読劇の発表会をしよう」の授業を参観し、終わりに子どもたちにお礼のメッセージを伝えている場面である。後日、C教諭から学級の子どもたちがとても喜んでいたとの報告を受けた。

12月6日(火)算数「かけ算2」の授業を参観した。カンファレンスでは、子どもたちの発表をうまく整理し板書していたことを褒めたが、課題の与え方に少し工夫の余地があるのではと話し、黒板を使って具体



例を交えながらその理由を説明した。C教諭の「明日もう一度授業をやり直してみる」という言葉から、授業改善に向けての強い意気込みと熱意を感じた。今の気持ちを忘れず、教員としてさらにステップアップしてほしいと伝えた。

(2) B教諭について（採用から2年目）

主に算数や道徳の時間について、授業を参観しカンファレンスを行った。

4月26日（火）「ぼくは、鼻毛じゃない」という資料を使った道徳の授業を参観した。

B教諭はカンファレンスで、道徳の授業づくりについて悩んでいることを話した。「道徳の授業、どうしたらいいか分からなくなってきた。教えてほしい。」という切実な相談があった。そこで、道徳の時間の特質や1時間の指導の大まかな流れとそのポイントについて説明した。特に、終末の場面で「〇〇してはいけません。」「〇〇している人は直すようにしましょう。」といった説教や注意喚起にならないよう気をつけることを伝えた。

9月27日（火）再度、道徳の授業を参観した。フラッシュカードを使ったり場面絵を準備したりと様々な工夫が見られた。また、終末の場面では、子どもたちと一緒に価値について考え、話し合うところで授業を終えた。前回、指摘したことを意識して実践に生かしており、授業力を向上したいという意欲を感じた。また、B教諭の謙虚さと頑張ろうとする前向きな姿勢を褒めた。

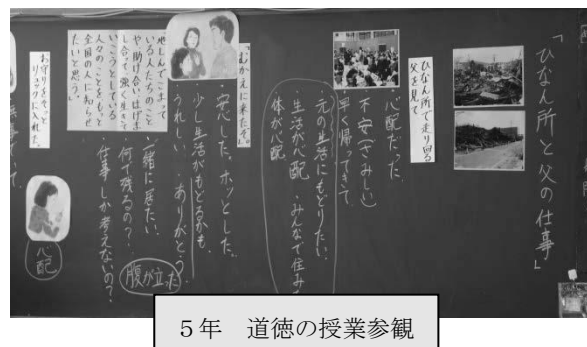


(3) D講師について（本年4月から勤務）

主に、総合的な学習の時間や算数の授業を参観した。D講師は、校内研修の一環として、11月に総合的な学習の時間の研究授業を実施することになっていた。そこで、10月初旬、学校長を介して、学習指導案作成について指導してほしい旨の依頼を受けた。

放課後2～3回学校を訪問し指導計画や本時の展開案について、D講師の授業プランを検討した。しかし、まだ授業構想が固まっておらず、試行錯誤を繰り返していたようなので、一つ一つ丁寧に整理しながら順序立てて助言をしていった。特に、地域の人との関わりにも重点を置くこと、アンケートや聞き取り調査等、多様な体験を位置付けていくことが、子どもたちの意欲的な学びにつながることを伝えた。

後日参観し、カンファレンスで伝えたことが学習指導案にも反映されており、自信をもって研究授業を行っている姿を見ることができた。



当該校1年目の講師として、総合的な学習の時間の年間指導計画を作成することや研究授業の行うことは大きなプレッシャーであり試練でもあったが、このことは、教師を目指すうえで貴重な経験になったと思われる。

3 校内研修における講師として

[要旨]

学校は、長年にわたって文部科学省や和歌山県教育委員会及び和歌山市教育委員会の研究指定を受け、「生活科及び総合的な学習の時間」についての研究・実践を重ねてきている。平成28年11月25日(金)には、「第19回近畿地区小学校生活科・



「学び、学び合う場」としての校内研修

総合的な学習教育研究協議会和歌山大会」の授業校として、各学年公開授業を提供し、実践の成果を披露することができた。

それに先立ち9月頃、学校長から「総合的な学習の時間」について校内研修会で話をしてほしいとの依頼を受け快諾した。

11月1日(火)学校を訪問し、5年生「守ろう みんなの有功!いつか来る日のために・・・」の研究授業の参観、授業についての指導・助言、続いて、講話を行った。講話では、(1)「子どもたちの学習意欲を高めるために」、(2)「年間指導計画及び単元を作成するときのポイント」の2つのことに焦点を絞って話をした。

学校長からは「参考になり、単元計画作成や授業改善等、少しでも実践に反映できるようにしていきたい。」との言葉をいただいた。また、ある教員から「今日の話の内容は、よく分かりました。ぜひ授業実践に生かしていきたい。」という声も聞くことができた。

[講話の概要]

学校は「生活科及び総合的な学習の時間」についての研究発表会を何度も開催する等、継続して研究を続けてきている。学校の実践で特筆すべきことは、各学年各学級のそれぞれの担任が、自分の思いや児童の実態、前年度の取組等を考慮・勘案しながら、学級カリキュラム(マイ年間指導計画)を作成し、それに基づき授業を行っているところである。どの時期に、どのくらいの時間をかけ、どのように学習活動を展開していくのか、またその活動を通して、どの程度まで子どもたちの学びを高めたいのか等、1年間にわたる授業構想を立て実践に取り組んでいるのである。



「総合的な学習の時間」について

しかし、学校には生活科や総合的な学習の時間について造詣が深い教員もいればそうでない教員もいる。子どもたちと同様に教師にも一人ひとり違った興味・関心

があり、また得意な教科や不得手な教科があるのも事実である。特に、初任者等の若手教員や講師、初めて当該校に赴任してきた教員にとって、年度当初の繁忙さの中で、マイカリキュラムを作成するという事は、大きなプレッシャーであるとともに大きな負担にもなっていると思われる。そういう厳しい現実があることは学校長も承知しており、何とか改善していきたいという意向をもっているようである。

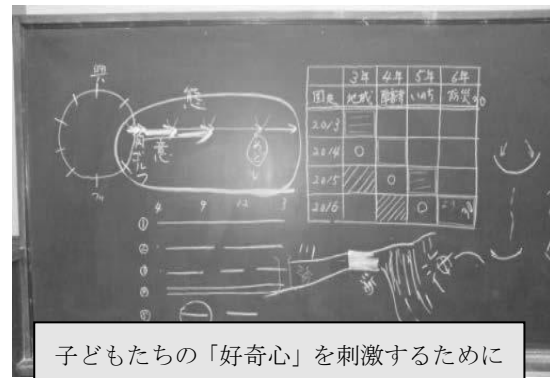
そこで、今回年間指導計画を作成するにあたって、少し角度を変えた視点からテーマや内容を検討してもらえるように具体例を示しながら提案をした。

次に、これらの学習は何十時間にも及ぶ非常に息の長い学習活動が展開していくことになるので、子どもたちが息切れを起こさないように、また、意欲的な探究活動が可能となるように、ポイントポイントで「子どもたちの好奇心をくすぐる」教師の働きかけが学習活動の活性化につながるということも具体例を交えながら、併せて、話をした。

(1) 子どもたちの学習意欲を高め、持続していくために・・・

(子どもの内面が、興味から関心、そして意欲から態度へと変容するために)

学校現場では、「興味」「関心」「意欲」「態度」という言葉のもつ意味について、あまり深く考えることなく並列・セットで使用する 경우가往々にしてある。子どもたちの学習時における気持ちの変容や高まりを表す言葉として、それぞれの言葉のもつ意味の違いについて、まず話をした。



子どもたちの「好奇心」を刺激するために

次に、どの教科の授業でもそうであるが、特に生活科や総合的な学習の時間の授業においては、子どもたちの興味や関心は長続きしないことが多く、担任の指示や命令によって学習活動が展開されることも少なくない。所謂、学習意欲の持続化という問題である。

そこで、授業では多様な体験活動を位置づけることに加えて、「おもしろそうだ。もっと調べてみたい。」「あれ！ どうしてだろう？」「本当にそうなのか？」「他の場合はどうなるのか」等々、子どもたちの「好奇心をくすぐったり」「ゆさぶりや新たな刺激を与えたり」といった教師の強い働きかけが重要になってくる。単元計画のどの場面で、どのようなことをどんなタイミングで、子どもたちに提供していくかが、学習活動が活性化するか否かの大きな分かれ目であると伝えた。

そのためには、授業者の深い教材研究とそれに基づく教材や教具の周到な準備、そして単元を見通す確かな授業計画が大切であると話をした。

(2) 単元を作成する際のポイント

当該校は、上記で述べたとおり各学級担任がそれぞれ学級単位で年間指導計画を作成している。また、扱う内容やテーマについても、1年間（70時間）を通して同じ内容を扱う学級がほとんどである。1つの内容を掘り下げて学習できる

良さはあるものの、同じ内容で長時間にわたって学習することについて、子どもたちのモチベーションを如何に維持していくかということや内容の系統性や重なりといった面で、少し検討の余地があるように思われた。

そこで、一例として下のような年間計画を提案した。

学校長からは、次年度の年間指導計画を立てる際の参考資料として検討してみたいという言葉を開くことができた。

学校として、是非扱いたい内容を設定する

	3年	4年	5年	6年
内容（固定） （35時間程度）	地域	福祉	いのち	防災
学年団で 検討・計画した 独自の内容		学年団として、扱いたい内容を設定する		◆自分史を書こう ◆ボランティアをしよう

4 大学と学校とが連携して取り組んだ事例

～特別な支援を必要とする児童（Y児）等への対応について～

[要旨]

4月からカンファレンスには担任A（初任者）とともに学校長も入り、Y児への支援方法やその対応について何度も協議を重ねた。Y児の言動によって授業が中断されることが多く、計画していた学習内容がクリアできないことも度々あった。また、他の児童の学習にも大きな支障を及ぼしていた。Y児への対応とその他の児童の学習権を保障するという2つのことが重なり、担任の精神的な疲弊が非常に気になっていた。

カンファレンスでは、Y児の一日の様子をメモに残し、学校長に報告するとともに必要によっては指示を仰ぐこと、保護者との連絡は密にするとともに、Y児の頑張ったことやできるようになったことも伝えるようにすること等々助言した。

6月からは、学校長の強い要請によって、和歌山市教育委員会から支援員が配置され、Y児の支援にあたっている。

後日、学校長の了解を得て大学にその詳細を報告した。学内で検討した結果、本学I教授が学校に派遣され支援することになった。

6月下旬からI教授は何回か学校を訪問し、学校長や担任A、スクールカウンセラーとの面談、Y児の行動観察及び支援の仕方、保護者への対応等について学校に助言をした。また、医療機関を紹介したり発達相談及び発達検査の受診を促したりと専門的な視点からアドバイスをするとともにコーディネートも行った。学校長もそのアドバイスに則り、危機感をもって迅速に対応してくれた。その結果、Y児や保護者への支援体制が少しずつ整備されていった。すると、Y児は、授業中の立歩きや教室外への飛び出しはあるもののその頻度は減少し、言動には少し落ち着きが見

られるようになってきた。また、学校が組織としてY児への支援体制をとったことで、保護者は学校長や担任Aに信頼を寄せるようになり、現在、Y児の様子についての相互連絡も密に行なわれ、情報の共有を図る等、変化が現れてきている。

担任Aは、支援体制が整ったことや支援員が入ったことで、Y児の言動に注意を払いつつも安心して学級児童の学習指導等に当たることができている。

このように、大学からのサポートは学校にとって大きな支援になったと思われる。

5 校内研修への講師紹介について

〔要旨〕

5月下旬、学校長から夏季校内研修会を計画しているので講師を探してほしい旨の依頼を受けた。(現)京都市立紫野小学校校長 辻本博子氏を紹介するとともにアポイントを取り快諾を得ることができた。辻本氏は生活科や総合的な学習の時間についての造詣が深く、京都市教育委員会指導主事として在籍中には、学校訪問等を通じての指導助言に卓越した手腕を発揮されたと聞いていた。



研修会での辻本氏の話は、豊富な実践と経験に裏打ちされた講義であった。また、教員も授業実践に生かそうと熱心にメモを取り、講義に聞き入っていた。

＝ 演題 ＝

「子どもが本気になる探究的な学び」
(総合的な学習の時間について)

〔概要〕

8月4日(木)、辻本博子氏を講師に夏季校内研修会が行われた。11月に開催される「第19回近畿地区小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会和歌山大会」の授業公開を控え、学習指導案についての指導と助言並びに自らの実践に基づく講話をしていただいた。



特に、現在在籍している学校で、地域や子どもたちの実態を考慮に入れた新たな単元を開発している話は、非常に現実的で説得力があり、学校や教員にとっては、学ぶべきことや参考にすべき点がたくさんあったように思われる。

たいへん実践的で且つ実りの多い研修会になったようである。

メンター制における校内研修支援

和歌山大学客員教授 鈴木 達也

1 はじめに

平成 28 年 12 月 16 日付で、中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下「中教審答申」と略す。）が答申された。そこには次期学習指導要領改訂の指針が述べられているが、筆者の個人的な関心で粗っぽくまとめると、以下の 4 項目になる。

- ①「どのように学ぶか」への言及
- ②「教科道徳」の新設
- ③英語教育の充実（小学校英語科の新設）
- ④「チーム学校」の意識付け

これらは既に予想していたことなので、校長・教頭はもとより教員集団としても共通認識できていたことだろう。

メンター制を通じて中学校教育と関わる中で、筆者としてもこれらを十分に認識して指導助言できればと考えていた。

ただ、メンター制開始一年目であり、しかも紀の川市の教員たちとはほとんど面識のない中で、これらに関与することは極めて難しい課題だった。例えば、④に関して言うならば、二つの中学校にどのような役割の人たちが関与していて、どのように機能しているか、そして校長は「チームK中」「チームU中」をどのように構想しているかなどはわからず、ここで言及することなどできない。

筆者の能力上、せいぜいが①に関して、なぜこのような考え方が「中教審答申」に登場してきたのか、その意義や目標、課題などについて説明することしかない。

昭和 22 年に初めての「学習指導要領」（試案も含む。）が出されて以来、「学習指導要領」は子どもたちが学ぶ内容を規定してきた。初期の社会科などではそれぞれの学校で扱う対象は任意とされたが、それでも内容を規定してきたことは一貫している。それが次期の「学習指導要領」では学ぶ方法が記述されることになるらしい。いわゆる「アクティブ・ラーニング」を積極的に導入しようというわけである。

ここでは校内研修支援（「研修」とはいうものの、例えば校内の「現職教育」で筆者がそのような話をしたというようなことはない。）と呼んでいいと思われるような枠組みの中で、筆者が行ったことを述べていきたい。

なぜアクティブ・ラーニングが声高に叫ばれるようになってきたのか。筆者はそこに社会や家族の変容に伴う子どもの変容があると考え。詳しくは拙論に譲るが、要するにこれまでの授業方法では子どもたちの理解が深まらなくなったということである。中学校の教室を回っていて気になることに、多くの子どもたちが机に突っ伏し、授業に参加しよ

うとしていないことがある。いわゆる「学びからの逃走」現象である。そして一部の教員には、それを指摘する者に対して「教室から出て歩き回らないだけでした」と肯定的言辭を弄する者もいる。それでは我々は何のために授業を行うのか！

そういう子どもたちに学ぶ意欲を喚起し、少しでも学ぶ楽しさを知らしめるためには従来のような一斉講義型の授業では限界がある。課題に対して自らが意欲的に関わり、その課題を他の子どもたちと協力して解決していく、そのような授業を展開することが喫緊の課題となっているのである。

ただ「アクティブ・ラーニング」は一つの決まりきった学習方法があるわけではない。例えば和歌山市の中学校では佐藤学氏を招聘し、「学び合い活動」に特化した「学びの共同体づくり」を目指しているし、紀美野町の美里中学校では「日本協同教育学会」の会員である教員を中心に「協同学習」を進めている。また、和歌山大学教育学部附属中学校の研究発表大会での授業を参観すると、ほとんどすべての学級でグループ学習が行われている。多種多様な「アクティブ・ラーニング」が展開されている。学ぶべき対象はふんだんにある。あとは学校の教員の学ぶ意欲の問題なのである。子どもの現状に危機感を覚え、それに対応するために授業改善を目指そうとする意欲を持つか持たないかが問題なのである。

そのことを二つの学校でもできるだけ多くの先生方に話をした。勿論、初任者への指導でもより具体的に指導した。このことは既に「初任者への指導」の項で詳しく書いているのでここでは重複を避ける。

しかし、中学校ではこういう研修を阻害する要因があるのも事実である。そしてそれは決して教員の後ろ向きの姿勢が原因ではない。寧ろ「生徒のために」という気持ちから派生している。

それは「3つの指導」である。すなわち、

- A 生徒指導
- B 進路指導
- C 部活動指導 である。

「生徒指導」とは中学校では重大な課題である。K中、U中でも生徒指導主任が全体に目配りし、週に一度は「生徒指導委員会」が開かれ、学年相互の意思疎通を図っていた。まさに登校から下校まで先生方は生徒の言動に気を配っている。きちんとした「生徒指導」が行われることできちんとした「授業」が展開できると、そう確信している教員が多い。

「生徒指導」が先か「授業改善」が先かは既に述べたように永遠のテーマだろう。

中学校も3年生ともなると生徒たちは進学したい高校に合格できるかどうか注目する（現在、ほとんどの生徒が進学希望である。）。既に2年生からも掲示物に進路指導に関するものが現れる。二つの学校で授業を参観していると、生徒の中から「これは入試に出るのか？」「この点数で〇〇高校へ行けるのか？」といった質問が出てくる。「入試で点数の取れる授業をしてほしい」というのが生徒の本音かもしれない。それは「アクティブ・

ラーニング」の対極にある授業かもしれない。

そして部活動である。U中学校では授業カンファレンスは放課後に位置付けられている。ところが放課後ともなると、それぞれの部員が顧問の先生のところに来る。頻繁にやってくる。そして指示を受ける。顧問にしても指導者なしで活動させることが不安である。放課後にはそれ以外の校務もあり、先生は忙しい。落ち着いてカンファレンスに集中できない日もあった。中学校教員の多忙化が部活動指導が原因であることは、既にマスコミ等で報道されているとおりである。遅まきながら文部科学省も部活動に一定の縛りを掛けることを表明しているが、果たしてどれだけの効果があるか。この部活動の長時間指導が授業改善を阻害していることは間違いのない事実である。

二つの学校の教員たちからもそれに類する質問を受けたことがある。難しい問題である。長らく中学校現場に勤務してきた経験からA～Cの指導が重要であることは知悉している。どれも蔑ろにすることはできない。それを勘案した上で答えたのは「部活動指導の軽減」である。周知のように「部活動」は教育課程外の活動であり、軽減するとなるとそれ以外にないのではないかというのが筆者の考えであった。「部活動」での成績に拘る向きも多いが、それが学校の教育活動の中心となつてはいけぬ。そのことを伝えたつもりだが、果たしてどこまで伝わったか。

2 社会科の示範授業

筆者の優先順位としては、上記の3つの指導よりもまずは授業改善である。それは両校の先生方に機会ある毎に伝えてきた。その結果として、実現したのが初任者指導の論で書いたU中学校における示範授業である。

当該授業は「示範授業」と位置付けている通り、H教諭の参考にと企画したものである。それが次第に大袈裟なものになってしまい、和歌山大学教育学部の教職大学院で学ぶ方たちが大勢参観に来てくれた。そしてU中学校の教員の方々も授業のやりくりをして参観してくれた。

これもまた既に述べたように、EUを扱ったもので、直前にイギリスのEU離脱の国民投票があり、その結果「離脱」が決定したことから、それを題材とすることにした。以下にその際の学習指導案を掲げる。

社会科学習指導案

和歌山大学教職実践支援室

鈴木 達也

- 1 日 時 平成 28 年 7 月 12 日 (火) 第 2 時限 (9:40~10:30)
- 2 単 元 名 ヨーロッパ州
- 3 単元計画 略
- 4 本時の授業 「EU について考える～イギリスの国民投票を通して～」
- 5 教 材 観

2016 年 6 月下旬、イギリスにおいて、EU (ヨーロッパ連合) からの離脱の賛否を問う国民投票が実施され、「離脱賛成」が多数を占めるという結果が出た。

このニュースは瞬く間に世界中を駆け巡り、世界各国の株式市場は軒並み大幅な下落となり、為替相場におけるユーロは全面安となった。それだけ衝撃的な出来事だったということである。

EU 結成の目的は大きく二つあった。一つは、これまで域内で数多くの戦争を経験してきたヨーロッパ各国が平和を維持するためであり、いま一つは地盤沈下に喘ぐヨーロッパの相対的な地位向上を目指すためであった。

ただ、イギリスはその元となった 1967 年の EC (ヨーロッパ共同体) 結成時に加盟しなかったことから、そもそも EU 参加には慎重であったのだが、ヨーロッパは一つというスローガンの下、加わったという経緯があり、今回の離脱は或る意味、必然であったと言えるかもしれない。

さて、日本から遠く離れたヨーロッパの出来事であり、また離脱しようが残留しようが我々の生活に直接影響を与えるものではないため、生徒たちがどれだけの関心を持ってこのニュースに接したかは未知である。しかし、世界に衝撃にもたらし、日本でも大きく扱われた出来事であったため、少なくともかなりの生徒がこのことを知っているだろうと考え、本授業を構想した。そこには「これだけの世界的なニュースなのだから知っておいてほしい」という願望もある。

その上で、ヨーロッパにおける EU の存在意義、現状と課題を理解させ、最終的にはイギリスの EU から離脱に賛成か反対かを考えさせたい。

本授業は開始時から一貫して四人によるグループ学習として構想している。そのグループ分けは当該クラスの担任による任意のものであることを申し添える。

- 6 本時の目標
 - ①ヨーロッパにおける EU の意義やその歴史的経緯、現状と抱える課題などについて理解することができる。
 - ②イギリスが EU から離脱したことについて、「賛成」か「反対」、若しくは「どちらとも言えない」等、自らの意見を述べることができる。

7 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	備考
<p>○「ヨーロッパ」を英語で書くとどんな綴りになるのか考える。</p> <p>グループで考え、その綴りをホワイトボード(以下「WB」と略す)に書いて示す。</p>	<p>○教科書を閉じさせておく。</p> <p>○「EU」のEが「ヨーロッパ」の頭文字であることに気付かせる(ただし、すぐに答には言及しない)。</p>	<p>(予想)</p> <p>・Yoropa</p> <p>・Yourope</p> <p>他</p>
<p>【イギリスのEU離脱・残留に関する国民投票についてのポスターを見て】</p> <p>○この写真が何を示しているものか考え、発表する。</p>	<p>○生徒たちにはある程度イギリスの国民投票についての知識があると思われるので(予想)、自由に発表させる。</p>	<p>国民投票に関するポスター</p>
<p>○EUとは何なのかを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・EUが結成されるまでの歴史的経緯について理解する。 ・歴史的経緯から推論できるEUの目的を、グループ別にWBに書いて発表する。 <p>「二度と戦争をしない」 「ヨーロッパの地位向上」 「貿易や人の移動の自由化」等々</p> <p>○EUの課題について考える。</p> <p>「非ヨーロッパ系の人々の流入」 「イギリス対フランス」等々</p>	<p>○EUの歴史的経緯についてはTの説明が中心となる。</p> <p>○EUの目的についてはできるだけ生徒の思考を尊重する。 →挙手がない場合は指名する。</p> <p>○「なぜ、イギリスはEUからの離脱を決めたのか？」をヒントに考えさせる。</p> <p>○「移民」等の背景についてはTの説明が必要となる。</p>	<p>P66の【4】の図をPCで前に示す。</p>
<p>・イギリスのEU離脱について、客観的な立場から「賛成」か「反対」かを考え、その理由を述べる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時間に余裕があればグループ別学習を実施し、そこでグループ毎の結論を発表させる。なければ、全体を「賛成」「反対」の二つに分け、議論させる。 ・主観的な話し合いになるだろうが、それで良しとする。 	

授業はほぼ指導案通りに展開した。

この授業のヤマ場は、「イギリスのEU離脱に賛成か、反対か、客観的な立場で考えよう」である。1年生には難しいと思われるかもしれないが、グループによる話し合い活動は、簡単な課題では成り立たない。佐藤学氏は「ジャンプの課題」を授業の中に取り入れることとしているが、それを想定しているわけではないのだが、やはりある程度難しくな

ければいけない。多くの協同学習で生徒も参観者も退屈するのはそれが余りにも平易だからである。挑戦をするくらいの課題でなければダメである。もう一つ、結論は一つにしてはいけない。この授業の回答も「賛成」「反対」どちらでもいい。要はその理由を考えているかどうかである。

実はこの学級の担任は初任者のT教諭であり、普段は活発な子どもたちである。前日に「明日、僕が授業するからよろしくね」と挨拶した時は「まかしといて」などと言っていたくせに、授業が始まるとシュンとしてしまって静かなこと。それでも話し合いはできていた。難しい課題であったが、生徒たちは真剣に考えていた。この授業がどれだけU中学校の校内研修に資することになったかはわからない。ただH教諭の役には立っただろうと自負している。

3 その他の校内研修支援

校内研修への筆者への貢献は実はこの示範授業ぐらいで、まさに汗顔の至りなのであるが、この示範授業以外に少しは両校に貢献できたことを、紙数を埋めるために書いておくことにする。

K中学校では筆者の職員室での机がたまたま生徒指導主任の隣だったため、生徒指導全般についての話を聞かせてもらった。彼と共に校内を回らせてもらったこともあった。多くは和歌山市とは異なった取組のあれこれを聞かせてもらい、筆者が勉強させてもらった。

K中学校は、和歌山大学教育学部と連携事業を行っており、この時は指導助言という役割をいただいた。研究授業では理科における協同学習を見た。ジグソーの授業で秀逸だったことも既にK中学校のところで書いている。この授業参観直後、K教諭には「違う教科だけどとても参考になったはず」と言った。彼女にとっても貴重な授業参観だったはずである。

U中学校では二年目、三年目の若手教員の先生の授業を参観させてもらっている。短いコメント程度の助言しかしていないが、授業改善に役立っていれば嬉しい。

このような取組が当該の学校にとってどれだけの効果をもたらしたかは不分明だが、できるだけ関わりを持つように努力した。

その際のキーワードは「同僚性」である。学校だけではなくすべての組織は人と人との関係で構築されている。これらの人々が同じ目標に沿って同じ目線で取り組むことがよりよい組織をつくりだすことになる。学校で言えば、生徒一人一人について話し合ったり、自分の授業について相談に乗ったりできるような雰囲気作りが必要である。それを同僚性と呼ぶ。筆者は二つの学校においてそこに深く関わるような取組はできていないのだが、残りの期間を通じて同僚性構築の礎を築けるよう努力していきたい。

1 はじめに

校内研修が活性化するための必要条件は、各教員の学校への帰属意識が高いことと各教員同士の仲間意識が高いことがあげられる。特に、教員同士の仲間意識が高い場合では、すでに身につけてある教育技術を教え合うことができたり、成功した事例や現在悩んでいる事象等を普段の雑談の中で話すことができたりする機会が多い。

一年間、それぞれの初任者への指導を通して行った校内研修支援が、各学校の校長や教員の期待にどれだけ寄与できたかということは、はなはだ恥ずかしい限りではあるが、次に述べることとする。

2 各学校の概要

山崎北小学校では、児童数が716人、学級数が25学級、教員数が31人である。また、従来から中堅教員と言われている教員の割合は、約3%である。

岩出小学校では、児童数が364人、学級数が15学級、教員数が20人である。また、従来から中堅教員と言われている教員の割合は、約15%である。

昨今、全国的にも中堅教員の割合が低くなり、学校においてリーダーとして活躍しているだろう教員の数が少なくなっていることになる。そのためか、各学校において中堅教員を指す年齢が低くなっていると考えられる。

そこで、今後、もっと若い年齢層の教員たちに、各学校のメンターとなって、さらに若い年齢層の教員たちに指導や助言等を行うことが望まれてくる。

3 初任者以外の教員とのコミュニケーション

通常は、初任者の授業を参観して、放課後にカンファレンスを行っているのですが、初任者以外の教員と直接コミュニケーションをとることが難しいと感じていた。そこで、職員室に、私の机を設置していただいた。そうすると、休憩時間等に初任者以外の教員と少しずつコミュニケーションが取れるようになってきた。

例えば、前の週に参観した初任者の授業のカンファレンスの中で話し合いになったこと（5年生の算数、平均とその利用の中の、「図書室か



職員室にあるプロジェクト教員の机

ら借りた本の冊数を調べたら、1日平均5.2冊であった。20日間の貸し出し日に、およそ何冊の本を借りると考えますか。」という問題において、テストで式のところを 5.2×20 を、 20×5.2 と書いていた場合、どのように採点するかということ)について、拠点校指導教員と職員室で話し合っていたところ、近くに座っていた教諭が興味を引いていた様子に感じたので、その教諭に考えを聞いてみた。その教諭は、「 20×5.2 と書いていた場合、小学校段階では間違いとして捉えま

4 講師の授業参観

5月9日から、講師の授業を、毎回参観した。カンファレンスでは、iPadで録画した映像等を見ながら、適宜アドバイスを行った。また、初任者の人たちに、自分であればどのようにしていくかを考えてもらったりもした。次の週の授業では、うまくいったときもあれば、子どもたちの状況が変わらないときもあったが、講師の日頃の授業の取組や困り感等を広められたのはよかった。



5 夏季研修

それぞれの小学校では、夏季休業中に、何日かの校内研修を実施しているが、そのうちの一回を、山崎北小学校では7月27日(水)に、岩出小学校では8月5日(金)に「授業づくりのために」という演題で、講話の形で実施させていただいた。

内容については、①先輩の先生に教えていただいたこと、②現在の小中学校の教員の年齢構成、③大切な2つのこと、④和歌山の授業づくり基礎・基本3か条、⑤授業の練り上げについて、⑥授業力向上に向けて、⑦心と目的意識 である。

先輩の先生に教えていただいたことについては、私が初任の時と2年目の時、4年目の時の話をした。

初任の時の話は、算数研究会の研究授業をすることになった内容である。その時に6年生の先生が、「僕が先に研究授業をするから、見て。」と言ってくれたのだが、今まで見たことがなかった綿密な指導案で、授業は、子どもが活発に活動する素晴らしいものであった。この6年生の先生は、指導案の書き方、授業の行い方を教え

てくれていたのである。

2年目の話は、学年主任が、「みんなで授業を上手になろうや。」と言って学年ワークとして、毎週略案を書いて授業の見せ合いを行った内容である。学年主任が、メンターとなり学年全体を支援していた。

当時は、初任者の研修はほとんどなかったが、多くの同じ学校の先輩の先生が、私に手本を見せてくれたりして、教えてくれた。

4年目の話は、中学校での内容である。数学の先輩教師が、数学だよりを出していたので、さっそく真似をした。そのうちに、授業中に書き込んでいけるようにし、自作ワークシートとして使い始めた。同じ学校の先輩の先生方に教えていただいたことが大変多かったことを伝えた。



夏季校内研修の様子

現在の小中学校教諭の年齢構成は、採用から10年未満の人が、小学校で全体の61%、中学校で全体の44%になっている。これは、和歌山市のケースであるが、40歳代の先生が非常に少なく、若い先生をみんなで支えてお互いに学びあっていくことが必要なときであることを強調した。

その後、初任者の授業映像を見せて、毎回のカンファレンスの様子を話し、初任者の授業の参観とカンファレンスにおいて、初任者にアドバイスをしてもらえるように促した。

大切な2つのこととは、教師は人間関係のプロフェッショナルであることと、学習のプロフェッショナルであることを伝えた。

和歌山の授業づくり基礎・基本3か条では、本時の目標・学習課題を明確に板書すること、子どもが自分の考えを書く時間を確保すること、授業のまとめ・ふりかえりの時間を確保することを伝えた。



メモをとる先生

練り上げについては、それぞれの学校で行われた初任者の授業映像を見ながら、カンファレンスで行った内容を話した。

最後に、授業力向上に向けて大切なこと、子どもたちに目的意識を育てること等

を話して講話を終えた。

6 iPad を利用したカンファレンス

4月当初、授業参観時に iPad で撮影することとノートに授業記録を記録することを同時にすることができなくて、ノートに授業を記録することを中心にして、3分から5分程度 iPad で撮影していた。カンファレンスでは、授業の様子の撮影したところを見せてアドバイスする程度であった。

これでは、ポイントをついた指導ができない、カンファレンスに参加した他の教員に多くのメリットを与えられないと考え、まず、iPad では、45分間授業のすべてを録画するようにした。授業参観中は、授業者の発問等の言葉や子どもたちの発言をすべてノートに黒のボールペンで書くようにした。授業が終われば、録画した映像を見直し、赤のボールペンで気になるところや良いところをその時刻とともにノートに書き込んでいった。次に、拠点校指導教員との打ち合わせ時に、映像を見ながらお互いに気付いた点を話し合いながら、さらに赤ペンでノートに書き込んでいった。



放課後のカンファレンスでは、まず本人から本時の授業のふりかえりを行っている。その時は、映像を見せていない。最初は、本人の授業印象をふりかえり、映像に誘導された言動にならないようにするためである。ふりかえりの中で、さらに深く初任者のその時の気持ちや考えを聞く場合は、その部分の映像を見せてさらに深く聞いていく。次に他の参観者に感想を聞いていく。その場合も、その部分の映像を見せて話してもらおう。映像を見ながら話を聞くことになるのでお互いに分かりやすく感じている。拠点校指導教員や校長等の話を聞くときも、「その部分を見せてください。」と言われる場合も多く、その時の映像を見ながら話されることが多い。もちろん



映像を再生していないときは、一時停止の状態にしているので静止画像は常に映しだされており、板書の状況等においても話がしやすい。授業のすべてを録画して

おかないとできないが、参観が5分や10分くらい、あるいはカンファレンスだけに参加する人にとっても、カンファレンスに参加することにより、自分自身学ぶことができるよさがある。また、初任者にアドバイスをたやすく行うことができ、自分自身をふりかえったり、学び直したりしている効果を期待できる。さらに、授業以外でも、自分が抱えている悩みであったり、困ったことを、多くの人で共有することにより、校内で、一体感を伴いながら研修意識が高まっていくと考える。

6月20日（月）に行われた山崎北小学校の授業（5年国語の「きいてきいてきいてみよう」という単元の3時間目）では、子どもたちは3人グループになって、その3人が、それぞれ聞き手、話し手、記録者となってインタビューを行わせようとしていたが、その前に、同じ学年の先生方が内容をわかりやすくするために、聞き手、話し手、記録者となってインタビューを行って撮影した映像を子どもたちに見せていた。映像を見ている子どもたちの表情は素晴らしく、一人として集中していない子どもがいなかった。授業は、「はらはら」「わくわく」「ドキドキ」を目指すものであるが、この場面では、子どもたちの「わくわく」している表情が見えた。

また、次時の授業の予告として先生方が撮影した映像も見せていた。次の時間に何をするのかを先生方で演じてわかりやすくしていたのである。このようにして、初任者とともに多くの先生方の授業研究が平常時に楽し



んで行われていたことは大変素晴らしいことである。

6月10日（金）に行われた岩出小学校の授業（2年算数の「2けたのたし算」という単元の筆算のところ）において、授業に集中しづらい子どもがいた。先生が、10の束を黒板に貼るとき、貼りすぎないように子どもたちに「ストップ」と声をかけさせていった。その多くの子どもたちの声により、授業に集中しづらい子どもも授業に参加するようになっていった。カンファレンスにおいて映像を見ながら初任者に確認すると、隣の学級の先生に教えてもらったということである。また、次の場面では、一人の子どもが前に出て発表するときに、その子どもはみんなに聞いてもらえるように工夫していた。このように工夫して授業に集中しづらい子どもを巻き込んで授業を行っていたのは、放課後等に、同じ学年等の先生方のアドバイスによるものと考えられる。

7 示範授業

平成29年2月20日（月）、1年間の締めくくりとして、初任者に見せるために、

彼らが持ち続けなければならない課題として、「子どもたちに考えることの楽しさを味わわせる～考えるとはこういうこと～」と題して、5年生の子どもたちに授業を行った。

学習は、まず意味を知って覚えることであり、次に、覚えたことを使うことである。年齢が高くなってくると覚えていることが多くなり、覚えたことを使う場合には複雑になってくる。そのどれとどれをどのように使うかが、考えるということになる。また、このことを繰り返すことにより、新しい発見ができる可能性がある。このことを算数を使って具体的に行った。

授業の導入は、具体的なもの、子どもたちが容易に想像できるものが望ましい。そのことにより、親近感がわき、驚きを感じさせられる。本時では、5年生の「変わり方」の導入に合わせて、ブラックボックスを用いた。子どもたちは、知っていることを使って次々と発言した。私は、子どもたちの発言やつぶやきをしっかりと聞き、間違った答えがいくつかあったが、それも取り上げ、表情やしぐさを交えながらほめ続けた。どの子どもも私と目が合った。考えていくとき、間違っているかどうかを自分で判断することは難しい。子どもたちに、自分の考えを他の人に見せることにより、別の考えを聞くことができる、議論ができる、間違っていることを指摘してもらえらること等を知らせたかった。そして、その様子を初任者の人たちに見せたかった。実際、

議論という状態にはできなかったが、少なくとも教室は間違ってもいいという雰囲気を作ること、考えることは楽しいと感じさせることはできたと思う。



示範授業の様子

8 今後の校内研修について

子どもと教師の関係において、教師は、子どもたちが、「わかった。」「なるほど。」「すごい。」「先生、ありがとう。」などと理解を示したり、感動したり、感謝を表したりしたときにやりがいを感じる。だから、目の前にいる子どもたちに、よりわかりやすく教えようとしたり、感動を与えようとしていろいろな活動を考えていく。また、それが教師の仕事なのである。

しかし、現実には、毎日の授業があり、個々の子どもの観察や対応、子ども同士のトラブルや保護者との連携と対応、学校行事、地域との連携、与えられた研修や研究会への参加、さらに、中学校では、現在全国的に問題になっている休みなく続く

部活動等、教師の多忙感が先立ち、学校は、大小の問題を絶えず持ち続けている。

この多忙な毎日の中で、どのようにすれば学び続けていくべき本来の教師の状態になれるのかを考えたとき、一つのヒントが、ある中学生の語った次の話の中にあると考える。

「私の周りにいるすべての人が、私を好きでいてくれたらどんなに楽な気持ちになれるだろう。そして、私のやる気がどんなに大きくなるだろう。」

学校の職員集団が、お互いを「好き」でいられる状態であったなら、どんなに楽しく、どんなにやる気が出て、課題を本気で取り組むだろうか。人は、100%の力を持っているとして、不安定なやる気の出ない状態であれば、その力は、20%も出せない。しかし、心が安定して、やる気満々であれば、100%の力を発揮できるものである。また、新しい発見を生み出すことも可能になるかもしれない。職員室では、様々な年齢の、様々な経験を持っている人がいる。職員室が一つのチームとなり、お互いに教え合い、また、学び合いを常日頃から行っていくことが、本来の研修になるのである。

今後、初任者がさらに向上できるように、初任者を取りまく多くの教師からさらに多くのアドバイスをもらえるようにしたい。そのためには、それらの教師から、「初任者に、ここの部分を見てもらいたい。」というように、ポイントを絞って初任者に授業を見せてもらい、カンファレンスでその思いを聞かせてもらうことも一つの方法であると考えている。

校内研修支援に係る担当者の省察

－特別支援学校におけるメンター制に関して－

和歌山大学客員教授 三反田 和人

1 はじめに

私事で恐縮だが、文部省が初任者研修制度を導入して程なく、当時の養護学校において実際に指導教員として初任者研修を担当した。その後、教育行政に入った後も初任者研修の実務担当として、さまざまな校内研修や校外研修の企画立案に携わった経験があり、今まで特別支援学校各三校の校長として赴任した際も、のべ20名近い初任者の研修を目の当たりにする中で、校内研修の是非が初任者の成長に大きく関与する実態を体験してきた。

当時、筑波にある独立行政法人教員研修センターが「中堅教員のリーダー性の育成」に係るDVDを作成する際、この業務に関わるようにとの依頼を受け、さまざまな議論や実際のコンテンツづくりに参画した際にも、多くの先輩方からさまざまな知見を得ることができた。

当時、中央教育審議会答申「新しい義務教育を創造する」を受け、教育に対する社会の厳しい観点から「揺るぎない信頼」を確立するために、子ども理解力や児童生徒指導力、また集団指導の力量など教育の専門家としての確かな力量を育成することで「あるべき教師像」が見えてくると考えてきた。

一方で、定年退職教員の増加が見込まれ、新規採用教員数が増加する中で、教育技術の伝承をふくまた教員資質の向上が当時においても喫緊の課題とされ、将来的に指導者となる中堅教員の育成が急務との話となった。この中堅教員が、いわゆる本プログラムの「メンター」にあたるかと考えているが、同時に全国の教育研修センターにアンケート調査を行い、若い先生方の課題を集約したが、初任者に対する校内研修の一層の充実が強く求められていると実感した。

当時、議論された若手教員の課題として以下の内容が挙げられる。

- ・ 自分自身が目指す教師像が確立しておらず、スキルやマニュアルに依存しがち。
- ・ 教師間での話し合いや練り上げ、もみ合いの場が少ない。
- ・ 個人によって研修意欲が偏るとともに研修の目的意識が低く、換言性も低い。
- ・ コミュニケーション応力が弱く、場面ごとの子どもへの対応力が弱い。併せて机間巡視において、戸惑っている子どもへの対応力も低い。
- ・ 他の教員からの意見や価値観を受け止める姿勢が弱い。 等々

一方で、研修センターに対する期待として、以下の内容も挙げられた。

- ・ 教科の模範的な事例を具体的にわかりやすく示して欲しい。
- ・ 授業において、自分なりのアレンジが可能な、また、教える意欲が喚起できそうな教材を提示してほしい。
- ・ 優れた教育実践や技法を主役したアーカイブの作成 等々

こうした背景を受け、各研修センター等で実施する研修内容は、現在の教育課題への対応や重要な事案に関する基礎的な知識等を伝授するためのさまざまな工夫を凝らしているが、初任者にとってみれば、自身の教員生活の経験が少ないが故に具体的な内容と捉えにくいきらいもあり、如何に実効的に「翻訳」できるかが研修自体の正否を担う鍵であるとも考えてきた。

実際には、校内指導教員や教頭、校長の管理職がその内容を熟慮して分かりやすく伝える役割を担っていると考えるが、自身の経験をかんがみても、校務の多忙さが原因となり、十分な研修に至らなかった反省がある。

校長当時も、初任者が研修センター等で受講してきた内容に関する資料を作成し、毎回、研修内容を補足する解説を加えた指導を行ったが、限られた時間でもあり、初任者自身の疑問やわかりにくい内容にどれだけ肉薄できたかについても反省や疑問が残っていた。

定年退職した後に、本学にお世話になる機会を得て、メンター制による初任者研修プログラムを担当することができる現在では、その当時の反省も踏まえ、初任者目線で喫緊の教育課題や身につけておかなければならない内容について、直接、初任者と協議を行い、自身の解説を加える機会に恵まれたが、現状では相応の成果とともに課題も表出していると受け止めている。

2 校内研修を行うに当たって

現在、初任者研修の担当者として週に一度訪問している学校は二校で、初任者は10名になる。

特別支援学校の特長として、小学部から高等部まで幅広い年代の児童生徒を対象とすることや、本県では知的障害部門としたい不自由教育部門を併設している特別支援学校が多いことから、担当する児童生徒の障害も多様となる現状がある。

一方、指導する内容も排尿便指導や摂食指導等の日常生活指導や自立活動の領域に関する内容、また、軽度な児童生徒については教科指導の内容に至るまで幅広い。また、通常の学級とは異なり、授業に用いる教科書も一定ではなく児童生徒の実態に応じて発達段階や個別の教育目標の準拠した内容を指導する必要があるため、臨機応変の対応が期待される。

他方、研修センターが実施する初任者研修に加えて本学独自のプログラムで実施する本制度では、受け入れ側の学校の理解が必須であり、直接、授業を参観することから、当該学級の児童生徒や保護者の理解が不可欠になる。

また、各学校ともに「多忙化」が大きな課題になっていることから、初任者に過度の負担を与えることのないような配慮も必要であり、我々が授業に参画する上で不要な摩擦や軋轢が生じないように、それぞれの学校風土に即した対応が必要になる。

また、研修センターで受講する内容との重複を避けることも必要であり、実際の学校や学級で起こるであろうさまざまな課題や疑問に即した内容を構築する必要があると考えてきた。

3 校内研修の実際について

訪問指導報告書に記載したように、各初任者の授業を参観した後は、当該授業の内容に応じたカンファレンスを実施することができるが、特別支援学校の場合、担当している初任者の人数が多く、訪問同日にすべての初任者の授業に言及することはできない。

カンファの題材として、初任者自身が実施に授業を行った内容についてさまざまな見地から指導やアドバイスをを行うが、初任者にしてみれば、研究授業以外に実際に当該授業を見聞することができない状況にあり、また、それぞれ担当する学部、学年や障害種別、児童生徒の実態や教育目標が異なることもあって自身の課題として受け入れることが難しい状況にも配慮する必要がある。

解消策として、授業風景を録画する手法があるが、特別支援学校にあっては児童生徒に障害があることから、人権上の配慮として授業風景の録画・録音も制約が生じる。

学校の配慮で、校内研修の一環として初任者の授業風景を学校備品で録画し、カンファで使用した経緯もあるが、録画する他の教員の負担も考えると、毎回の実施には至らなかった反省もあり、同時に当該授業に即した各初任者のイメージづくりに配慮が必要になる。

こうした背景をもとに、効果的なカンファレンスを実施する上で、授業以外にも題材を設定し、各初任者が抱いているであろう悩みや疑問、また、保護者や同僚から見て、是非、知っておいて欲しい内容を策定し、合同でカンファを行うことが実効的であると考えた。

(1) 校内カンファを実施して

実際に初任者が行った授業を基に記録を作成し、放課後に指導案とともに当該授業を振り返る中で、評価すべき内容や課題と考える点について全員で考察、共有する手法でカンファレンスを実施したが、一方では、新規採用教員としての心構えや障害特性の理解、さまざまな指導における工夫や考察、いじめ等の喫緊の教育課題に関する内容や、学校組織の一因として理解しておくべき実務的な内容について資料を作成し、授業とは別の内容についてもカンファを行った。

カンファを実施する中で、各初任者は、改めて担任する児童生徒の状況を思い浮かべながら障害理解や指導の具体について理解するよい機会と捉えてくれたようだが、特に「起案について」や「保護者との対応」といった初任者が直面する内容についてよい反応があったと考えている。

一方で、講話的な内容については、特に大学卒業後、すぐに教職に就いた初任者からは、「大学の講義の延長の感が免れない」との反応もあり、当職としても反省を行う必要がある。

各初任者に知っておいて欲しい内容と選択し、一般的な観点からそれぞれの内容を考察したつもりだが、障害に特化した内容では、こちらが考える「知っておいて欲しい内容」と初任者が実際に担任している児童生徒をとおして解釈することから、「理解した内容」に差が生じている可能性が考えられる。

また、カンファの持ち方自体にも、初任者が考える有効なカンファとして、全員が題材に応じて協議を行うことが重要と考えていることや、前述したように、実際に自分が担任している児童生徒に即した課題として捉えたいという思いがあり、次年度以

降は、できる限りこうした初任者の思いを加味し、協議の場を設定するほか、担当する児童生徒の実態に応じた内容として改変を加えたいと考えている。

より初任者のニーズに即した内容策定を期して、年度当初にカンファを希望する内容を聴取したが、その時点で明確な課題に直面する場面が少ないことや、意識する課題が思い浮かばない現状にも配慮する必要がある。

一定期間を経た現状では各初任者自身もそれぞれのニーズや希望内容が明確になっていると考えるが、資料作成の時間等も考慮した結果、実現には至っていない。

次年度に、同様の形態で実施することを想定すれば、夏季休業前といった一定の時期を経てニーズの精査を行う必要があると考えている。

因みにカンファ用の題材として作成した資料については、後段にまとめて実施した時期やその概要等を参考として記載する。

4 校内研修の成果と課題について

学校を訪問する曜日については各学校の判断に委ね、校内の事情に最も合致した日程を設定してもらったが、各校とも多様な校務を有する背景があり、校務分掌会議や学年会、学部会といった定例的な校内会議や保護者懇談会、校内研修指定日といった事情もあり、毎回、放課後のカンファレンスを実施することができない実情もある。

上記の資料を配付するだけで実質的な解説を加えなかった状況もあるが、初任者に対する資料が学部主事や校内指導員にも配付されるような状況も生まれ、こちらの思いが初任者を取り巻くさまざまな関係者にも伝わるといった環境が生じてきた。

学校によっては、こうした資料を教員全体の研修に活用できないかとして、年度初めに研修日を設定して教職の必須内容として現職教育を実施できないかとの模索や、初任者以外にも講師をはじめ若手教員に対する「校内塾」を設定し、配付した資料を有効活用する検討も行いたいとの考えも聞く。

そもそも、「メンター」とは、今後、当該校を背負って行くであろう優秀な中堅教員だが、こうした教員はその優秀さ故に初任者研修以外にも校務の重責を担っている現状があり、主体となって初任者育成にまで力量が及んでいない現状がある。しかしながら、当職が実施する校内カンファに参加する機会が設定されることで、中堅教員と協議する機会やともに活動する場面が増えていく可能性が考えられる。

学校によっては、こうした中堅教員が実施する校内自主研修の場が設定され、初任者とともに参加する中で、一つの課題に関するさまざまなディスカッションの機会が生じ、初任者も中堅教員もともにその課題について考察する場面が生まれてきている。

大学教員が校内研修の呼び水になることで、学校全体に研修の重要性に関する共通理解が生まれ、多忙化の現状にあっても自主研修等の機運が高まることができれば、今以上に初任者の学びの機会が増すことが予想され、校内研修の活性化による学校改革の可能性が生じる可能性がある。

前述したように、カンファレンスの実施自体にはさまざまな制約が生じるとも考えられるが、各校の実情に合わせ、共通理解を持って校内研修の意義や重要性を展開していきたいと考えている。また、そこに、我々のように参画する大学教員の役割も明確になると期待している。

【参考資料…初任者研修校内カンファレンス資料概要】

(1) 年度当初に伝えた内容として…

初めて教壇に立つ初任者に対して、こちらの期待や激励を込めて伝えた内容。

一方、携帯電話等の普及で便利になった昨今、児童生徒や保護者との連絡にも情報メディアを用いる場合が考えられるが、その際に留意すべきルールやマナー、又普段の生活で意識していない危惧すべき内容についても、この時期に指導した。

① … 初任の先生方に期待すること

特殊教育と呼ばれた頃から先人たちが大切に引き継いできた思いや障害児に対する指導において感性が重要視される背景等をまとめた内容。

こちらが40年近く重ねてきた経験やその折々に見聞した知見、俚諺等を織り込んでおり、カンファ的实际では、訪問当初に講話を行い、教員生活に期待を膨らませるねらいと同時に不安を解消したいという思いを付加している。

② … 若い先生方へ ー得意なところ、苦手なところー

初めて教壇に立つ先生方に対し、当職の経験から、一般的に若い教員の得意な分野や苦手な分野に係る考察を記した内容。また、日常の学級運営や授業に臨む心構えとして留意すべき内容を記したものの。

③ … 「スマートフォンやネットに潜む危険」

現代社会において円滑なコミュニケーションを図る上で、携帯電話やメール、SNSはなくてはならない有効なツールだが、一方では情報流出や悪質サイトに代表される危険な状況も潜んでいる。教壇に立つ上で認識すべき内容について記したものの。各特別支援学校高等部において、一人一台の情報メディアが配給される現状にあって、情報メディアの扱いが堪能な若い先生方にこそ是非知っておいて欲しい内容としてまとめた内容。今後、ますます重要視される情報教育の立場からも、生徒に指導すべき内容も含めている。

(2) 一学期を通じて伝えた内容として…

(県)教育研修センターで実施する初任者研修の内容にリンクし、公務員と民間の雇用の違いや公務員としての職責の重要性、また、実際の授業を行う上で必須の内容等に関してまとめた内容を伝えた。

④ … 綱紀の粛清と服務規律の遵守について

教育公務員としての職責や遵守すべき服務等について法的根拠を交えて解説した内容。初めて教育公務員として奉職した状況にあっては、法律によって守られている立場と教員だからこそ遵守すべき内容を熟慮することで、教職自体の責任や県民が教員を見る観点を知ることができる必須の内容と位置づけた。

⑤ … 県内における特別支援教育の現状と課題 ー幼稚園では今ー

初めて特別支援学校の小学部に入学者の児童の実態把握の参考として、通常の幼稚園でも見られる現況や在籍する幼児の様子を記した内容。

特別支援学校にあっては、計12年間を通じて一貫した指導を行うが、6年間を占める小学部の役割、存在は考えている以上に大きい。現在は中学部や高等部に配属されていてもいずれ小学部に属した場合の基礎知識として重要と史料して作成した。

⑥ … 特別支援学校の基本「自立活動について」

障害の克服や改善を教育目標とする特別支援教育において、通常の教育にはない特有の領域である「自立活動」の6区分33項目のそれぞれについて概要を説明した内容。障害が重篤な児童生徒の場合、この自立活動だけで教育目標や指導内容の策定が可能であり、言わば特別支援教育の「中核」ともいえる内容として初任者段階で必須の項目だと考えている。

⑦ … 教育をめぐる専門用語はむずかしい?!

教育課程やヒドゥンカリキュラムと訳される学校風土をはじめ、教員として必須の知識である教育関係の文言について、分かりやすく解説した内容。

具体的には「教育課程」をどのように把握して他の人に説明するかには始まり、個別の指導計画や個別の教育支援計画の違い、合理的配慮とはどういった内容か等について言及した資料

(3) 一学期後半から末に伝えた内容として…

一学期を経過する中で、現段階で悩んでいる課題や初任者自身の聞きたい内容を聴取し、まとめた内容。特に対象とする児童生徒の障害特性や問題行動、いじめ等、喫緊の教育課題について、是非、初任の段階で知っておいて欲しい内容を伝えた。

⑧ … 成長の見方について

障害のある児童生徒の成長は、健常児の生育や発達と異なる場合が多く、その概要や指導上の留意点について考察した内容。自身の経験からも、実際に父親や母親になってわかる保護者の悩みや思いもあり、その内容にも触れることによって円滑な保護者との関係構築を行う基軸になればということを期待して作成した資料。

⑨ … 問題行動の捉え方について

特別支援学校に在籍する障害児特有の問題行動について、教師が把握すべき内容を解説したもの。また、通常学級に在籍する発達障害児のこだわりや独特の行動、特有の感覚等についても関連して考察した内容。

特殊教育から特別支援教育へと変遷した背景や各特別支援学校が「地域における特別支援教育センター」としての役割を果たす上でも大切な内容と考えている。

⑩ … 上記関連補足資料「問題行動に関する協議会講話等」

近畿の各校長が参集し、関連機関である補導センターや警察、生徒指導担当者による実践をまとめた内容。

⑪ … **上記関連補足資料「いじめ問題に関する講話」**

学校教育において最も深刻また大きな課題である「いじめ問題」について、その定義や派生する原因、また、背景等を解説した内容。

どの学校でも起こりうる課題として、教壇に立つ者として必ず知っておくべき内容であるとともに、人権に対する配慮が不可欠な特別支援学校にあっては、在籍児童生徒の多くが学校内外で直面している可能性がある問題でもある。

関連して、「当事者意識の重要性」を改めて認識する内容も包含した。

⑫ … **障害のある子どもへの指導に関するコラム**

障害が起因する「学びにくさ」や高等学校に在籍する発達障害生徒を題材に日常の指導で留意する点や障害理解の重要性、表出する行動から類推する生徒の思い等に係る考察をまとめた内容。

発達障害特有のこだわりや肯定的フィードバックの重要性、障害生徒自身がどのように自身の障害を意識しているか等について言及した内容となっている。

⑬ … **自閉症の理解について、アスペルガー症候群の理解について**

特別支援学校に在籍する自閉症児並びにアスペルガー症候群を代表とする発達障害児童生徒の特性や行動について解説した内容。

自閉症児が方言を話さないといわれる理由や参考関係が構築しにくい背景、また、実際に自閉症と診断された人たちが自信の障害をどのように受け止め、周囲にどの点を理解して欲しいかについても触れた内容になっている。

⑭ … **ダウン症の理解について**

各初任者が担任するクラスや学習集団には数名のダウン症児が在籍する。特有の人なつこさや性格の堅さ、また、配慮すべき疾患や生まれ持った合併症のいくつかを解説し、さまざまな学習活動に活用するための基礎知識としてまとめた内容となっている。

(4) 二学期を迎える中で伝えた内容として…

夏季休業を経て、最も充実した指導を行うことができる二学期に向け、日常生活の具体例や教科指導等において障害固有の学びにくさ等について考察した内容。

一方、教員となって一定期間が経過した段階で、公務員を巡るさまざまな考えや近隣に住む住民との良好な関係構築に資する内容も盛り込んだ。

⑮ … **障害のある子どもへの排尿便指導**

障害児の身辺自立を促す上で基本的な排尿便指導について、その内容や指導方法等についてまとめた内容。特別支援教育を行う上で「食べることと出すこと」

の重要性が言及されることが多く、特に小学部低学年の保護者が多く感じている代表的な悩みでもあり、所属学部を問わず、認識しておくべき内容と考えている。

⑯ … **学校をめぐる裁判事例 —教育裁判の動向や訴訟の現実—**

公的な教育機関である学校といえども、地域住民から訴訟の対象となる事例もある。学校に設置している空調機器の騒音が、設置後に転居した住民から訴えられたといった事例を交えながら問題を解説するとともに、サイレントマジョリティと呼ばれる学校周辺の住民の関係構築についても考察した内容。

⑰ … **肢体不自由児に対する摂食指導について**

特別支援学校における「生きる力」について、「まず生きる」上で必要な摂食に焦点を当て、食べるという行為のメカニズムや誤嚥の危険性、より良く食べるためのカテーリーの工夫、食材を乗せる机に対する配慮やポジショニングの重要性についても記載した内容。

⑱ … **学校におけるアレルギー疾患への対応について**

食育の重要性に触れながら、安全・安心な食を提供する意義やアナフィラキシーの原因の解説並びにその対処法等について考察した内容。

現実的には、県内で重篤なアナフィラキシーを有する児童生徒は少ないが、特別支援学校で実施される給食を円滑に実施する上でも必須の内容と考えている。

一方、万一の場合にエピペンの接種に逡巡する自体も想定し、専門家の判断や法的な根拠も合わせて解説している。

(5) 二学期の中盤から後半に向けて伝えた内容として…

夏季休業を経て、最も充実した指導を行うことができる二学期に向け、日常生活の具体例や特別支援学校に在籍する児童生徒の代表的な障害の概要や留意すべき内容についてまとめた。また、学校組織の一員としてさまざまな校務を担当することから実務的な内容についても触れた。

一方、教員となって一定期間が経過した段階で、公務員を巡るさまざまな考えや近隣に住む住民との良好な関係構築に資する内容も盛り込んだ。

⑲ … **心を育てる道徳教育について**

教育の基本である知育・徳育・体育の三育の内、特に徳育の指導領域である道徳について、指導内容や指導の観点を考察した内容。

道徳については、高等学校においても教科化が検討されている内容でも、実際に近隣の小学校や中学校と交流を行う場面を想定する際にも、特別支援学校の担当者として知っておくべき内容と考えている。

⑳ … **交流教育について**

学習指導要領に明記された交流教育について、その意義や具体的な考え方等の指導全般を考察した内容。ノーマライゼーションの考え方が広まり、地域の

小・中学校にも障害のある児童生徒が在籍する状況となっている。特別支援学校の交流教育に対する考え方をまとめた内容とともに、我々の実践が小・中学校の教員に対するヒントとなるべき点についても触れている。

⑳ … 起案とは…？

教員にとって自身の思いや教育の理念、学校行事等の具体化に必須な起案に関し、具体的な記載の仕方やその根拠についてまとめた内容。

障害に関する内容ではなく、実務的な内容で今までのカンファとは異なる分野だが、各初任者からは、学校という組織の一員として認識しておく基軸の内容として初めて知った内容との反応が寄せられた。

㉑ … 発達障害児の集団活動について

集団行動や対人関係の構築が苦手な発達障害児について、その原因や対処法等を考察した内容。

障害児が抱くさまざまな思いや特有の行動の背景を理解する上で「当事者意識」が重要との示唆を行い、どのように困り間を理解するかについて考察した内容。

㉒ … 知的障害児の指導に関して

抽象的な思考が得意でない障害児にとって、くり下がりの引き算を例に、一般的に小学校で実践されている指導の方法以外にも、障害特性によってより分かりやすい指導方法がある点を解説する他、読み書きや計算の単元で有意と考えられる教育アプリ等を紹介した内容。

㉓ … 知的障害児童生徒に対する性教育に関して

文字どおり、「心を生かす教育」や「生きる教育」の原点ともいえる内容でもある反面、各指導の内、最もプライベートな領域に属し、「寝た子を起こすな」といった考えがある現状では、最も指導が難しい単元の一つである「性教育」について焦点を当てた内容。文献をもとに各府県の学校の様子や教員、保護者の思い等を考察した内容、併せて実際の指導を行う際の教員の姿勢や考え方についても記載した内容。

㉔ … 保護者との対応について

ベテラン教員といえども保護者との円滑な関係構築や苦情への対応等について苦慮している現状がある中で、学校や教員に対して保護者が発するクレームの内容やその背景等について、留意すべき点や未然に防止する観点を事例も交えながら考察した内容。自分自身がクレームを発する側を想定してどのような場面でクレームを発するかについても言及し、クレーム側の思いも理解できるように工夫した。一方では、望ましい保護者との関係構築が担当する児童生徒の成長に大きく寄与する点にも触れ、担任として大切な内容と考えている。

②⑥ … 著作権法について

学校の授業で用いる教材について、教育を目的としながらも遵守すべき法律があり、安易なコピーや引用を自制する必要について解説したもの。

特に特別支援学校で多用する絵本の読み聞かせにおいては、児童生徒の理解向上を期する上とはいえ、法律に抵触する可能性を有した操作もあり、初任者段階で配慮すべき内容を含んでいると考えている。

②⑦ … 特別支援学校における進路指導の重要性

高等部卒業後の進路先について、職業観の育成や働く意義、意欲の醸成が重要な点について考察した内容。12年間を見通した特別支援学校の教育を考察する上で高等部だけでは進路指導が困難な点にも言及し、小学部や中学部の日常生活指導から卒業後の進路指導に生かせる内容があると考えている。

(6) 二学期後半から三学期に向けて伝えた内容として…

それぞれが授業に慣れ、教材の準備や工夫、また、児童生徒との良好な関係も構築しつつある段階で、一年間のカンファレンスのまとめとして、本県特別支援教育の歴史やこれからの各初任者の成長を期待する思いを込め、実施した内容となっている。

②⑧ … 障害児童生徒を対象とした情報メディアの活用について

近年、情報教育の重要性が謳われるとともに、文部科学省の施策として特別支援学校高等部生徒に情報メディアが配給される制度と相まって、障害児童生徒に対する情報教育の重要性がクローズアップされている。便利な道具ではあるが、反面、個人情報の流出や悪質な業者等による詐欺事件等も報道されている。学校教育における有効な機器の扱いに関して、選定の参考また有効なアプリ等の紹介や先進校の実践例を交えて紹介した内容。

②⑨ … 喋り方や文章を書くことの向上に関して

教師という職業をかんがみる際に、如何に子どもたちに対してわかりやすく話すか、又、文章をわかりやすく書くかが大切な素養と考えられることから、生徒にわかりやすく伝えるヒントやより良い文章化のコツについて考察した内容。

一方で、今後の各初任者の成長に関して、こちらが期待する「人材」や成長の過程で大切にしたい内容についても触れている。

③⑩ … 本県特別支援教育の歴史について

和歌山県の特別支援教育について、明治時代から現代に至る制度の変遷や盲学校、ろう学校並びに各養護学校設立の経緯等を記載した内容。

本県の特別支援学校に勤務する者にとっては、温故知新として是非、知っておいて欲しい内容として記載した内容。

⑳ … ユニバーサルデザインとバリアフリーの違いについて

世間においては、インクルーシブ教育やバリアフリーの考え方が浸透しつつあるが、その差を明確に答えられる教員は多くない。特別支援学校に勤務する教員としてその違いを明確にする必要がある一方で、日常の指導においてもノーマライゼーションの考え方を根底に持つことで障害からくる「学びにくさ」の解消に寄与できると考えて考察した内容。

IV 学びのふりかえり

私の学び～メンター制を通して～

和歌山市立有功東小学校

林 真希

初任者としてのこの一年間は、大変学びの多い貴重な一年でありました。

私はこれまで十数年間、講師として勤務してきましたが、定期的に自分の学級指導や教科指導等に携わって指導していただく機会はなかったもので、周りの先生方の見様見まねで自分のやり方が適切なかが分からないまま、こなしてきたように思います。しかし、今年は初心に戻り、基本姿勢から教科指導まで具体的に指導していただくことができ、改めて立ち止まって考える部分がたくさんありました。本年度は一年生担任ということで、発達段階に合わせて視覚で理解できるような板書の仕方やどの子もわかるような発問の仕方、切り返し方が大切だということに気づきました。

本学級の子どもたちは、明るく素直でどの学習にも意欲的に取り組もうとする子が多いのですが、教師からの指示を理解するのに時間がかかる子や個別指導を要する子も少なくありません。よって、どの子も意欲的に取り組めたり、分かるような学習展開が大切だと感じました。そのために教師の発問、板書、ワークシート、ペア活動を取り入れていく…などの工夫を凝らしていくことにしました。実際に自分が考えた学習展開で授業を行ってみると、時間配分が甘かったり、子どもたちにとって分かりづらい指示の出し方をしていたりと反省する点がたくさんありました。ナンバリングして板書しておくことや教師が例文を出してみることでより良く指示が理解しやすいということ、また、一時間の中で押さなければいけないこと（山場をどこにつくるか）を教材研究する上でじっくり考えていく必要があることも改めて分かりました。

話し合い・学び合いの場では、自分の考えや思いを表現できる子になってほしいという思いから、まずは4月から朝の会や各教科で「ペア・グループ学び」をできるだけ多く取り入れ、自分の考えを交流できるようにしてきました。そうすることで、課題と真剣に向き合い、「一人学び」に集中して取り組めるようになってきており、最初は全体の中では意見を言いにくい子も、ペアや小グループの中ではまわりを気にせずに意見を言うことができつつあります。発表する時点では、全員がグループの意見を理解していることを前提とするため、分からない子が分かるまで話し合うように指導したり、説明の順序を教えたりするので、自信をもってみんなの前で発表できるようになってきました。

本校では生活科・総合的な学習の研究を行っており、研究授業では、子どもの思いや願いから出発する生活科に取り組んでいる過程を観ていただきました。子ども一人ひとりの興味・関心や思いを教師が見とり、それぞれが育てたい力をつけるためにどんな手立てをしていけばよいのか、また個の対話を通してどんな支援をしていけばよいのかなど、担任として子どもたちの思いを引き出していくことの大切さを教えていただきました。

また、授業づくりだけでなく、特別支援の児童について学級・学校として取り組んでいくべきことを教えていただいたことも私にとっては貴重な学びでありました。

このように、たくさんの先生の目で参観いただき、ご指導いただいたことを活かしながら、今後も一人ひとりが生き生きと主体的に学習に取り組める授業づくりやよりよい学級づくりを目指していきたいと思っております。

視野を広げ、学び続ける教員をめざして

紀の川市立打田中学校
杖村 綾乃

1 はじめに

大学時代、フィリピンに行き、マザー・テレサの施設や街並みから離れた山中で過ごす子どもたちに英語を教えたことがあります。英語の歌を歌ってダンスをしたり、英単語を覚えさせたりしているうちに、教育の魅力や大切さに思い至り、教師を志すようになりました。講師を経て、今は教諭として1年生の担任と英語科を担当しています。

2 省察力

授業カンファレンスの中に、日々の授業を振り返る時間が設けられています。自分の課題に向き合い、どうしていくべきか話し合っていると、想像以上に心が重たくなり、肩を落とすこともあります。指摘された課題は「詰め込み過ぎ」「忙しない授業」「指示の仕方が不明確」「山場がない」「宿題を忘れる子どもへの指導」「挙手をする生徒が偏る」「考えさせる時間の不足」「授業規律」「スローラーナーへの手立て」等たくさんありました。満足できる授業など一度としてなく、どうすれば自分の目指す授業ができるのか、迷い悩むばかりでした。自分に自信が持てず、落ち込むたびに適切な助言を得て、心を奮い立たせてきました。感謝しています。勇気やパワーをたくさんもらいました。

まだまだ課題はありますが、少しずつ客観的に自分を顧みることができるようになりました。自分の授業の型が確立されつつあり、毎日、授業を考えること、授業をすること、振り返ることを楽しめる自分になりました。より一層省察力をつけ、新しい挑戦を恐れないために、各地の研修会やセミナーへ行くことも楽しんでます。

3 成長していく子どもたち

今年度が終わろうとする今、春からずっと子どもたちを見てきて、様々な面で子どもたちの成長を感じています。口々に好き勝手喋っていた子が手を挙げて発表するようになったり、ノートに自分で工夫してメモできる子が増えたり、ペア活動に参加しなかった子が積極的に協力できるようになったり、分からないところをきちんと質問できる子が増えたりしています。本当は親が見たいであろうその逞しい姿を私が間近で見られるのだと思うと、嬉しい限りです。素敵な仕事をさせてもらっていると思います。

子どもたちのその成長速度は素晴らしく、負けてられないなと日々励まされます。

4 おわりに

先日ふと、私が教えている生徒 130 人それぞれが、海外のどこかに一人の友人を作ったとしたら……と、ふと考えました。今はインターネットもあるので十分可能な話だと思います。そうすれば、世界のどこかでテロや事件や紛争が起こった時、それは「どこか」ではなく、「友人宅の近所」になるかもしれません。そういった眼で世の中を見るようになれば、その眼は世界を他人事ではなく自分に関わることとして見るようになるのではないかと考えました。そんなことを子どもに語ったりもしました。

視野を広げることを、学び続けることを、ためらわずにいたいと強く思えるようになったのは、初任研やメンター制度を通し、自分自身を見つめる機会を多く与えていただいたからだだと思います。今の私がもう一度フィリピンに行けば、大学時代とはまた違った様々な教え方ができるのではないのでしょうか。

メンター制と授業力向上

紀の川市立打田中学校
橋本 正平

1 私自身の悩み ～授業について～

2016年の参議院議員選挙から選挙権が20歳から18歳に引き下げられることが決まったことをきっかけに、社会科の教員として、目の前の生徒にどのような力を身に付けさせるべきなのかを考えました。

今、生徒に求められている力は、「自ら学び、考える力」ではないかと思い、思考力・判断力を育成する授業をしたいと考え、自分なりにいろいろな方法を授業で取り組んでみました。しかし、目指す授業がなかなかできずに悩みました。また、知識ばかりを問うテストと目指すべき授業のギャップが私自身の悩みとなりました。

2 鈴木先生の指導

まず、鈴木先生に勧められたのは、授業の幅を広げるためには多くの本を読むことでした。生徒の学ぶ姿勢を育てるのであれば、自ら学ぶことを止めてはいけなと感じました。

また、鈴木先生の示範授業を通して、授業の流れや生徒の様子を客観的に見ることができたことも、授業力の向上に繋がったと感じています。

毎週火曜日の研究協議では、鈴木先生の専門が社会科なので、「課題は適切だったか?」「生徒の思考をさらに深めるためにはどうすればいいか?」等、深い話し合いができました。私にとってとても有意義でした。鈴木先生の指導を通して、生徒の活動、教師の働き掛けに意味を持たせ、常に「何のためか」という目的を持った授業を展開することが大切であると感じました。

3 成果

授業の展開や課題について共有できたことや、自分の授業を客観的に考える機会が多かったことで、自分自身の成長に繋がったと思います。また、何よりも一年間高い意識で初任者研修に取り組めたことが大きな成果になっています。

4 課題

今年一年で見つかった課題も多く、今後さらなる成長のために、初任の一年に限らず来年度以降も引き続き指導していただく機会があればありがたいです。

しかし一方で、初任者に限って言えば、県教育委員会の初任研と同時並行的に行われることで私の負担が増えたことも事実です。私の場合、毎週火曜日がメンター制、金曜日が拠点校指導教員の指導と、週に二度の授業研究がありました。私自身には約3年の講師経験もあり、打田中学校でも講師として勤務した経験があったため、先輩や同僚に助けられながら一年を乗り切ることができましたが、現場経験の少ない初任者にとって週二度の授業研究は、心の余裕を奪い、相当なプレッシャーになるのではないかと心配します。

メンター制が授業力や教師力の向上の助けになることは事実ですが、研修の上乗せになり、初任者の負担が増えることも事実ですので、その点が来年度以降改善されることを願っています。

メンター制の初任者研修における成果と課題

紀の川市立貴志川中学校
楠 千尋

1 成果について

毎週月曜日、授業を参観していただき、その後、協議（授業カンファレンス）を重ねることで、4月当初を思うと成果を感じるころがあった。

一つは、教師の独りよがりな授業ではなく、生徒の反応を見ながら授業を進められるようになったことである。協議では必ず、「この授業でどれぐらいの生徒が『めあて』を達成しただろうか？」と問われ、話し合うので、生徒の表情や発言に注意し、常に到達度を頭に置きながら授業をした。

二つ目は、生徒にとって発言しやすい環境づくりと、小さなことでも褒めることを心掛けたことである。それぞれの学級には支援が必要な生徒が多く、私一人では対応しきれないこともあったが、その生徒が前向きに授業に参加できるよう、前時よりも頑張っているならば褒め、できるだけ全体の場で活躍する場面をつくった。「間違ってもいいからどんどん発表しよう」と声掛けをすることで、次第に顔が上がり、積極的に課題に取り組むようになった。

最後に、発問・指示を明確にできるようになったことである。当初は自分に自信がないあまり、ぼんやりとした口調で曖昧な指示を出していた。そのため、生徒に「今、何をするのか」が伝わらなかった。不必要な言葉を削ぎ落とし、シンプルな指示を事前に考えておくことで、はきはきとした口調で話せるようになった。

2 課題について

協議の時、よく言われたことに、「一続きの授業ではなく、ぶつ切りの授業になっている」というものがある。それを何とか改善しようとしたが、なかなかできないし、未だにできていないと感じる。基本ではあるが、「何を教えるのか」を明確にして、そこから発問・活動を考え、授業を組み立てられていないからではないだろうか。来年度に向けての大きな課題である。また、如何に魅力ある導入を工夫するかも課題である。導入部の大切さは理解しているが、生徒の心を掴む導入を考えることは難しい。発問を繋いでいくことも大事であると考えるが、今は単発的な発問が多いと感じる。もっと幅広いところから教材を探し、単元の見通しを立てて、授業を作っていく必要がある。

一年を通して、「めあて・振り返りシート」を利用したが、振り返りの時間を確保できず、各自シートに書いておくように指示して終わることがほとんどであった。振り返りの欄に書く内容も特に指示できなかった。生徒同士で学んだ内容を共有し合う振り返りを目指し、来年度もこのシートを利用するのか、利用するならどう活用していくのかを考えなければならない。

グループ活動を取り入れるたび、この課題でグループになるのは適切だったか、すべてのグループが活動できていたのかを協議した。まずは授業でやってみないと分からないからと積極的に挑戦したが、考えを深める活動はできなかった。生徒の意欲を引き出す課題設定やルール of 徹底の不十分さに問題があったと考える。アクティブ・ラーニングの捉え方は多様だが、生徒が前向きに取り組める課題を見つけ、生徒同士で深められる活動を取り入れていきたい。

緊張感のある月曜日で、毎週スタートできました。数々のご指導に感謝します。

メンター制における初任者研修報告書

紀の川市立貴志川中学校
丹下 知彦

メンター制における初任者研修に係る、本年度一年間の成果と課題について以下に述べさせていただきます。

1 成果について

成果については二つある。

一つは授業の構成や流れをこれまで以上に意識するようになったことである。

幸いにも、和歌山大学教育学部との連携でのメンター制の担当教員や、和歌山県教育委員会が実施する初任者研修における拠点校指導教員に恵まれ、複数の方から助言をいただいたことにより、自分一人で授業をやっているとは分からない点が多々気付くことができた。たとえば、なかなか理解できない生徒に対する手立てや配慮について教科の垣根を越えて指導していただいたことが挙げられる。このことで授業構成の大切さを知ったのである。

いま一つは、生徒との関わり方について考えさせられたことである。年度当初は生徒とどの程度の距離感で話したり指導したりすればよいか分からないところが多々あった。年齢が近いこともあり、どうしても接する距離が近くなり過ぎているような気がして悩んでいた。教師としての威厳がないのではないかと思っていた。今年一年間生徒と関わる中で、多くの助言を得て、一方的に距離を取るだけではいけないこと、また生徒との距離感が近過ぎてもいけないことを実感した。生徒の思いを自分のカラーとどう関わらせながら接していけばよいか分かってきたような気がする。

2 課題について

課題もまた二つ挙げることができる。

一つは成果のところでも述べた「授業の構成や流れを意識できるようになった」ことについて、これがまだまだ不十分だということである。一時間の授業を行う際、教師はその展開を考えると同時に、生徒が深く考える場面、活動する場面、生徒がつまづく場面などを予め予測する。ところが実際に授業してみると、こちらが予想していたのとはまったく違う状況が現れるのである。ここでつまづくのではないかと予測していたのとは違う場面でつまづくことがよくあるのだ。着任当初と比べると成長していると評価はできるが、まだまだだと感じる部分が多い。今後の実践を通して、また多くの書籍や他の先生方の実践から積極的に学び続けたい。

二つ目は指導方法についてである。指導する際の生徒への指示や課題の提示の仕方など、細かな部分でのスキルが乏しいと感じている。細かな手立てや予想外の答が出た時の対応について、自分自身至らない点が多々あった。この課題を完全に克服することはなかなかできないと思うので、これからも他の先生からしっかりと学び、自分の授業実践に活かすようにしていきたい。

3 おわりに

一年間を通して拠点校指導教員、和歌山大学の客員教授、貴志川中学校の多くの先生方の多角的な指導があったからこそ、初任研や一人の努力だけでは得られなかったものを学ぶことができた。関わってくださった皆さんには本当に感謝しています。

私の学び

岩出市立岩出小学校
児玉 友梨

私は、この1年間で多くの人に関わっていただき、多くのことを学ぶことができた。私は昨年度講師として、家庭科の専科、算数、国語のチームティーチングをしていたが、担任を持つことが初めてであった。そのため、黒板が見にくかったり、発問が子どもたちにとって適切でなかったり、様々な課題があった。そして、一番は、授業を進めることで精一杯で目の前にいる子どもたちのことを全然見ることができず、子どもたちのことを考えられていなかった。一年間、大学の先生と指導教官の先生、その他先輩の先生に教えていただき、まだまだ改善し、日々勉強をしていかななくてはいけないことが多くあるが、多くのことを学び、子どもたちのために自分自身、様々なことを改善することができたように思う。まずは、子どもたちをしっかりと観察することである。始めの頃の授業では、黒板や自分のノートを見る時間が多く、子どもたちと目を合わせたり、子どもの様子を見たりする時間がとても少なかった。そのため、子どもたちが授業をどれくらい理解しているかもわからないまま、授業を進めていた。助言をいただいてからは、意識して子どもたちを見るようにすると、集中できている子やぼーとしている子、理解が難しい子など、子どもたちのことが、少しわかるようになり、支援の必要な子にも、必要な時に支援をできるようになったと考える。

次は、子どもたちの発表についてである。始め、子どもたちが集中していて、簡単な質問なのに、手を挙げる児童がとても少ないことがよくあった。そこで、原因が発問が的確でないことと、子どもたちが間違ふことを嫌がっているという2つのことがあるのではないかと教わった。振り返ってみると、一つ目の発問をした後、子どもたちには伝わっていないと感じ、別の言葉に変えて、何度も何度も同じ発問をしていることがあった。また、自分の中で、言葉が整理できておらず、「一つ分」と言ったり、「一個」「1リットル」と言ったり何度も言葉を変えてしまっていたところがあった。そのあたりを意識して授業をするようになると、手を挙げる児童が増えてきたように思う。また、以前は、授業が長引いたり、書くことが、多かたりすると、子どもたちから、「えー」という言葉が出ていたり、間違った児童に「違うでー」と言っていたのが、私自身が意識して、指導することにより、「えー」という言葉が減り、代わりに「いいよー。」と言える児童が増えた。間違った児童に対しても、「私はここがこうだと思う」と違うところを伝えられるようになったところが、クラスの成長したところであると考え。また、子どもたち同士で、しっかり聴くことができるようになり、わからない時に質問ができるようになったように思う。まだまだ、私がしゃべることが多いが、子どもの考えで、子どもたちが話し、先生があまり話すことがなく、授業を進められるようにこれからしていきたい。

最後に、子どもたちのことを違った角度から見ていただき、私自身が気付かなかった子どもたちの成長や、子どもたちの頑張り、思いをたくさん教えてもらった。自分勝手な行動に見えても、そこには、子どもたちの思いがあつての行動であると考えられるようになったと思う。悪いことと決めつけて、一方的に叱ってしまうこともあったが、子どもたちにどのような思いがあつたのか、どのような背景があるのか少しずつ考えられるようになったと思う。そして、この一年間で、毎週毎週、丁寧に教えてもらえたことで、自分自身と子どもたちを成長させてもらったこと、本当に嬉しく思う。

私自身のために真摯に向き合ってくれた先生方のように、私も子どもたちの成長を思い、子どもたちの気持ちに寄り添いながら、過ごしていくことのできる先生になりたいと思った。

1年間の学び

岩出市立岩出小学校
山本 舞

校内研修支援プログラムを受けて

子どもの学びや成長は、手に取るように分かる。毎日と一緒に過ごす中で子どもたちは、心身ともに「成長」し、新しい知識を吸収しては見る見るうちにたくましく育っていく。しかしながら、私は「教師として成長している」のだろうか。そんな自身の成長を実感することや振り返りの機会ができたのは、支援プログラムを受けてきたからだと思う。はじめのうちは、記録している授業を自分で見ることに対して、正直恥ずかしいという気持ちがあった。見ていると、その時の子どもの様子に加えて、自分の口癖や動きのパターンが分かってくる。冷静になって授業の振り返りができるようになり、回数を重ねるごとに自己の課題が見えてきた。私の場合は、「1時間の授業構成」と「的確な発問の提示」が課題になった。1時間の授業の中身を考えているが、内容が多すぎて時間通りにいかない時もあった。子どもの考えを見通せていないことが多かったからだ。カンファレンスでの助言で頂いたのは、授業が進む中で子どもから出てくる考えや発言を事前に予想しておくことの重要性だ。「小学3年生の頭になりきる」ことができていなかった。今は、「こんな考えが出るかもしれない。」「ここでつまずく子がいると思う。」というようにクラスの子たちをイメージしながら指導案を考えるようになった。まだまだその予想通りにいくことも多くはないが、丁寧な指導につながるよう今後も心掛けていきたい。また、発問を練り上げる難しさにもぶつかった。自分の頭ではこの言葉で伝わるだろうということも、子どもにとっては理解しにくい場合だってある。記録した授業を後で見返したときに、子どもたちの頭に？が浮かび、慌てて補助発問をする自分の姿を何度も見た。曖昧な発問であると、何を聞かれていて、何を答えていいのか分かりづらい。改めて、教師の発する言葉の重みに気づくことができた。発問一つで授業の流れが変わってしまう怖さもあるが、言葉一つで子どもが授業にのって来る面白さを感じたこともあった。言葉だけでなく、様々な教具の活用で授業に対する子どもの興味関心がぐっと上がることも教えていただいた。記録された授業を見ていて、子どもの反応が顔の動きや手を打つ仕草から見て取れた。後からその様子を知った時は、大変嬉しかったし、いつまでも子どもを引き付けるような授業を追い求めていきたいと思った。

指導して頂くことには、課題も多くあったが、成長した部分を認めてもらえることもあり、私の自己肯定感の向上にもつながっている。例えば、「落ち着いた口調」や「授業の流し方」など、自分では気が付かないような成長点にもご助言いただいたことは、今でも忘れない。

この1年間のプログラムで、授業に関する支援・指導の他にも、生徒指導や学級指導のアドバイスをいただくことができた。これは初任者の私にとって大きなプラスの力になり、今後の教師人生のスタートとして自信にもなっている。そして、成長する喜びを思い出させてもらう貴重な経験となった。子どもたちに学ぶことの面白さや楽しさを伝える立場にいる私たち教師こそ、身をもって学び続けていかなければならないと思う。私は、「学び続ける教師」であるために「成長をやめない教師」でもあり続けたい。

「メンター制による校内研修支援プログラム～1年間を通して得た成果～」

岩出市立山崎北小学校

上西 啓生

和歌山大学とのメンター制による校内研修支援プログラムを通して、私は教師として大きく成長しました。講師経験もなく大学で学んだ知識や、学校支援ボランティアで体験した内容を経て初めて教壇に立つ私にとって、初任者研修は大きな役割を担いました。拠点校指導員の先生をはじめ、管理職、校内指導員の先生、相担の先生方に加え、大学教員の中家先生といった学校内外の連携により、私は日々教師として「成長」していると感じました。

初めて授業を参観していただいた時、「授業は誰のためにあるのか」という根本的なことを考えさせられました。教師が一方的に話して子どもが聞くという「教師主体」の内容ではなく、「子ども主体」で進めていくことに気付かされました。1時間の授業で、教師が1時間の流れを頭に入れ、今日はこれを子どもたちに学ばせたいという思いを持つことが大切だと感じました。「この発問をすることで子どもたちはこう動くだろう」、「子どもたちの言葉・行動から課題をクリアして練り上げていく」という授業の工夫やスタイルを中家先生のアドバイスのもと、一緒に確立していったことが大きな財産であり、成果だと感じます。毎週、授業後のカンファレンスを行うことで、発問の精選や板書、不用意な言葉の削減、改善できそうな所の修正など、大きなことから細かいことまで綿密に話し合うことで、徐々に授業の質の向上につながりました。授業⇄カンファレンスを繰り返すことにより、授業での課題を次回に克服しつなげていくことが成長へつながったのだと感じます。

更に、教科指導の面だけでなく、児童との関わりについても大きな成果がありました。四月から学級経営が軌道に乗らず、苦しんでいました。児童との信頼関係、人間関係が鮮明でない中、子どもとの会話を意図的に増やすことや共通の話題を見つけること、家庭と学校の様子の違いなどを保護者との連携で共有していく事で解決につながっていきました。このようなクラスの課題について助言をいただき、うまく修正していくことができました。

また、保護者との関わりについても学ぶことができました。上記の保護者との連携を具体的に言うと、1学期、児童が授業に集中できていない中、どのように接してよいかわからない時、保護者との関わり方が必要になってきました。学校と家庭の様子の違いを知るためには、保護者に学校の様子を伝え、家庭と何が違うのか、どんなことに悩んでいるのかを共有することだと感じました。その時に、保護者との信頼関係を築くことが何よりも大切だと感じました。教科指導だけでなく多様な学びを得たこともメンター制の大きな成果だと言えると思います。

子どもができたことについては思いっきり褒め、よくないことについては叱るというメリハリを付けることが身に付いた1年だったと感じています。また自らの授業を、映像をもとに客観的に振り返ることができたこと、成長をきちんと伝えてくれたことで一人前の教師に一步近づけたのではないかと感じています。

「メンター制による校内研修支援プログラム～1年間を通して得た成果～」

岩出市立山崎北小学校

中林 暁美

「口調が早い！もっとゆっくり！」

私の授業の課題はここから始まりました。そんな私を大きく成長させてくれたのは、拠点校指導員の先生をはじめ、大学教員の中家先生、管理職、校内指導員の先生、相担の先生方です。私自身、講師を数年経験させてもらいましたが、授業をする中で「私がする授業は本当に正しいのか？子ども達の力になっているのか？」と常に疑問や不安を感じていました。しかし、初任者として新しいスタートをきったと同時に、メンター制による校内研修支援プログラムが始まり、私は教師として多くのことを学びました。

実際に授業を行った後、拠点校指導員の先生をはじめ、メンター教員の中家先生、管理職、校内指導員の先生、相担の先生方とカンファレンスを行いました。初任者である私の授業をみて、当然先生方は課題がたくさん見えたと思います。しかし、まずは今の私自身がどのように考え、授業づくりを進め、実際に授業をしてみて良かったところ・反省点などを述べさせてくれました。そしてその考えと合わせて課題を導き出し、課題解決につなげてくれました。また、カンファレンスでは、タブレットを活用し、私が課題とする場面を一緒に振り返り、綿密に次回への授業へと繋げてくれました。

授業づくりでは、「教師主導」から「子ども主体」で進めていくことの難しさを感じました。どうしても私が話しすぎてしまう授業を改善するため、先生方の助言を基に、教材研究を丁寧にし、板書計画や発問を考え、授業に臨むことを心がけました。「この発問によって子ども達はどのように動くのか」「どのように話し合うのか」を考えることの大切さを学びました。また、「子ども達のつぶやきを大切に」「つぶやきを出せる雰囲気・学級経営」が「子ども主体の授業」につながることも学びました。

1年間を通して、先生方と共に教材研究ができたことが自分の財産になりました。準備をすればするほど、子ども達からの反応はたくさん返ってきます。「授業準備・教材研究=子どもの表情・子どもの力」であることに気付かされた1年でした。学んだことを生かし、これからは子ども達に身につけさせたい力を明確にし、教材研究・授業づくりをしていきたいと思います。カンファレンスの中での中家先生の言葉である「教師主導の授業だと、子どもの記憶に残らない！」「1つのグループで子ども同士が導いた答えを更に全体で練り合っていく。そういった授業、結果が子ども達の達成感につながり記憶に残る！」をモットーに教師2年目にむけてこれからも取り組んでいきたいと思っています。

一年間の自分の学びと成長

和歌山県立紀北支援学校

貴志 諭里

(1) 教材準備の設定や工夫の向上

校内研修の研究授業として「1～5までの数称と数量の理解」という単元で数学の授業を行いました。対象の生徒は自閉症の生徒で発語がなく、またこだわりが強く、事象をパターンで整理してしまう生徒が多く、数称の概念を理解することがとても困難でした。どういった教材が生徒の実態に合った教材になるのか先輩の先生とかなり話し合いました。一つの教材・教具について何度も工夫していきました。試行錯誤を繰り返しながら、授業を何度もおこなっているうちに、段々と自信を持って授業をおこなえるようになりました。また、生徒に合った教材に段々と近づいていくことができたように思います。教材準備の上で大切なことは、「とにかく試行錯誤を繰り返し、実際に使ってみて何度も改善していく」ことだということに気付きました。

他の授業でスライドを使って授業をすすめる機会がありました。メンターの先生に具体的にどういった使い方が良かったのか教えていただきました。自分では無意識におこなっていた支援を、意図をもって行えるようになりました。

(2) 授業案の作成に係る向上

私の学校では、指導案は毎回作成し、サブで入っていただく先生方に渡しています。しかし、今までは、「自分の授業をすすめるに当たってのフローチャートを書いたもの」という意識で、作成したように思います。しかし、メンターの先生や先輩の先生方に教えていただいた中で、指導案は「自分がその授業で大切にしていること、ここはおさえてほしいと思うところと一緒に授業をする先生に上手に伝えること」であり、また「その指導案を見ただけで授業の全体像がみえる」必要があるということがわかりました。現在は、そういった点を意識しながら指導案を作成しています。

(3) 声や態度をはじめ、授業そのものに係る向上

メンターの先生や先輩の先生から今年一年間、授業についてたくさんのアドバイスをいただきました。そういった中で、一年間たくさんの授業を経験していくうちに「授業における教師の動きは全て意図を持っておこなうもの」だと感じるようになりました。たくさんの先生から「あの時の声かけはなぜ行ったの？」であったり、「なぜこの教材を使ったの？」であったり聞かれることが多々ありました。その時、自分は無意識にその行動をしていることが多かったように思います。授業におけるすべての動きに教育的意図は必要で、また指導案を作る際も、教材を作る際も、常に、「なぜそれを行うのか」といった視点を持ちながら授業を作っていく必要があることをこの一年間で学びました。

一年間の自分の学びと成長

和歌山県立紀北支援学校

小山 裕代

(1) 授業への心構えに関する向上

今年度初任としてはじめて肢体不自由児の学級の担任になりました。まず、知的障害児の学級と違うと感じた点は、教師がいつも元気な姿や態度で接し、児童の気持ちを盛り上げたり、気持ちを代弁したりすることが必要であるということでした。また、自分自身がいつも健康でいるといった体調管理についても意識が高まりました。児童と接する時は気力体力ともに余裕を持った良い状態を保つことが必要であると思っています。

(2) 教材準備の設定や工夫の向上

10月に『みる・きく』の授業で研究授業を行いました。肢体不自由児の授業は、知的障害児の授業以上にサブの先生方と協力して授業を組み立てていかなければならないと感じました。主指導とサブの先生の役割を明確にして指導案に明記するのはもちろん、事前の打ち合わせで個別のねらいの確認を綿密に行うことが大切であると感じました。「楽しかった」「楽しんでいた」だけで終わらない授業のねらいの設定が必要であると感じ、現在ではその授業内での個人のねらいを話し合い、指導案に明記して全員で意識しておくことを大切に取り組んでいます。メンターの先生からのアドバイスを頂き、授業での取り組みにおいて一定の成果を得ることができたと感じています。少しずつ授業に自信が持てるようになりました。これからもより良い授業づくりができるよう、実践的な指導力を高めていきたいと思っています。

(3) 声や態度をはじめ、授業そのものに係る向上

自分が主指導として授業を行う中で、児童の目線からはどのように見えているかという客観的な視点が大切であるということを学びました。昨年度まで講師として特別支援学校で勤務していたものの、知的障害の部門での経験だけであり、今年初めて肢体不自由の部門を担当しました。年度当初は、子どもへの関わり方や授業での言葉かけなどに関して不安に感じることもありました。そんな時、授業をビデオ撮りして自分の動きを客観的に見るというカンファレンスの機会があり、このカンファレンスにより自分の授業での様子を客観的に見る機会となりました。児童に授業内容をより効果的に伝えるために、自分の話し方やからだの動きの癖を見直すきっかけになりました。現在では、より授業内容を児童に分かりやすく伝えるために、教材の工夫などとともに、教師がどのような声のトーン、動きで伝えるのが効果的であるかという視点を大切にするようになりました。

一年間の自分の学びと成長

和歌山県立紀北支援学校

田中 千裕

初任者としての私自身の1年間を振り返ったときに、年度当初は、初めての学校、初めての中学部担任、初めて担当する授業に戸惑ったことをよく覚えている。初めて担当する総合的な学習や社会（課題別学習）などの授業に、どのような単元を設定するべきなのか、どこまでの支援が必要なのかが把握しきれず、生徒の興味や関心から離れてしまったり、実態把握の不足から支援が多すぎたりと、生徒に寄り添った授業ができていないことが多かった。そのようななかで、メンター制による初任者研修プログラムを通して、授業を参観していただいたことにより、課題となる改善点や、今後も力を伸ばしていきたい点などを自分で把握することができた。

特に総合的な学習の授業を参観していただくことが多く、教材の工夫、生徒の思考を深めるための発問の工夫など、自らの授業について振り返る機会をたくさん持つことができた。総合的な学習の授業では、中学部3年間の系統性を意識しながら、1年生では和歌山県についての学習に重点を置いて単元を設定した。単元を設定するにあたって悩むことも多かったが、生徒が興味を持てるようなものでありつつ、体験的に学習ができるような内容を設定し、こちらが期待していた反応やそれ以上の反応を見せてくれる生徒たちに喜びを感じることができた。特に、和歌山の名物、郷土料理として学習した和歌山ラーメンやめはり寿司の調理では、調理という危険も伴う活動のなか、事前学習や教材準備を丁寧に行った上で調理実習に挑んだ。しかし、より本物に近い料理に完成させることや、和歌山の特色を知るといふねらいを達成するためには、限られた授業時間のなかでポイントにすべき点、障害が重度の生徒がより主体的に活動するための手立てなど、自分一人では気付くことができなかった視点で意見をいただくことができ、今後の授業に活かすことができると感じた。

また、美術科での授業研究では、意欲的に題材に関わる力や、手指の巧緻性を高めるための教材として粘土を選定し、紙粘土でのクリスマスツリー作りを行った。本単元では、美術科として上記のねらいを設定して取り組み、それぞれの生徒が粘土という題材に意欲的に関わったり、手指の力を調整したりと、個々のねらいを達成することができたが、手指の操作という点で、総合的な学習での和歌山ラーメン作りとの繋がりに触れていただき、時には教科や教科・領域を合わせた指導を超えて、繋がりを果たせることの重要性にも気づくことができた。

これらのように、初任者研修という設定された機会を通して学んだことや自分の経験として糧となったものを大切にしながら、来年度以降は自ら学んでいく姿勢を忘れずに、子どもたちと関りながら、授業の質をさらに高めていきたい。

一年間の自分の学びと成長

和歌山県立紀北支援学校

辻 拓真

教師になってもうすぐ一年になる。これまで行ってきた「授業」について振り返る。

現在、授業を行う心構えとしては、ねらいを適切に定め、達成することを意識するようにしている。特別支援学校の授業形式は、子どもの実態を見極めて、各教科において題材や単元も全て教師が計画し、考えていく。教師になった当初の授業では、子どもたちが活動することだけを考えていたことがあった。授業を行っていくうちに、何を学んでほしいのか、ねらいを考える重要さに気づき、現在授業を行う心構えとなっている。

また、授業のねらいを達成するために、教材の準備が重要だと学び、意識して取り組んでいる。特に視覚支援に重点を置いて教材作りに臨んでいる。説明をする時は、パワーポイントで作成したスライドをテレビ画面に映して使用している。パワーポイントを使用することで、画像を多く用いて提示することができる。他の多くの先生が使用していたため、私自身も学んで取り入れた。また、ワークシートにおいても同様に考えられる。子どもが書くなどする時はノートよりもワークシートを使用することが多いが、ワークシートでは、画像を取り入れて示すことができる。書く欄も作ることで、どこに何を書くべきかがノートを使うよりもわかりやすい。そのため、課題別学習等においては毎回作成している。

しかし、視覚支援を意識して教材を準備しても、説明が上手に伝わらないことがあった。その反省点として、考えられるのが説明や指示、発問の明確さである。これらが長くなりすぎると、何が大切なのか、何を聞いているのか、どのように動く必要があるのか等伝わりにくい。これまでの授業で、説明等が長くなりすぎていたり、言葉に迷いながら話そうとしていたりしたこともあり、子どもも難しそうな表情をしていた。話す言葉は簡単で端的にすることで伝わるものだと考えられた。現在も説明が長くなりすぎていることがあり、これからも意識していきたい。

また、授業の中で「子どもを見る」ということも必要不可欠だと学んでいる。これは、カンファレンスの中で三反田先生が直接私に言ってくださったことである。授業を進めることばかり意識して、子どもたちがどのように考え、動きをしているのか注意深く見れていないことがあった。これだと、ねらいが達成できているかどうかわからず、評価できない。さらに、授業の最後に子どもたちの行動をフィードバックすることで、子ども自身も自分の動きを振り返り、気づくことができるだろう。「子どもを見る」ということは当たり前のことかもしれないが、カンファレンスにより改めて気づくことができた。現在は、授業の流れを考えわかりやすい教材を作るだけでなく、その上で子どもの反応をよく見て、フィードバックするように意識している。

以上一年を通して、授業をするに当たって、気づき学んだことである。まだまだ授業準備が遅く、述べたこと全てを達成できていないこともあるが、反省、改善を繰り返して、これからも授業づくりに努めていきたい。

一年間の自分の学びと成長

和歌山県立紀北支援学校

中村 知樹

4月より高等部の教員として、生徒との関係性の構築を大切にしつつ、生徒に高等部性を意識できるような指導を心掛けてきた。新年度になり緊張度の高い生徒たちに安心感を得られるような関わりを考え、受容的共感的な態度を「心構え」として取り組もうと決めてきた。生徒に寄り添いつつも譲らないことを意識し、意図した言葉がけや対応に努力してきたが、やはり自己の視点・分析だけでは「子どもの実態」を把握するには不足していた。家庭での様子、同僚教員との情報共有、個別の指導計画等の情報、日頃の記録を通して、より生徒の実態を深く把握することができることを改めて実感した。校内でのテーマ研修の授業改善に向けての取組や実態把握チェックリストの活用、校外研修での授業改善や実態把握のための意見交流、メンタープログラムによるカンファレンスやレジュメでの授業総評の中から、自分では気付かないような実態把握の「視点」やそのための工夫を知ることができ、それらを日々の教育活動の中で取り入れて子どもの実態を多面的・多角的に把握することをより意識的に行えるようになってきていると考える。

生徒との関係性を深める中で、生徒の実態に迫った授業計画や指導計画を立てることができてきたように感じる。特に体育祭に向けての、体育の跳び箱の授業では先輩教員とのディスカッションを行い、生徒個々の課題や目標を教師が共有し、把握した上で、意図した指導・支援を心掛け実践した。体育祭当日の生徒の演技やその後の様子から、その指導・支援の成果を感じることができ、授業改善や綿密な授業計画・準備の重要性と効果を改めて考えた。生徒の発達年齢と生活年齢を考慮した教材の設定や工夫、実態を元に「発達の最近接領域」を見定めた課題や目標の設定を行うなど、どうすれば子どもが主体的に「学び」を深めていけるかを常に考えることの重要性を考える機会となった。このように「授業は子どもの発達を保障し、迫ることができるもの」であることを、この一年で実証的に学んだ。子どもの障害特性やパーソナリティに関わりや客観的な視点から把握し、意図した指導・支援を行なっていくことの意義を、校内研修・校外研修・メンタープログラム、そして「子どもたち」から体系的に学ぶことができた。

「教師も重要な教材、環境の一つである」ということを管理職やメンター教員、先輩教員から学び、子どもの「モデル」として言葉がけや態度をはじめ、日常の言動一つひとつにも意識を向け「子どもの発達と安全を保障する」ことを念頭に、今後も研究と修養を重ね、根拠に基づいた教育活動に取り組んでいきたい。さらに「子どもの困難さや課題」を中心に置き、教師やあらゆる立場の専門家、保護者、時には本人とも連携をはかり、チームで対応していくことを大切にしていきたい。

授業力をつけるために

和歌山県立紀北支援学校 平畑慎吾

子ども一人一人に想いをよせて

チーム（相担 同僚 管理職）で子どもの課題に関わる

カンファレンスで授業力アップ

何が分からないか、どうすれば分かるかを考え、教材工夫を行うことの大切さを学んだ

子ども一人一人に想いを寄せて

- 中・高学年、中学部、高等部、卒業後を見据え、教員がしなければいけないことは？
- どのように学べばより良くわかるか？



- ・実態把握（個々の学びを知る）の重要性
- ・指導案の精査と合理的配慮を考慮した授業準備

実態把握

・クラス子ども（自閉スペクトラム症）の実態把握を適切にすることで「構造化」の手法を活用することができた

・メンタープログラムによるカンファレンスやレジュメでの授業総評の中から、自分では気付かないような実態把握の「視点」やそのための工夫を知ることができた。それらを教育活動で取り入れて子どもの実態を多面的・多角的に把握することをより意識的に行えるようになってきていると考える。

・子ども個々の課題や目標を教員が共有し、把握したうえで、意図した指導・支援を心掛けた実践。

指導と授業準備

・子どもの立場に立った「当事者意識」を大切に、単元設定を考える際、また、課題が理解できない場合において「2W1H」を常に意識し、子どもの様子をよく観察する

・授業を構成する上で2W1Hの重要性。

WHAT…何を教えるか、何を目標とするのか、何を教材にするのか
WHY…なぜ教えるか、なぜそれが指導目標なのか
HOW…どう教えるか、どのように分かりやすくするのか を常に考える

三反田教授のカンファレンスより

・子どもたちが学習に意欲を持てるような授業準備

- － 導入段階は「驚き」を重視
- － 展開では「共感」が得られるように
- － まとめでは「納得」を持ち達成感を得られるような工夫

教員として大切な資質

情緒が安定している人で、偏見を持たず、常に明るく、にこやかに子どもと接する人

心身ともに健康な人

偏らず調和のとれた人で、横道にそれず常に正しい道を歩む人

社会から孤立せず、物事に対し、社会と共通の理解や関心を持ち、一般教養があり、健全な趣味や娯楽をたしなむ人



子どもを愛し、子どもに関心を持ち、子どもを理解しようと努力する人。そして何よりも「人」として子どもを大切にすること

三反田教授のカンファレンスより

まとめ

授業力をつけるために

- ・子ども一人一人に想いをよせて
- ・相担、同僚の先生からのアドバイス
- ・カンファレンスから得られた知見

教員として大切な資質



プログラムにより『授業力』『教員としての資質』を意識できる環境ができた。教員として自ら学び続けることの大切さを知り成長することができた。

一年間の自分の学びと成長

和歌山県立和歌山さくら支援学校

奥山 昌美

教材準備の設定や工夫の向上

去年、私は小学校の特別支援学級の担任をしていました。算数や国語の教科を取り出し、指導していました。算数の授業などでは具体物を使って指導したり、ワークシートを穴抜きにしたりと教科の工夫をすることはありましたが、授業に見通しを持たせるような手立てや、ぱっと見てすぐにわかるような構造化された教材は特に使用してきていませんでした。なので、特別支援学校で働くようになって、授業の見通しや構造化された教材をはじめて見たときは、とてもわかりやすくて驚きましたし、去年からこんな教材を知って使えていればなあと反省したのを覚えています。

今では、そのような教材を準備したり使ったりすることが当たり前になりましたが、それを当たり前に見えるようになった所に自分の成長を感じます。私は学年の図工の授業を担当していますが、図工に使用する材料は視覚的に分かりやすく準備することを心がけており、少しずつ出来るようになってきました。図工は材料や道具が多いので、ひとりひとりがぱっと見てわかるように意識しました。個々にトレイを用意し一人分の教材を用意する、材料を分類する、見本には写真を用意する、などの当たり前のことですが、使いやすいような工夫を心がけました。

教材の設定については本当に難しく、この1年間の私の課題でした。何年生のときにはこんなことを学習すれば学力が付く、という教科書があるのが小学校でした。そのようなガイドラインが支援学校にもあればいいのに、と何度も思いました。ひとりひとり特性や課題が異なるため、ねらいも異なる子どもたちです。彼らを同じ授業でそれぞれに力を伸ばしていくということが本当に難しく、日々悩んでいました。

難しさの原因の一つは、児童の実態把握の甘さだと感じています。その時、その場の児童の姿しか見ることが出来ず、適切な支援や教材設定が出来ていませんでした。出来る力を持っているのにふざけてみせる児童には、その行動の裏に自信のなさだったり失敗したくない気持ちだっったりの気持ちが隠れていました。そのようなことを理解せずに指導をしてしまっていたため、本当の児童の実態をつかめず適切な支援が出来ていませんでした。

しかし、先輩の先生方のお話を聞くうち気づくことができました。このことから、他の先生方と話をする機会をもつことの大切さを学びましたし、これからそのような機会を積極的に持っていければなと思いました。

これからも先輩の先生方にいろいろとお話を聞いたり経験したりしながら、取り組んでいきたいと思えます。

一年間の自分の学びと成長

和歌山県立和歌山さくら支援学校

草道 正博

初任者研修を通して、学びの丘の研修やメンター制による初任者研修プログラムに参加し、また学校現場での実践などたくさんの学びがあり、とても充実した1年を過ごすことができました。その中で自分自身「授業への心構えに関する向上」と「教材準備の設定や工夫の向上」がありました。もっとも学び・成長でき、1年間の研修などで自分の視野が広がったところだと思っています。授業へ向かうにあたっての様々な準備の方法があることを知ることで、授業準備の段階にあたっての教師同士の横の連携の大切さや生徒の実態把握、主指導の授業の目的・目標設定、技術力、教材選びなど今まで以上に授業に対する心構えの意識が変わりました。具体的な取り組みや成長したと感じたところについて以下に述べていきたいと思っています。

学びの丘での研修に参加して、1コマ1コマの授業のつながりの大切さやわかる、発見がある、興味を持たせる授業作りの方法や工夫を知ることができました。研修の場では同じ初任者の先生たちと一緒に講義や協議を行い、いろいろな考えや視点があることに気づかされることがたくさんありました。特に他の先生の模擬授業を観させて頂く機会が多くあり、教材の工夫や児童、生徒にわかりやすく、なおかつ楽しませる興味を持たせる教材には驚きがたくさんありました。またそれぞれの教科の視点の付けどころにも考えさせられるところもありました。学校現場では、学校生活を生徒たちと共にして生徒たちから学ぶこともたくさんありました。クラス活動や授業での生徒たちの障害の状態や活動の様子を目の当たりにして、子どもたちの可能性の広さを知り、自分自身の視野の狭さが再認識させられました。まだまだ様々な経験や学びが必要だと感じました。夏の宿泊研修では、1泊2日での研修ということもあり、授業に関する話し合いが夜まで行われました。1つの授業を作るのに様々な観点をまとめるのに時間がかかりました。その分全体で行う模擬授業では、グループみんなの意見や考えを取り入れた授業ができたと思います。また他のグループの模擬授業を観ることができた所も良かったと思います。同じ授業で自身の模擬授業と違った視点を発見することができ勉強になりました。公開授業研ではたくさんの支援学校の先生や違校種の学校の先生にも観に来て頂き自分の授業での必要どころや改善点など意見をしてもらい、気づかなかったことや、違う視点を発見することができました。放課後のカンファレンスでは、初任者の先生が集まり、障害の特性やさくら支援学校に通う生徒の実態についての話し合いが行われ実践に活かすことができました。また授業を観に来て頂き、教具の使い方や教材の提示の仕方、生徒への言葉かけなどアドバイスを頂くことができ、とても参考になりました。

初任者研修の1年間を通して、「授業への心構えに関する向上」と「教材準備の設定や工夫の向上」に成長がみられ、このような経験ができ嬉しく思っています。様々な人と出会い、様々な場所での研修を行い、たくさんのことを学ばせて頂きました。この貴重な経験を今後の教師生活に活かしていくのと同時に、このような機会を作って頂いた和歌山県教育委員会や研修で講師を務めて頂いた先生、学校現場の先生方、生徒に感謝の気持ちでいっぱいです。また、さくらの初任者の仲間と共に協力して取り組み、助けてもらったことにも感謝しています。感謝の気持ちを持ち続け、2年目は、もっと積極的に子どもたちと一緒に楽しみ、共に成長していきたいと思っています。

一年間の自分の学びと成長

和歌山さくら支援学校

平田 郁子

一年間、初任研をとおして各障害に関わること、授業に対する取り組み、教材設定・提示の仕方や使用方法などたくさんを学んだ。初めての数学の授業で、数の学習を行うのに教材を準備していったが、教材の工夫が足りず、さらに使用方法についても考えが足りないとカンファレンスの指導をとおして痛感した。子どもたちが本当に理解しているのか？子どもたちの実態にあった授業内容となっていたのか？などと、自分のなかで疑問が湧いてきた。

授業の反省、課題から授業内容をもう一度考え直し、教材も生徒にとってよりわかりやすいものとなるようにした。数の学習では、魚釣りを単元とし、釣った魚の数を数えた。はじめは魚の形にラミネートしたものを準備していたが、形が違うため子どもたちが数を数えるときに数えにくいと感じた。次の授業から、魚の形ではなく、四角のカードに魚が描かれているイラストを使用し、すべての魚を同じ形にした。10までの数を数えるのが難しい生徒集団なので、数えるときに5ずつのまとまりで数えられる数えボードを準備した。さらに、数字を読むのが難しい生徒には数字カードを用意し魚カードと照らし合わせられるようにした。また、全員で確認ができるように、数えボードを前に貼れるようにし、5ずつのまとまりで繋げられるようにして数えやすくした。教材設定を変え、工夫を加えること、動線を考え直すことで、生徒の授業への取り組み方が変わり（興味を示し）、集中できる時間が増えた。毎回、同じ流れで授業を行うことで、生徒にも授業の流れがわかりやすく、より取り組みやすかったと思う。「数の学習」という単元一つをとっても、教え方や教材設定、工夫、環境設定などたくさんやり方があると思う。まだまだ試行錯誤を重ねながらで、まだまだ不十分な授業であるが、次への課題も見つかり取り組み始めている。

授業をするにあたり、教材準備は欠かせないものでありとても大切である。一年をとおして、毎回の授業で子どもたちによりわかりやすく授業を展開していくために、何をねらいとして授業を進めるのか、どんな言葉かけや環境設定が必要かしっかり見極めることが大事である。カンファレンスや研究授業をとおして、自分に足りないものがたくさん見え、課題が浮き彫りになった。授業案を考えるのに、果たしてこのねらいで難しすぎないだろうか？ねらいが多くなっていないか？もっとねらいをしぼって授業展開をしたほうがいいのか？などと、以前より考えるようになった。

一年間の自分の反省と成長をこれからは生かし、常に自分に問いかけながら、授業や研修、コミュニケーション等を重ね、初心の気持ちを持ち続けてこれからも成長していけるようにしたい。そして、学び続ける教師でありたい。

1年間の自分の学びと成長

和歌山県立和歌山さくら支援学校

立谷 果林

4月に和歌山さくら支援学校に初任として赴任し、小学部へ配属となった。初めてのこ
とばかりで、戸惑うことも多くあった。特に、授業に関しては不安を感じることも多くあ
った。しかし、約1年が経過した現在、授業に対して不安を感じることも少なくなり、自
分自身が楽しんで授業をできることが多くなった。子どもたちも興味を持って意欲的に授
業に取り組む姿が多く見られるようになってきた。授業に対する不安を自分自身が感じて
いた頃は、自分の不安が態度として出てしまっていたことで、子どもたちにも不安を感じ
させてしまっていたのではないかと思う。授業に対する不安や戸惑いがなくなってきた要
因として、「慣れ」ももちろんあるが自分が不安なく授業ができる納得できるだけの授業の
準備もあると考えている。小学部1年生の担任ということもあり、子どもたちの最初は授
業に対して手探りで、子どもの実態も十分に掴めない中で授業をしていた。そのため、「準
備はしたけれどこれでいいのか」と納得はできないまま授業することもあった。しかし、
子どもたちの実態も掴め、先輩教員からのアドバイスや初任研、メンター制のカンファレ
ンスの中で自分では見えていなかった視点から授業について考えることができた。そうし
た中で、「この力をつけるためにこれをしたい」「これができるからこれをしよう」という
授業をする自分の中できちんと意味づけをした上で、準備をして納得して授業ができるよ
うになった。

また、子どもたちとの関わりの中での声や態度を強く意識するようになった。自分では、
抑揚をつけて話しているつもりでも、「もっとオーバーにしてもいいのかな」と感じるアド
バイスをうけることがあり、それからは授業や休み時間などにも意識するように心がけて
いる。実際に声や態度の重要性を強く感じたのが音楽の授業である。声や態度を意識する
までは、指示が行きとどかないことや子どもたちが楽しめる空気を作り出すことができ
ていなかったように感じる。しかし、声や態度を意識するようになり、前に立つ自分自身に
子どもたちが注目してくれるようになり、以前よりも楽しんで楽器を鳴らしたり身体表現
に取り組んだりする子どもたちの姿が見られるようになった。

このようなことを経験する中で、きちんと意味づけをして授業をできるだけの実態の
児童の実態把握と教材研究、授業準備、そして授業をする自分自身の声や態度の重要性を強く感じ
る1年であった。そのため、これからもこれらのことを大切にして日々子どもたちと関わり
ていきたいと考えている。

V アンケート調査結果より

アンケート調査結果の概要

細田能成
(プロジェクト・ジェネラルマネージャー)

岡崎 裕
(和歌山大学教職大学院)

1. はじめに

平成28年4月の教職大学院開学と同時に、和歌山市内小学校1校、紀の川市内中学校2校、岩出市内小学校2校、県立支援学校2校を連携協力校とし、そこに配置された初任者19名を対象に「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」がスタートした。本プログラムは、文部科学省初等中等教育局から委託の「総合的な教師力向上のための調査研究事業」によるものである。具体的には、連携協力校の初任者・若手教員に対する授業参観とカンファレンスにおける授業の振り返りを中心に、初任者・若手教員の実践力、および校内指導教員等のメンターとしての力量の向上を図るとともに、校内研修の活性化や質の向上を目指すプログラムである。

今回の調査は、和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会、岩出市教育委員会、紀の川市教育委員会の協力のもと、連携協力校7校の学校長、拠点校指導教員、校内指導教員、初任者を対象に、本プログラムの考察・評価と改善・充実という視点から実施した。調査結果は複数年に渡り実施されるプログラムの初年度における成果や課題を暫定的に示すものである。

なお、調査結果における不明な点の確認や詳細内容の把握については、月1回実施する校内研究支援会議におけるメンター制プログラム教員（メンター制連携協力校を担当する大学教員）や実務家教員の情報、授業評価シートや学校訪問報告書の内容、また、昨年11月に実施した連絡協議会における各連携協力校の学校長の意見等により、その確認と把握に努めた。

2. 調査の目的と内容

本調査の主たる目的は、本プログラムの成果と課題を捉え、目標がどの程度達成されているかを一定把握することにより、本プログラムの考察・評価を行うとともに、その改善・充実を図ることにある。また、調査結果の考察を通して、「初任者・若手教員の実践力向上に向けた研修のあり方」、「メンターや学び続ける教員が育つ環境のあり方」「校内研修の活性化の進め方」の追究に役立てることができればと考える。そのため、初任者への指導的立場にある学校長、拠点校指導教員、校内指導教員に対しては、「学び続ける教員」への成長という観点から、教員が継続的に成長する環境づくりなどに対する意識と具体的な取組、初任者の成長とその要因、本プログラムの連携協力校教員への影響、ならびに本プログラムへの要望等についてリサーチすることとした。また、初任者に対しては、「学び続ける教員」に成長するために努力している点、校内カンファレンスにおける指導助言と自己の成長、自己の成長要因等について調査を行うことにした。

3. 調査結果

2016年度より和歌山大学と地元教育委員会、並びに連携協力校の協働によって実施している「教職大学院と連携したメンター制による校内支援プログラム」の初年度における効果測定、並びに評価を行うにあたって、2016年11月から12月にかけて、プログラムに協力いただいた各学校の学校長、並びに初任者の研修にあたる拠点校指導教員、校内指導教員、さらに初任者教員本人に対してアンケート調査を行なった。当該調査は複数年次に渡るプログラムの初年時における成果を暫定的に示すものであり、最終的な評価に至るものではないが、当面プログラムの進捗を測るものとして、中間的にその効果を客観的に示すものである。

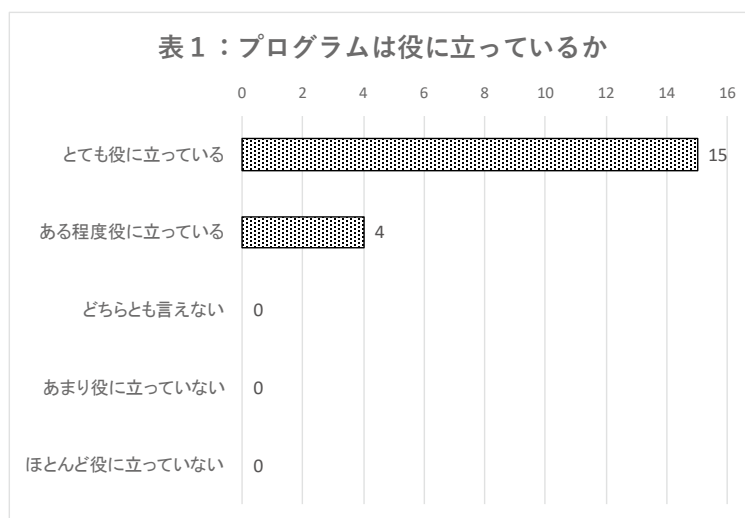
(1) 初任者や若手教員の「学び続ける教師」として重要と考えられる点について

まず学校長の立場からは、「知識・技能の習得」や「研修に向けた積極性」など初任者や若手教員の成長に対する直接的な期待が認められる一方、「他の教員との連携」、「立場を越えた合意形成」、中堅教員となるにあたっての「リーダーシップへの期待」など、教員間の関係性への言及が多く見られた。また、そうした「連携」を促進するための「システムづくり」、「組織づくり」といった記述も見られ、学校長の立場からの組織改革への強い意欲がうかがえる。

次に拠点校指導教員からは、若手教員に対し継続的な「意欲」を持ち続けることへの期待が見られ、「新しい物事への挑戦」、「日々の研究と努力」、「他との連携」として「謙虚さ」など冷静かつ客観的な言葉が並ぶ一方、ベテラン教員からの後進に対する暖かい「エール」が見て取れる。

校内指導教員からは、若手・新任教員に対し、「適切な助言・見せる実践」、「同僚との交流」、「一緒に考える」など、先輩として、そして若手・新任教員にとっての職務的ロールモデル(メンター)としての視点がみられる一方、「子どもの実態を適切に把握する」、「独りよがりにならず、常に振り返る」など、後輩教員に対するとともに、(おそらく「若手」であろう)自身に対しても教員としての在り方を問うている。

(2) 「初任者の成長している点」について

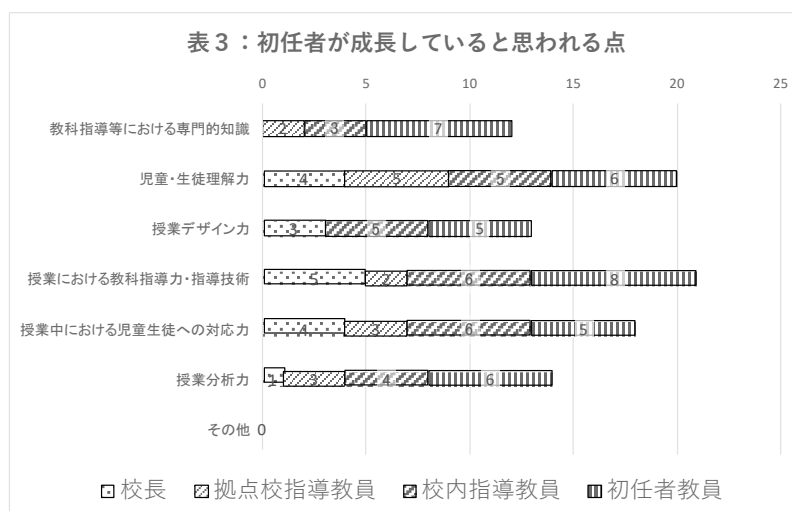
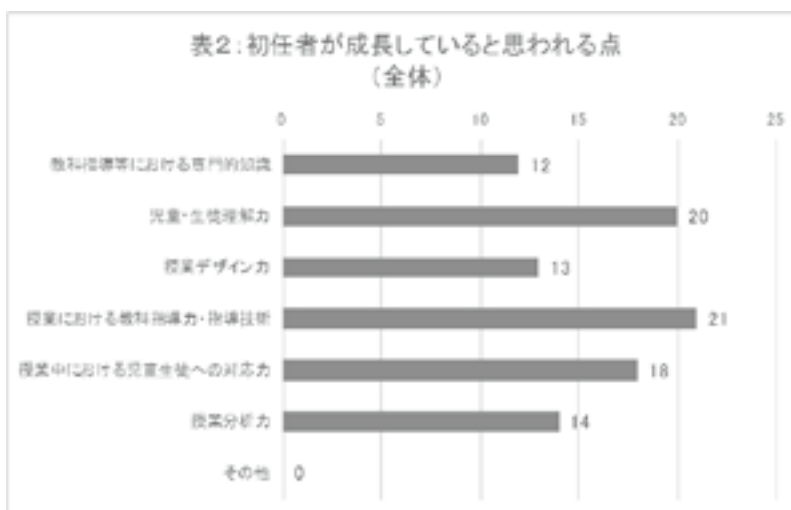


「本プログラムが、初心者の成長にどの程度役立っていると思われますか。」

この設問については、初任者本人を除く校長、拠点校、校内指導の各教員に対して問うているも

のである。結果的には、表 1 にみられるように、全員が「とても役に立っている」、「ある程度役に立っている」と回答しており、そうしたことから、当該プログラムの実施にあたっては、その関係者は概ねその効果をポジティブに認めていると思われる。

さらにその回答者に対し、初任者が成長していると思われる点について具体的に尋ねたところ、全体としては、「教科指導における専門的知識」、および「授業デザイン力」といった項目がやや低いものの、設定した各種技能については、概ね成長を認められているようである(表 2)。



ただこれを、回答者それぞれの立場によって分けて分析してみると、やや特徴的な傾向が見て取れる。学校長は初任者の「児童・生徒への対応力」、「指導力・指導技術」、「児童・生徒理解力」といった、技術的な部分についてはその成長を評価する一方、「専門的知識については、その評価はなかなか厳しい。これに対し、拠点校指導教員は初任者の「授業デザイン力」を全く評価しておらず、逆に専門的知識における成長は多少なりとも評価をしている。これは学校長と拠点校指導員という立場の違いなのか、あるいは、授業等を間近で見る距離の違いなのか理由ははっきりしないが、「知識」と「技能」という意味において多少なりともその評価の傾向に違いがみられた。

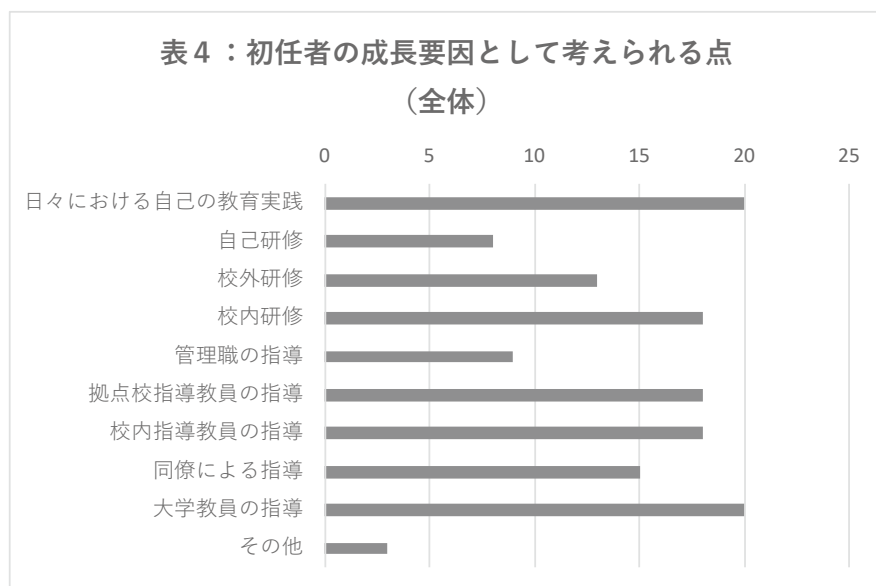
今回の調査において、初任者に対してもこの設問と同じ項目を使って「自分が成長していると思われる点」という形で、質問している。その回答結果を合せ表 3 として示す。この表は実数によって

示しており、直接の比較はできないものの、初任者においても自身の成長を一定程度客観的に認識している姿が見て取れる。興味深いのは校内指導教員の回答傾向と初任者のそれが比較的良く似ている点で、このあたりからも、初任者教員と「メンター」たる校内指導教員との距離の近さが確認できるのである。なお、当該質問項目の自由記述欄においては、多くの関係教員の方が本プログラムの特徴である授業後における「カンファレンス」の実施と ICT 機器の活用による「映像を使った振り返り」に関してポジティブな記述をされており、こうしたことが初任者の成長に大きく貢献しているという認識をうかがわせるものとなっている。

(3) 「初任者の成長の要因」について

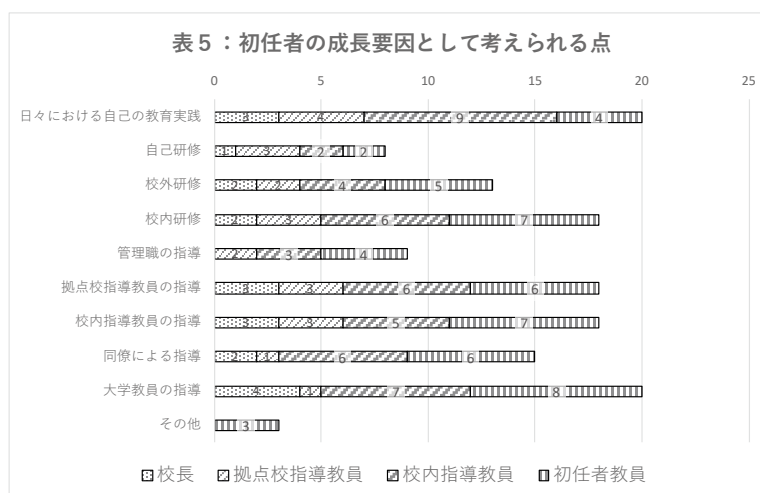
このプログラムにかかる初任者教員が一定の成長をしたとすれば、それはいかなる要因によるものか、問い方を変えながら、同一の選択肢について、複数回答によってそれぞれの立場の教員に聞いている。

まず全体としては、「自己研修」に関する認識が低く、周りの人々との、いわゆる「協働的な学び」の成果としての認識が強い。それは拠点校指導教員、校内指導教員、そして大学からのプログラム教員の指導に対する評価にも表れているところである。そして、おそらくそうした周囲からのサポートに基づいた、「日々の教育実践」もまた初任者のスキルを高める要因として認識されている。「管理職の…」が低くなっているのは、現実の問題として管理職が個々の授業内容に触れることができないという構造的な問題であろう。ただここで、「大学教員の指導」が高くなっていることについては、当面はやむを得ないものの、「メンターを育てる」あるいはそのシステム作りという観点から言えば、今後の課題といえるかもしれない。



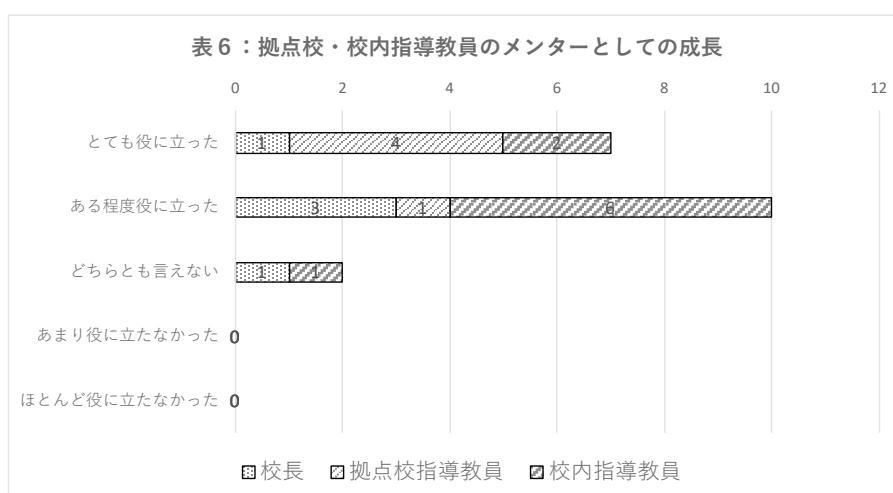
この結果を立場によって分類したものが下の表5である。この表から顕著に読み取れることとして、まず、校内指導員において、初任者の成長は「日々における自己の教育実践」が突出して高くなっていることがあげられる。これは、若き先輩教員として、自身の経験からくることが、あるいはごく近くで(同じような立場から)初任者を見るときに、やはり習うよりも「馴れよ」ということか。また、拠点校指導教員において同僚、あるいは大学教員の指導が、成長要因として低い評価となっていることがやや気になるところである。これらの立場が、「初任者指導」という意味においてややあいまいな立

場であることがその原因かもしれない。自由記述においては、特に初任者本人から、「多くの先生に意見をもらえてありがたい」という意見が複数見られた。



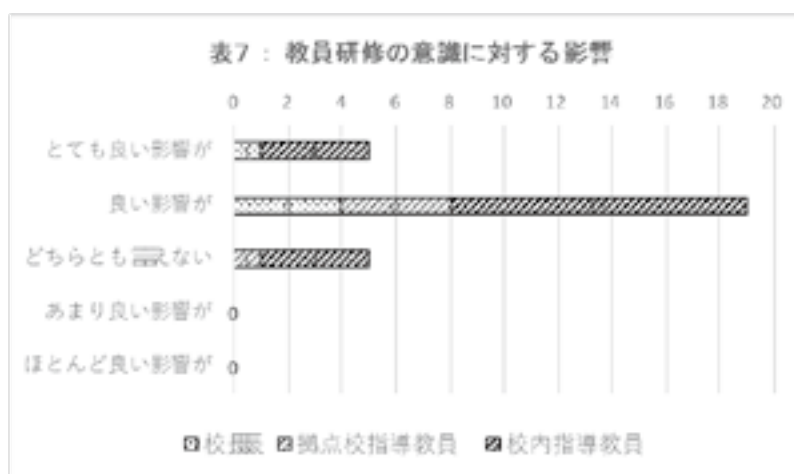
(4) 拠点校・校内指導教員のメンターとしての成長

本プログラムとしての主眼である、職場におけるロールモデルとしての先輩教員の指導体制に関して、初任教員を除く関係各位に聞いている。右表に示した結果を見ると、一定高い評価を得ているように見えるが、自由記述日部分を詳細にみていくとやや異なった傾向が見えてくる。管理職からは、特に校内指導教員については、新任教員を指導する立場になることによって、自身の成長に効果があった、という意見や、校内指導教員自身からも、「新任の指導の仕方が学べた」あるいは「自分自身が勉強になった」など積極的な評価がみられる一方、「校内指導教員としてカンファレンス等に参加する機会が少ない」、「他の授業を見ることができない」などといった、構造的、物理的な課題が散見される。特に小学校等、他の教員の授業に日常にかかわることが難しい場合、「指導者」という立場そのものの位置づけを検証する必要があるように思われる。この点は、今回のプログラムにとって核心的な部分でもあるため、次年度に向けてはより詳細に検討してゆくべき課題である。



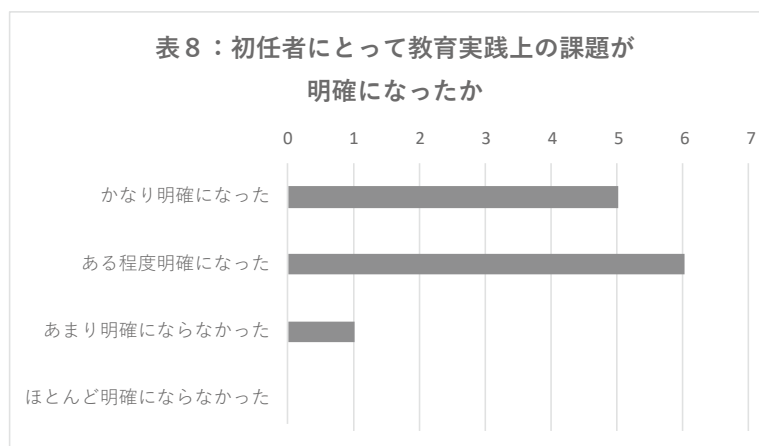
(5) 教員の研修に対する意識の変化

本プログラムの実施にともなう、教員研修に対する意識の変化について聞いた。この設問についても初任者以外の教員に聞いている。数値的に見ると、結果的には概ね肯定的な評価を行っている。ただ、これを自由記述に基づく反応を通してみると、やや違った様子が見えてくる。右のグラフ(表 7)からも分かるように、特に校内指導教員のレベルにおいて、評価がやや下方に振っている。実際に先生方の記述として、「あまり授業を参観できていない」とか、「カンファレンスに参加できていない」といった答えがあり、要するにここでも、先の 4 の設問と同様、構造的な問題が影響している。ただ、管理職、ならびに拠点校指導教員のレベルにおいては、言葉としても積極的評価が多く見受けられた。



(6) 初任者として実践上の課題が明確になったか

この設問については、当然ながら初任者教員のみにも聞いているものである。結果的には、いずれの初任者においても、概ね肯定的な評価を行っている。自由記述においても、ここでは 1 名を除き、関係各位に対する感謝の言葉とともに、関係教員からの多角的な指導の成果が評価されている。ただ問題は、ここで対象となっているのがあくまで今年度採用になる新任教員であるということであり、彼らにとっての実践上の課題というものが、物理的に実践経験に乏しい彼らにとって、どの程度「実践」的であるのかについての検証が、場合によっては必要なのかもしれない。要するに課題が明確になるのは、むしろ 2 年目以降の「これから」ということになるであろうか。



(7)本プログラムの充実を図るうえで、改善すべき点や要望事項

この設問については初任者以外に聞いているものである。ここでは、プログラムの今後の改善にあたって、特に重要と思われる課題を中心に記載する。

①県教育研修センターにおける講座内容との重複

プログラムの対象となる学校の初任者教員は、一方で県教育研修センター(学びの丘)における研修も並行して受講しているため、内容的に重複する部分が生じている。今後のすり合わせが期待される。

②対象となる初任者における負担感

報告の作成や公開授業の準備など、結果的に対象となる初任者の負担が増大している。指導対象の授業回数を減らすなど、具体的な手立てを講じてもらいたい。

③校内指導教員などが、授業を見たり、その後のカンファレンスに参加できるような体制づくりが必要。

④拠点校指導教員による指導とのすり合わせが必要。結果的に初任者にとって二重の負担になっている。

上記のような声は複数寄せられており、次年度以降のプログラム実施にあたって改善すべき点として大いに参考になるであろう。

メンター制プログラムの成果と課題

細田 能成

(プロジェクト・ジェネラルマネージャー)

「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」の目指す内容は二つある。一つは初任者や若手教員の実践力の向上であり、もう一つは校内指導教員等のメンターとしての力量を向上させることにより校内研修の活性化や質の向上を図ることである。この二つの目標を一定達成させるには、初任者や若手教員の実践力向上への取組に校内指導教員等が直接的に関わり、メンターとしての力量向上につなげることができればと考えた。そのため、初任者や若手教員の参観授業、研修の場として位置づけた校内カンファレンスを、週1回定期的に実施した。

本プログラムの連携協力校である7校には、初任者の指導に当たっている拠点校指導教員や校内指導教員がいる。この両者と大学から派遣されるプログラム教員との関わりや役割等については、プログラム推進当初から懸念される場所であった。そのため、本プログラムの趣旨と目的が、連携協力校の学校長をはじめ、他の教職員に十分に理解されるか、大学が連携協力校とどれだけの協力体制を整えられるかに、このプログラムの成否がかかっていたと言える。

実際、各連携協力校に派遣されたプログラム教員は、学校との良好な関係を構築することに心配り、本プログラムの二つの目標を常に意識しながら真摯に取り組んでくれた。その結果、連携協力校の教職員とはある程度良好な関係が構築できたものと判断する。このことは、本プログラムの考察・評価と改善・充実の視点から実施した調査結果や、連携協力校連絡協議会における各学校長の意見等からも理解できる。

初任者や若手教員の実践力向上の検証は極めて難しく大きな課題である。そのため、実践力向上については、授業力に視点をあてその向上を図ることに努め、可能な限り検証を客観的にできるようにした。具体的な実施内容としては上記の通り、連携協力校における初任者や若手教員の参観授業と校内カンファレンスでの授業の振り返りの実施である。

連携協力校の訪問については、参観授業→振り返り→課題の発見→授業改善への練り上げ→改善を意識した参観授業(翌週)を一つのサイクルとし、それを一年間継続的に行った。また、校内カンファレンスでは、授業風景の動画や授業評価シート等を活用しながら、教材研究の深さ、授業の導入と学びへの興味・関心、授業の展開と学びの意欲・態度、時間配分と授業のリズム・テンポ、質問や指示の仕方、子どもの意見の取り上げ方などの視点から、初任者や若手教員が主体的に授業を振り返り、改善されつつある点や当面の課題を明確にすると同時に、課題解決と授業改善の具体的方策について、拠点校指導教員や校内指導教員、プログラム教員とともに追究していく手法をとった。

初任者や若手教員が「学び続ける教員」として成長するためには、その成長に深く関わる同僚、学び合い高め合う学校風土が極めて重要であることから、本プログラムでは、校内カンファレンスへの校内指導教員等の関わりを積極的に進め、校内研修の活性化に努めたが、その取組は円滑に推進されたとは言えず、本プログラムの大きな課題となった。

では実際に、調査結果や授業評価シート、プログラム教員の学校訪問報告書等を踏まえ、本プログラムの目標がどの程度達成できたかを考察していきたい。

本プログラムが初任者の成長にどの程度役立っているかという調査項目の結果をみると、学校長の7人中7人、拠点校指導教員の7人中6人、校内指導教員の11人中7人が、「とても役立っている」と回答し、そう回答しなかった残りの5人(拠点校指導教員1人、校内指導教員4人)も「ある程度役立っている」を選択している。初任者の成長という点においては、本プログラムはかなり高い評価を受けていると判断してよい。

初任者が自己の成長を実感している具体的な内容については、回答数の多い内容から①「授業における教科指導力・技術指導」(19人中12人)、②「授業中における児童生徒への対応力」(19人中9人)、③「教科指導等における専門的知識」(19人中8人)、④「児童・生徒理解力」「授業デザイン力」「授業分析力」(19人中7人)となっている。

これらの調査結果を見ると、全体に占める当該初任者の割合はどの内容においてもそう高くない。このことは、初任者の授業の振り返り力と関係していると思われる。

初任者が授業評価シートにより自己評価を行うと、34項目中ほとんどの項目において厳しい評価を行う。多くの評価項目において、初任者は拠点校指導教員やプログラム教員よりもかなり低い評価をする傾向にある。このことは、実践経験豊富な拠点校指導教員やプログラム教員に対するある種の気後れによるものとも考えられるが、初任者の多くが授業を客観的に振り返り、分析・評価する力が十分に定着していないことによる結果と判断する。

カンファレンスによる授業の振り返り力の育成は重要な課題である。授業の振り返り力の向上は、授業改善を意識した授業実践につながる。授業が改善されつつあるという実感は喜びとして受け止められ、継続的な学びにつながる。成長の自覚は、教師としてやっていけるという自信につながる。だからこれら一連の体験は初任者にとっては大事な体験である。今回の結果は、成長したと実感できる力を具体的にイメージできなかったことによるものか、自信を持ってないまま内容を選択できなかったことによるものか、少し自信のある内容だけを謙虚に選択したことによるものか、あるいは、表現されている力の意味内容が理解できず選択を躊躇したことによるものか、表現されている力の意味内容は理解しているが選択できるほどの力はないと判断したことによるものかなど、回答の背景にあるもの明確にし、次年度のプログラムの改善・充実に活かすことが喫緊の課題と言える。

初任者が比較的その成長を感じているいくつかの項目について詳しくみることにする。

「授業における教科指導力・技術指導」については、年間30回の参観授業と校内カンファレンスでの振り返りを主な判断基準に、初任者の63.2%が成長を実感している。学校長全員はその成長を認めているのに対し、拠点校指導教員は8人中3人、校内指導教員は11人中6人とその割合が低い。この回答について詳細をみると、「授業における教科指導力・技術指導」で成長を認識した拠点校指導教員3人全員が小学校であり、校内指導教員の6人中4人までがやはり小学校である。このことは、中学校のようにある専門教科の授業を年間にわたり参観し成長を評価するのとは異なり、小学校では複数の教科等の参観授業を通して、教科指導力・技術指導に安定した成長を見取った結果ではないかと

推察する。

プログラム教員の学校訪問記録や授業評価シート、あるいは校内研究支援会議での意見等を踏まえると、参観授業での初任者は、児童生徒の発言のそれぞれに一对一の対応はある程度できるが、児童生徒一人ひとりの性格や仲間関係、理解力や表現能力などの実態を踏まえた授業展開や、授業で生きる児童生徒の発言を拾い上げ、他者の発言へとつなげ、学級全体に広げ深めるといった対応力には一定の課題があると言える。また、支援を要する児童生徒についても、声かけなど一定の気配りはできるが、その思いをくみ取った適切な指導や支援という点でさらなる成長を期待したいところである。

こうしたことから、調査結果での「児童生徒理解力」「授業中における児童生徒への対応力」について確認してみたい。

「児童・生徒理解力」と「授業中における児童・生徒への対応力」については、学校長、拠点校指導教員、校内指導教員の三者ともが、子どもへの理解力と対応力の向上を関連づけ判断していると思われる。小学校及び特別支援学校の学校長、拠点校指導教員、校内指導教員は、子どもに対する理解力と対応力における初任者の成長を概ね認めているが、中学校の場合は、三者とも子どもに対する理解力の向上は認めつつも、対応力の向上については評価が低い。三校種とも、子どもの学校生活の中心に授業を位置づけ、子どもへの理解力と対応力は授業成立の重要な要素として考えていることは確かであるが、中学校の場合、生徒指導や部活動指導といった範囲までも視野に入れた回答であると判断する。また、中学校は教科担任制に対し、小学校では学級担任、特別支援学校では複数のほぼ同教員がほとんどの教科を教えるという状況にあり、授業の成立基盤は仲間づくり、学級づくりである。そうした取組の過程において子どもへの理解が進み、そのことが適切な対応となって授業に反映されているとの観察結果であると考えられる。

「教科指導等における専門的知識」に関しては、初任者が19人中8人に対して、学校長の7人中2人、拠点校指導教員の8人中3人、校内指導教員の11人中5人という結果で、それぞれ半数にも満たない。このことは、教科指導等での実践経験が豊富で、専門的な知識を有する学校長、拠点校指導教員や校内指導教員からすれば、教師に求められる専門的知識には一定のレベルが必要であるという考えに立った判断であるとともに、学び続ける教員への成長に対する期待の結果と推察する。

なお、「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」に関わる10名の初任者の回答をみると、この項目で成長を感じている割合が10人中8人と高い状況にある。このことは教職大学院での授業に特化した科目を受講していることと大きく関係しているものと思われる。

「授業分析力」および「授業デザイン力」については、その成長を実感している初任者の割合は4割にも満たない。初任者は校内カンファレンスでの振り返りを通して課題の明確化は図れたが、課題の明確化は拠点校指導教員や校内指導教員、プログラム教員の指摘によるところが大きく、授業を丁寧に振り返り、自ら考え分析し、課題を発見し、課題解決に向けた具体的な考えを一定練り上げ、授業改善につなげるという力はまだ十分には身につけていないとの自覚の結果であろう。

これら二項目における初任者の成長という点については、学校長、拠点校指導教員、校内指導教員ともにその評価は厳しい。初任者が熱心に授業の工夫・改善に取り組んできた

ことは事実ではあるが、拠点校指導教員や校内指導教員からみれば、初任者の直面している授業上の課題がほぼ同じ内容で、その解決も思うように図れないまま授業が改善されにくい状態にあるとの判断結果と推察する。こうした状況を改善するためには、プログラム教員が中心となり拠点校指導教員や校内指導教員とともに、校内カンファレンスの授業の振り返り方や進め方などについてより協議を重ね、その改善・充実に努める必要があると判断する。

次に、初任者の成長要因に視点をあて、同僚との関係や学びの環境等について考察してみたい。

初任者の成長要因について、比較的高い割合を示す3項目を列記すると、「大学教員の指導」「校内研修」「同僚による指導」となる。

「大学教員の指導」については、学校長の7人中6人（86%）、校内指導教員の11人中9人（82%）と、両者ともプログラム教員（大学教員）の指導が初任者の成長を支援していることを認めている。そのことは初任者自身も認識し、成長の最大要因（19人中13人：68%）にあげている。

一方、拠点校指導教員の認識は異なり、初任者の成長とプログラム教員の指導との関係性に対して厳しい評価をしている。これは、特に中学校においてその傾向が強く、初任者とプログラム教員の専門教科が一致している場合にはその指導力を発揮するが、そうでない場合には一般的な指導助言等にとどまり、初任者の要求には十分に答えられていないという現状に起因していると推察する。実際、小学校では拠点校指導教員の4人中3人が、初任者の成長とプログラム教員の指導の関係性を認めている。このことは、小学校教員が学年によらずほぼ同じ教科等の指導にあたるため、小学校での実践経験の豊富なプログラム教員による指導・助言は、初任者の授業力向上への思いに十分に答えるものであるとともに、その観点や内容においても拠点校指導教員と一致することが多いためと考える。

次に、「校内研修」と初任者の成長との関係について、校種別でみる。

小学校は学校長と拠点校指導教員の各3人、校内指導教員並びに初任者の各5人の総数16人において、初任者の成長と校内研修の関係性を認識している者の占める割合は、16人中13人で81%と高い。同様に特別支援学校の場合は18人中12人で67%、中学校は11人中5人の45%となっている。また、各立場からみると、学校長は7人中4人で57%、拠点校指導教員は8人中6人で75%、校内指導教員は11人中8人で72%、そして初任者は19人中12人の63%である。

立場によって校内研修への考え方も違い、学校によって校内研修の体制や内容も異なるであろうが、拠点校指導教員や校内指導教員は、初任者の成長には校内研修が重要と受け止めているとともに、自校の研修内容にも一定の評価をしているものと思われる。初任者にとっても、校内研修が学校や児童生徒に対する理解、並びに日々の教育実践に有効と捉えるとともに、教師としての自己の成長に必要なとの認識から一定の評価をしているものとする。学校長の場合、校内研修と初任者の成長との関係性についての認識はそれほど高くない。このことは、学校マネジメントや校内研修等の責任者という立場から、自校の研修が学校や教員の実態に即したのか、自校の課題を見据えた内容となっているか、総合的な教師力向上につながっているかなど、内容的に適切で充実しているかを慎重

かつ客観的に判断した結果と推察する。

「同僚による指導」との関係については、初任者の教科等の指導に深く関わり、初任者の同僚でもある校内指導教員の認識は高く、小学校においては5人中4人、中学校では3人中2人である。初任者自身は同僚からの指導をどのように感じ受け止めているかを、アンケート調査結果の自由記述からいくつか抜粋し、ここで確認しておきたい。

- ・同僚の先生に悩みや普段の様子などコミュニケーションをとっていく中で、アドバイスや行動の方向性を示してください。
- ・授業についてアドバイスをもらうことが多く、実践につながられました。
- ・日々の授業づくりや、児童とのかかわりの中で、同僚の先生方に頂くアドバイス、授業後の反省会で頂く意見など、次につなげることができました。
- ・私の中学校では研究授業が多く、他教科の先生方の授業を参観できる機会が多くあります。また、初任ということもあり、多くの先生が私の授業を見てくださりアドバイスをいただくので、成長につながっていると思います。
- ・自分自身の指導については、今よりもっとできるようになりたいと思い、先輩方にアドバイスをいただいています。「うまくいく」ためのアドバイスは、非常に心強く自分の頑張りのエネルギーとなっています。

初任者の自由記述の多くに見られるように、初任者が良好な関係を構築できた同僚は、心のこもった助言をしてくれる心強い存在として初任者には受け入れられている。学校や教職員の状況、子どもや保護者の実態、初任者の状態など踏まえたその言葉は、日々の授業実践等に活かせるアドバイスとして気さくに受け止めていると思われる。同僚が授業の内容や方法等について互いに適切なアドバイスをすることは、学び合い高め合う学校風土の構築につながる可能性がある。構築の段階にまで導くためには、校内研修の体制を整え、校内研修の活性化と質の向上を図ることが重要である。ここに「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」の目標の一つがある。プログラム教員は、連携協力校の要望に応じ大学教員の派遣をはじめ、校内研修の場での講演や講義、プログラム教員による示範授業、講師の授業参観とカンファレンスの実施など、連携協力校における校内研修の活性化や質の向上を図る取組を積極的に進めてきている。しかし、目標が十分に達成されている状況には至っていない。今後は、連携協力校の校内研修支援という観点から、学校長や教職員の要望を十分に踏まえた支援内容を計画的に実施していくなど、本プログラムには新たな取組の推進が求められるものと考えられる。

次に、本プログラムがどの程度役立っていると認識されているかを把握するために、学校長に対しては「校内指導教員の成長」、拠点校指導教員には「初任者への指導」、校内指導教員には「自己の学び」という点で調査しているが、その結果は次の通りである。

①学校長の場合

「とても成長した」が7人中2人、「ある程度成長した」が7人中4人で、「どちらとも言えない」が7人中1人である。

②拠点校指導教員の場合

「とても役立った」が8人中7人、「ある程度役立った」が8人中1人となっている。

③校内指導教員の場合

「とても役立った」が11人中3人、「ある程度役立った」が11人中6人、「どちらとも言えない」が11人中2人である。

この結果からも分かるように、本プログラムは、学校長から見て「校内指導教員の成長」に、拠点校指導教員にとっては「初任者への指導」に、また、校内指導教員には「自己の学び」に役立っていると認識されている。これらの点で本プログラムに対する評価は極めて高い。「初任者・若手教員の実践力向上に向けた研修のあり方」や「メンターや学び続ける教員が育つ環境のあり方」を追究する上で、何らかの示唆を与えてくれる可能性がある。このことは、本プログラムを推進した成果の一つと言える。ここでその具体的内容を自由記述の抜粋により確認しておきたい。

○具体的内容

- ・ 授業改善の観点が明確になり、校内指導教員等のミドルリーダーとしての指導力向上につながった。(学校長)
- ・ 本人たちにとっては、毎週の授業研は大変であろうと思うが、一回一回が身についていると思われる。また、校内指導教員として他校と比べ指導力も向上していると思われる。(学校長)
- ・ 拠点校指導教員とのマンツーマン指導では、どうしても指導教員の持っている指導法を中心に、ややもすれば偏った指導法で行うことになるが、カンファレンスがあることで、大学の先生をはじめとする多くの先生方の持っている指導法に触れることができ、初任者のみならず自分自身も大変有意義であった。(拠点校指導教員)
- ・ 自分が気づけなかった視点を示してくれる。(拠点校指導教員)
- ・ 主観でなく客観視できた。(拠点校指導教員)
- ・ 初任の教員に指導するための専門性の高い視点を本当に丁寧に教わることができている。(拠点校指導教員)
- ・ 他の先生の授業を参観することで、自分の授業の振り返りもできたとし、客観的に考える機会となりました。(校内指導教員)
- ・ 初任の先生に週2回授業を公開することで、自分の授業を見直す良い機会になっています。(校内指導教員)
- ・ 改めて授業内容や子ども達とのコミュニケーションについて考えさせられることが多いです。(校内指導教員)
- ・ 初任者の授業についての協議に参加する中で、授業を見る視点や初任者に対する指導の仕方について学ぶことができました。(校内指導教員)

本プログラムの教員全体に対する研修意識への影響については、学校長、拠点校指導教員、並びに校内指導教員に回答を求めた結果があるので、自由記述の抜粋による内容とともに確認しておきたい。

①学校長の場合

「とても良い影響があった」が7人中3人、「良い影響があった」が7人中4人とな

っている。

②拠点校指導教員の場合

「良い影響があった」が8人中7人、「どちらとも言えない」が8人中1人である。

③校内指導教員の場合

「とても良い影響があった」が11人中4人、「良い影響があった」が11人中4人、「どちらとも言えない」が11人中3人となっている。

学校長、拠点校指導教員、校内指導教員の多くが、本プログラムが教員の研修に対する意識に良い影響を与えているとの認識を持っている。こうした研修意識への良い影響をさらに大きいものにし、学校全体に教員の研修意欲の高まりが広がるような手立てを講じることで、本プログラムの目標の一つでもある「校内研修の活性化や質の向上」の達成に大きく近づくことになると考える。その具体的な手立てを検討・協議し、二年次のプログラムを円滑に推進させるとともに、多くの成果を上げるよう努めたい。

○具体的内容

- ・ 若い教員を中心に、話し合い考える授業をデザインしようと心がけるようになった。(学校長)
- ・ 教材研究を行い、授業を見ていただき、カンファを受けることが習慣づいた。(学校長)
- ・ 初任者が毎週定期的に大学教員の訪問を受け、熱心に研修に取り組む姿を目にするにより、他の教員（特に2年目、3年目の若手教員）に大きな刺激となり、好影響を与えたことはまちがいない。(学校長)
- ・ 初任者や若手教員が行う参観授業や放課後のカンファレンスに可能な限り大勢の先生方に参加してもらうことで、拠点校や校内の指導教員任せになりがちだったのが、管理職を先頭に全教職員で育成指導にあたっていこうという気風が職場に根付いてきた。(拠点校指導教員)
- ・ 新採教員だけでなく、若手教員の指導に対する意識が向上したように思われる。(拠点校指導教員)
- ・ 現職教育での講演や初任者以外の学級の授業指導などを通して、本校教育の学びに対してあるべき姿を示してくださいました。(校内指導教員)
- ・ 前向きに取り組む職員にとって、授業を見ていただき指導をいただく機会が身近にあるというのはとてもよかったです。(校内指導教員)
- ・ 緊張感を持つことができ、よりよい授業をめざすことができていると思います。(校内指導教員)
- ・ カンファレンスが週に一度と短いインターバルでの実施だったので、常に教育について考えていることができ、学ぶということのモチベーションを高めることができました。(校内指導教員)

多くの学校長は、教員一人ひとりが学び続ける教師へと成長するための取組として、教師が学びたい、成長したいと思える環境づくりに努めている。本プログラムの校内カンファレンスが、初任者や若手教員の学びの場であると同時に、多くの教員が授業改善のため

の学び高め合う場として活用されれば、学校長の多くがめざす学校風土づくりにつながるものと期待する。

連携協力校7校の教員の中には本プログラムに対し一定の理解を示すとともに、校内カンファレンスに積極的に参加してくれた教員もいたが、教員の参加数や活発な協議という点で課題を残したと感じている。この課題に対する具体的な解決策を検討し、プログラム全体の質の向上を図りたいと考える。

最後に、校内カンファレンスの指導により教育実践上の課題が明確になったかどうかという調査項目の結果を見ると、「かなり明確になった」と回答した初任者は19人中7人、「ある程度明確になった」は19人中11人、「あまり明確にはならなかった」は19人中1人であった。

このことは、学校訪問報告書の内容や校内研究支援会議での意見交換からも容易に理解できる。すなわち、①校内カンファレンスでの授業の振り返りが初任者主体で進められたこと、②モバイル端末で撮影した授業風景の動画を見ながら授業を振り返らせたこと、③子どもの様子に注目させたい場面は繰り返し画像で確認させたこと、④振り返りの最後に授業評価シートによる自己評価と他者評価を行ったこと、⑤課題に対する指導教員の指摘の方法が初任者自ら課題発見ができるよう工夫されていたこと、⑥指導・助言が課題解決や授業改善への具体的かつ的確な内容となっていたこと などによるものと考えられる。

初任者は教育実践上の課題がある程度明確になることにより、意識して課題解決に取り組もうとする。そうした取組の継続が授業の改善につながるとともに、授業に対する省察力を向上させる。初任者のほぼ全員が程度の差はあれ、明確にした課題を意識しながら教育実践に取り組めるようになったことは、本プログラムの大きな成果である。

この「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」に参加した19名の初任者が、常に授業改善をめざし、学び続け、成長し続ける教員となることを願ってやまない。

